

有機体とプロセスの哲学による〈環境〉と〈自然〉の今日的理
解—ホワイトヘッドの環境思想とターミノロジーの視点から

Current Understanding the 'Environment' and the 'Nature' through
the Philosophy of Organism and the Philosophy of Process: From
the Perspective of Whitehead's Environmental Thought and
Terminology

2 0 1 1 . 3

東京農工大学大学院

連合農学研究科

農林共生社会科学専攻

岡谷 大

はじめに

本論の目的は、ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947, 以下「ホワイトヘッド」)の哲学を用いて環境問題の解決を図ることにある。

連日環境問題のニュースや番組が流れ、環境破壊の悲惨な現状や取り組みが紹介される。しかし今日の科学・技術や行政の取り組みだけでは、いつまでたっても環境問題は解決しそうもない。そこで環境問題の表層ではなく、否応なしに進行している環境問題の深層、構造に迫らなければならないのではないかとと思われる。それは例えば市場原理の下、人間と自然が商品化されているという認識か、あるいは社会全体に進行する合理化によるものとみるか、「生活世界」システムと「経済」システムとの対立とみるかなどさまざまな見解がある。

今日いわゆる脱近代の時代といわれ、ほとんどこれまでの主要な思想・哲学体系(大きな物語)や社会体制が崩壊した。環境思想の面でもいわゆる脱近代が必要なのではないか¹。それは科学・技術、行政、哲学・倫理の難点を解決するための総合性、体系性、リアリティをもち、或る意味独自のものであろう。それは例えば本研究で考察するホワイトヘッドの思想のように、人間も自然もともにライブニッツのいう、存在を説明するための概念であるモナド(monad、単子)として連帯して、主体-主体の生き生きとした「関係」と捉える思想ではないのか。そういった面から環境思想を考察してみたい。上記の総合性、体系性、リアリティは、本研究全体を貫くキーワードである。

2章でのべるように、確かに環境思想の中では「環境倫理」に関してこれまでいくつかの試みがあったが、世界観や存在論などを背景としたいいわゆる「環境哲学」は少なかつたように思われる。本研究で取り上げるホワイトヘッドは、まさにそうした明確な世界観や存在論的立場にたった側面を備えていたと考える。本研究では環境哲学の淵源を脱近代のホワイトヘッドの哲学、とりわけ有機体の哲学やプロセスの哲学に求めたい。極論するならば環境哲学はホワイトヘッドの哲学を措いてないと思うからである。

実際背景となっている近代思想の克服、例えばデカルト的な身心二元論の批判などは、環境思想にとって示唆するものが多い。そこで、その独自の概念や難解な用語(ターミノロジー)などさまざまな理由によって、ホワイトヘッドの哲学がこれまで十分とりあげられなかったという側面を払拭する意味もこめて、特に環境を中心にクローズアップし、ある意味環境哲学の先駆者として、明確に環境思想の歴史に位置づけてみたい。そこからこれまでの環境思想の理論的・实际的論点を照射したい。ホワイトヘッドの独特なコスモロジー(世界観、宇宙観)、相対性理論に立った時空観、有機体観(有機体の哲学)、プロセス哲学などは、われわれに多くの示唆を与え、環境問題以外にも一般的にも広く応用が利くものと考えられる。

さらに本論では特にそれらの概念の応用の実際例として、環境の把握や脱近代の明確な価値意識をもった、いわゆる共生と持続を根本とした共生型持続社会について考察し、望まれる未来の環境に配慮した社会の展望を描きたい。

そこで、特に論ずべきポイントとして以下3項目を挙げる。

1. 人間中心主義か自然中心主義かといった、環境問題の本質
2. 有機体とプロセスといった、ホワイトヘッドの哲学の本質
3. ホワイトヘッドの哲学の具体的な応用

以上の問題意識、問題設定をもとに、各章節は構成される。

1 に関してまず第 1 編で今日の環境問題の背景をなす近代の科学・哲学の限界を示し、それを超克した哲学者であるホワイトヘッドの位置づけを明らかにしたい。

第 1 章では、環境の定義について述べたのち、環境問題の変化やその構造と意味（尾関周二によれば、環境破壊は人間破壊である）について論じたい。次いで環境問題に対する取り組みに関して、国際レベルや国家レベルの政策面、社会経済面、個人レベルからの取り組みなどについて概観したうえで、環境問題に対する思想・哲学・倫理面の取り組みの必要性について論考し、いわゆる存在論に立った環境哲学の先駆的な発想をホワイトヘッドに求めたい。

第 2 章では、科学・技術、政策の問題を、哲学や倫理などの深い次元から検討するとともに、さらに生態論（エコロジズム）に基づく人間—自然関係の捉えかたについても考察したい。具体的にはあくまでも人間を中心にものごとを見る「人間中心主義」やその反対に、Aldo Leopold(レオポルド)を淵源とするところの、人間も自然の一種であるとみなす「自然中心主義」との関係・対立、功利主義の視点をふくむ動物の解放の議論、さらには自身ホワイトヘッドの影響を受けた、H. Jonas(ヨナス)による世代の関係を問題とする世代間倫理、社会派としての M. Bockchin(ブクチン)などの環境社会派、そしてこれまでの環境リベラリズムに対抗して政策を重んじる、最近の環境プラグマティズムなどを検討したい。さらに第 2 章第 4 節では、環境破壊の諸原因と人間破壊との関連、環境政策の限界や環境思想の主要論点の検討から帰結されるさまざまな側面での対立・矛盾に鑑み、これまでの哲学がもっていなかった総合性、体系性、リアリティなどをともに持った哲学、すなわちホワイトヘッドの哲学が必然的に要請されることを強調したい。これらの論点に対して、ホワイトヘッドの哲学を用いて、いかに理論的、現実的に解決を図るかが第 2 編の課題となる。

次に 2 に関しては第 2 編の第 3 章と第 4 章でホワイトヘッド独自の有機体の哲学とプロセスの哲学を中心としたホワイトヘッドの思想を理論的に考察したい。特に難しいとされるホワイトヘッドの主要な概念の意味をときほぐし、ホワイトヘッドの近代哲学との理論的格闘や、思想の形成過程、関連分野の説明の後、ホワイトヘッド独自の思想の特色や問題点、方法論を考察し、環境問題への応用に結び付けたい。

まず第 3 章でホワイトヘッドの哲学思想をたどり、その形成過程を端的に追ってみたい。主著『過程と実在』を中心に、彼の諸著作を通して、その思想の全体像に迫りたい。また環境の視点に絞って、科学哲学などの関連する分野も紹介し、そこから導かれるいくつかの特色をあげてみたい。関連してホワイトヘッドにみられる主要な方法論、特に弁証法について補項において考察したい。

プロセスと弁証法との関連について、つまりホワイトヘッドの哲学、プロセスの哲学はヘーゲルの弁証法と関連が深いのではないかという点や、有機体の哲学とプロセスの哲学との相互関連を比較検討したい。

次に第4章ではこれまでの論述で明らかにされたホワイトヘッドの思想の中心であるコスモロジーが、具体的にはどうやって現実世界を形成していくのかを明らかにしたい。つまりホワイトヘッドの有機体とプロセスに関する具体的な主要概念を挙げ、その環境思想上の意味を明らかにしたい。特に世界の構成要素である現実的実質(actual entity)については、関連する科学、量子力学、相対性理論、モノドロロジー、生命、経験などについて論考したい。すなわち世界を構成する究極的実体としての有機体の哲学、つまり現実的実質(ライプニッツのモノドロロジーと類似)の視点が必然であることや、ホワイトヘッドのいうように、人間も自然も現実的実質の一つではあるが、人間は動物、植物、鉱物とは違った人間独自の感情などがあるといった面を検証したい。

一方こうした現実的実質同士の動きであるプロセスでは、「モノ(物)からコト(事、出来事)へ」というホワイトヘッドの視点や、方法論としてプロセスと弁証法、コントラスト(対照化)、システムとの関係を考察し、さらにホワイトヘッドの哲学に独自の抱握(prehension)や合生(concrescence)についても論じたい。現実的実質相互の関係である抱握では共生やコミュニケーションとの関連を明らかにするとともに、分析手法としての現象学にも注目したい。また現実的実質の具体的な生成である合生では、現実的実質の「多」から「一」への決定と収束の過程など、相の展開による世界の創造の具体化とリアリティとの関連を明らかにしたい。特に合生の過程はヘーゲルの弁証法と関連が深いことを明らかにしたい。

さらにホワイトヘッドと社会理論や目的論をホワイトヘッドのいう「秩序」(order)の視点から特に環境の問題として掘り下げたい。すなわち「秩序」を基にしたホワイトヘッドの社会哲学や、目的、文明と創造、永遠的客体(eternal objects)などの側面を検証するとともに、ホワイトヘッドの知覚の三重構造により、環境の知覚から環境の把握へというパラダイムチェンジを論じ、ホワイトヘッドの哲学の実際的な意味について考察したい。

以上のホワイトヘッドの思想に関して、環境思想の現状と関連づけてみたい。例えば Roderick Nash(ナッシュ)などなどの環境の研究者によるホワイトヘッドの環境思想としての評価と、John B. Cobb Jr.(カブ)などのホワイトヘッドの後継者の思想を紹介したい。これらの後継者によって以下に紹介する実際の活動がなされていることは言うまでもない。

最後に3に関して、第1編での環境破壊の構造や意味、環境政策の限界、環境思想・哲学の論点の確認のもと、第2編第3章と第4章で展開したホワイトヘッドのコスモロジーや主要概念の環境にとっての意味をめぐる議論をうけて、これからの望ましい環境・社会づくりについて第5章で模索したい。具体的に

は、ホワイトヘッドに独自の時空論、システム論、現実的実質という対象をもとに、現実的実質の共在と連帯を基とした共生型持続社会の思想や今後の方向との関わりについて検討したい。

第5章第4節では、ホワイトヘッドやカブによるコミュニティの考え方や、特にホワイトヘッドの農業観や Okamoto による農業実践と理論を紹介し、環境へのホワイトヘッドの哲学の応用可能性を示し、環境に配慮した社会の未来を考えたい。第5章第5節では、ホワイトヘッドの主要な概念やモデルを用いて今後の望ましい環境社会のシナリオを提示したい。

さらに補論として本研究中たびたび触れた、ホワイトヘッドにみられる主要な用語（ターミノロジー）について検討したい。

【注】

- 1 尾関周二、『環境と人間学の革新』、青木書店、2007

■	はじめに	・・・	i
■	【注】	・・・	iv
第 1 編	環境問題の概要	・・・	1
第 1 章	環境問題の諸相	・・・	1
	第 1 節 環境の定義	・・・	1
	第 2 項 環境問題の変化	・・・	1
	第 3 節 環境問題の構造と意味	・・・	2
	第 4 節 政策面からの取り組み	・・・	3
	第 1 項 国際レベルの取り組み	・・・	3
	第 2 項 国家レベルの取り組み	・・・	4
	第 5 節 社会経済面からの取り組み	・・・	4
	第 6 節 個人からの取り組み	・・・	5
	【第 1 章 小括】	・・・	5
	【第 1 章 注】	・・・	5
第 2 章	環境思想の論点とホワイトヘッド	・・・	7
	第 1 節 環境問題と近代思想	・・・	7
	第 2 節 環境思想の流れ	・・・	9
	第 3 節 環境倫理の論点	・・・	9
	第 1 項 人間中心主義と自然中心主義	・・・	9
	第 2 項 動物解放	・・・	11
	第 3 項 世代間倫理	・・・	12
	第 4 項 環境社会派	・・・	12
	第 5 項 環境プラグマティズム	・・・	13
	第 4 節 環境問題解決の限界とホワイトヘッド	・・・	13
	【第 2 章 小括】	・・・	15
	【第 2 章 注】	・・・	16
	【第 1 編のまとめ】	・・・	17
第 2 編	有機体とプロセス哲学による人間と自然の解明—共生型持続社会へ むけて	・・・	18
第 3 章	ホワイトヘッドによる環境思想の形成と特色	・・・	18

第1節	思想の形成過程と関連分野	・・・	18
第2節	思想の特色と問題点	・・・	26
第1項	特色	・・・	26
第2項	問題点	・・・	27
補項	方法論をめぐって	・・・	29
1)	プロセスの哲学と弁証法	・・・	29
2)	弁証法と対照化（コントラスト）	・・・	30
【第3章	小括】	・・・	31
【第3章	注】	・・・	31
第4章	ホワイトヘッドの環境思想—主要概念	・・・	34
第1節	コスモロジーと環境	・・・	34
第1項	既存のコスモロジー	・・・	34
第2項	ホワイトヘッドのコスモロジー	・・・	36
第3項	コスモロジーと環境、関係項	・・・	36
第4項	コスモロジーと時空論	・・・	38
第2節	有機体—人間と自然	・・・	41
第1項	有機体と生命	・・・	42
第2項	現実的実質と生命	・・・	44
第3項	現実的実質とモナドロジー（単子論）	・・・	45
第4項	現実的実質と経験論	・・・	47
第3節	現実的実質とプロセス	・・・	48
第1項	プロセスとは	・・・	48
第2項	抱握	・・・	50
第3項	フィーリング（感じ）：積極的抱握	・・・	53
第4項	合生—プロセスの具体化	・・・	55
第4節	環境の知覚から把握へ	・・・	57
第5節	社会と秩序	・・・	58
第6節	目的と文明	・・・	59
第1項	ホワイトヘッドの目的論と文明	・・・	60
第2項	永遠的客体	・・・	61
第7節	ホワイトヘッドの評価と後継者の思想	・・・	61
第1項	環境思想としての評価	・・・	61
第2項	後継者カブ等による展開	・・・	64

	【第4章 小括】	・・・	65
	【第4章 注】	・・・	65
第5章	共生型持続社会へ向けて	・・・	69
	第1節 持続とシステム	・・・	70
	第1項 ホワイトヘッドのシステム理論	・・・	70
	第2項 持続に関するカブ等の理論	・・・	71
	第2節 共生	・・・	72
	第1項 共生の意味	・・・	72
	第2項 共生とホワイトヘッドの連帯性	・・・	72
	第3節 共生型持続社会	・・・	73
	第4節 コミュニティにおける共生型持続農業の実践	・・・	74
	第1項 ホワイトヘッド、カブとコミュニティ	・・・	74
	第2項 ホワイトヘッド、カブと農業	・・・	75
	第3項 Okamotoによるコミュニティでの農業実践	・・・	76
	第5節 ホワイトヘッドと未来の環境に配慮した社会	・・・	77
	第1項 はじめに	・・・	77
	第2項 環境問題の取り組みとホワイトヘッド	・・・	77
	第3項 展望	・・・	79
	【第5章 小括】	・・・	79
	【第5章 注】	・・・	79
補論	ホワイトヘッドのターミノロジー	・・・	81
	第1節 用語について	・・・	81
	第2節 用語の科学（ターミノロジー学）	・・・	81
	第3節 事例	・・・	82
	第1項 現実的実質	・・・	82
	第2項 抱握	・・・	83
	第3項 合生	・・・	84
	第4節 おわりに	・・・	84
	【補論 小括】	・・・	85
	【補論 注】	・・・	85
	【第2編のまとめ】	・・・	86
■	総括と展望	・・・	88

■	注・参考文献	...	98
■	謝辞	...	101

第 1 編 環境問題の概要

第 1 編では環境を巡る諸相とその背景としての近代の思想や主な環境思想(環境哲学と環境倫理)について概括するとともに、環境問題に関する科学・技術、行政、哲学・思想の論点とその解決策を探り、そこに潜む対立点や対立軸を抽出、検討する。

第 1 章 環境問題の諸相

第 1 節 環境の定義

環境については、いろいろな定義がある。例えば、国際標準化機構の規格 ISO14001 によれば、環境とは「大気、水質、土地、天然資源、植物、動物、人及びそれらの相互関係を含む組織の活動をとりまくもの。ここでとりまくものとは、組織内から地球規模のシステムまでに及ぶ」と定義され、非常に広い捉え方がされている。また、ゆえに、環境とは「ある主体をとりまき、直接間接に関係を持つものすべてを指すもの」と理解してよい。しかし、各主体や取り扱う学問分野によってその内容が変化する。環境に関連するターミノロジー(用語)の例を次にあげる。

心理学や精神医学の分野において、人に関わる家族、友人、職場、顧客などのかかわりを「人的環境」という。コンピューターのオペレーティングシステムやアプリケーションの設定を「環境設定」という。環境の中でも主に自然に関する諸問題を環境問題という。生物とそれを取り巻く環境との学問を生態学(エコロジー)という。自然とは山や川、木々や草花、動物、気象などを指し、それと区別して人為的に作られた造形物、例えば、建物、道路、家具などは「物的な環境」「人工物」などとして扱う。

一方、本論で論じるホワイトヘッドの研究者たちの見解によれば、「環境とは、人間が価値の創造を目的とした自己創造の過程において、能動的な相互作用により、常に創造的前進を行う場である」と定義されるという¹。ここで重要なのは、価値の創造と、環境との能動的な相互作用であり、本論の主題となるものである。

第 2 節 環境問題の変化

上述したように、環境はわれわれ人間をとりまき、われわれに対して存在するだけでなく、われわれの生活と深くかかわっている。われわれの生活に影響を及ぼしている環境問題の例としては、大気、土壌、水圏における公害問題や、農業、景観、都市開発における自然破壊、さらには海洋汚染、農産物、食糧確保、森林、飲料水、そして温暖化、地球環境問題などが大きく取り上げられているが、われわれ自身が気づかないうちに自然を汚染し、破壊していることも忘れてはならない。

環境問題は R.Carson (カーソン) の『沈黙の春』(1962) による DDT 等の

農薬（化学物質）の残留性、生態系への悪影響の指摘に基づく公害追及の書や、ローマクラブの『成長の限界』（1972）による資源と地球の有限性の視点からの警鐘などに触発され、世界各地で被害の告発や公害の現状暴露などの動きが大きくなるとなり全地球的に広がった。行政も次第に重要課題と受け止め、公害や自然破壊への対応に本腰をいれるようになった。

環境問題を思想史的にみると、環境問題は第1段階の公害問題、第2段階の地球環境問題、第3段階の内面化・反省化・哲学的思想化と変遷し、多面的な複合問題へと展開されてきたとされる²。すなわち環境問題には、地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨などの問題のほか、社会システムやライフスタイルの変化に伴う都市生活型公害や廃棄物問題、さらには有害化学物質による環境汚染の問題、自然環境の荒廃と生物多様性の喪失（種の絶滅）などがあり、それらは時間的、空間的な広がりとともに、構造が大きく変化してきたのである。哲学思想的に捉えても、社会システムやライフスタイルなど、その視点が豊かな生きがいを求めるようになり、人間の心の問題などにも環境問題は関わっている。

第3節 環境問題の構造と意味

以上の環境問題の構造・意味的な側面として、大規模な森林破壊や大気・土壌・水質の汚染の原因が、表面的なものではなく実は K. Polanyi（ポランニー）のいう「自然と人間の商品化」による、資本主義、市場原理の進行の結果と捉えたり、一方社会の隅々にまで進行する合理主義、官僚主義の結果であると解釈する研究者もいる。また「生活システム」と「経済システム」との対立で考える研究者もいる。さらに後述するように（2章1節）、テイラー・システムなどの科学的管理法への批判もある。そこで環境に関して、グローバルに総合的に問題を捉える必要がある。「環境の破壊は人間の破壊に通じる」という視点が重要である。

時代は異なるが本稿で論考するホワイトヘッドは、既に20世紀初頭に環境破壊に関して次のようにのべている。

「また、単なる物質を全く無価値とする考え方から、自然美や芸術美の取り扱いに敬虔さを欠くようになった。ちょうど西洋世界の都会化が急速な発展を示し始め、新しい物質的環境のもつ美的性質を綿密かつ熱心に考察することが必要になったとき、それまでの美的観念は見当違いであるとする説が隆盛を極めた。工業の最も発達した国々では、芸術は児童に類したものとして取り扱われた。19世紀半ばにおけるこのような精神状態を示すいちじるしい例はロンドンでみられる、すなわちテムズ河がうねりながらこの都市（ロンドン）を貫流している。その河口の素晴らしい美は、美的価値をまったく顧慮せずに建設されたチェアリング・クロス鉄橋によって、気まぐれにも毀損されているのである。この場合二つの『悪』が見られる。一つは、各有機体はその環境と結ぶ正しい関係を見失うことで

ある。いま一つは、究極目的を考える際に考慮に入れなければならない環境の固有な価値を無視する習慣である」³。

上記のホワイトヘッドの文章は、今日の環境問題にも通ずる透徹した表現である。ここでホワイトヘッドのいう「悪」に注目したい。ホワイトヘッドは後述するように、環境と有機体の正しい関係が無視する「悪」、環境の固有な価値を無視するという「悪」について指摘しているのである。つまり環境と有機体がともに連帯して、新しい価値を創造していくことの重要性を説いている思想なのである。

第4節 政策面からの取り組み

本節では、環境問題への政策面での取り組み例について考察する。

・第1項 国際レベルの取り組み

これまでに国際連合を中心とする環境や開発を議題とした会議で活発な議論が交わされ、報告書や宣言、議定書等が採択されている。それら国際的な議論は、1972年に刊行されたローマクラブの『成長の限界』中で示された「地球環境と資源の有限性」の考え方が基礎となっている。主な会議や採択案件としては、1972年6月の「国連人間環境会議」(ストックホルム会議)、1982年の「国連環境計画管理理事会特別会合」(ナイロビ会議)の「世界自然憲章」、1987年の「環境と開発に関する世界委員会」(ブルントラント委員会)の報告書“*Our Common Future*”(邦題『地球の未来を守るために』)における「持続可能な開発」の概念提唱がある。1992年の国連環境開発会議(UNCED)(リオ・サミット)における「アジェンダ21」「森林原則声明」の採択や「気候変動枠組条約」「生物多様性条約」の署名が良く知られている。また、1997年の「地球温暖化防止京都会議(COP3)」における「京都議定書」(温室効果ガス削減目標設定)の採択、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」(ヨハネスブルグ・サミット)などがあげられる。

上記の会議において参加各国は「共通だが差異ある責任」を負うと述べたことは南北間の公正という点で重要な意味を持っている。特にストックホルムでの1972年の「人間環境宣言」では、「人は、尊厳と福祉を保つに足りる環境において、自由、平等及び十分な生活水準を享受する基本的権利をもつとともに、現在及び将来の世代のために環境を保護し、改善する厳粛な責任を負う」とうたわれた。これはJ.Rawls(ロールズ)などの社会正義論や環境正義論、第2章第3節で述べる世代間倫理に関わってくるものである。

一方、環境問題はさらに資源、エネルギーや食糧など多様な側面をもっており、かつての公害などの地域的な問題から、国をこえて地球的規模の拡がりを見せている。地球環境問題が危機的状況に瀕しているにもかかわらず、対応の遅れや鈍さが生じている原因として、①環境問題に係る情報や科学的知見・知識の伝達・理解の不十分さ、②環境問題の因果関係・被害などについての不確

実性の存在と環境リスクに対する理解・認識のずれ、③環境保全に対する意識と行動のギャップなどがあげられ、迅速な対応を図る必要がある。田中裕は、ホワイトヘッドのコスモロジーは環境問題と密接に関係していることを指摘し、「地球の死」について論じている(『ホワイトヘッドの文明論』、行路社,1955)。環境問題はもはや局所的な国や地域の問題ではなく、地球全体の問題として受け止めねばならない。しかし国連は主権国家の連合体であり世界政府ではないので、その実効性にも限界がある。例えば「京都議定書」の締結国に肝心のアメリカのような主要国が参加していないことがあげられる。

ホワイトヘッドはこうした限界に対し、すべてがすべてと主体的に連帯して世界を創り上げていくという思想の持ち主なのである。その具体例は第4章第5節で紹介したい。

・第2項 国家レベルの取り組み

わが国環境省は、今日の環境問題は国民の日常生活や通常の事業活動から生ずる過大な環境負荷が原因と見ており、その解決には、大量生産・大量消費・大量廃棄型の現代社会の在り方そのものを持続可能なものへと変革していく必要性を説いている。そのために①廃棄物対策、公害規制、自然環境保全、野生動物保護、②地球温暖化、オゾン層保護、リサイクル、化学物質、海洋汚染防止、森林・緑地・河川・湖沼の保全、環境影響評価、放射線物質の監視測定、③環境基本計画などと通じた政府全体の環境政策などを積極的にリードしていくと『環境白書』等で表明している。

環境省は無公害型の社会環境の整備・構築や循環型社会の形成、生物多様性の保全などをチャレンジの対象としており、このほか政府レベルでは経産省のエコ・タウン、農水産省のバイオマス・タウン、さらに文化庁関連の景観保全などの取り組みが進められている(5章5節参照)。

これらはいずれもホワイトヘッドが二十世紀初頭に既に予想していたものと符号するところのものであるといえよう。

第5節 社会経済面からの取り組み

第3節で述べたように、環境問題の原因は自然破壊や公害などの表面的なものではなく、ポランニーのいう「自然と人間の商品化」による資本主義・市場原理の進行の結果であると考えられる経済社会学者がいる。また、社会の隅々にまで進行する合理主義、官僚主義の結果であると解釈する研究者もいる。さらに「生活システム」と「経済システム」との対立で考える研究者もいる。それらの論点を整理してまとめあげる社会科学的面からの取り組みが求められ、エコロジー経済学が誕生した。エコロジー経済学は、従来の経済学(近代経済学及びマルクス経済学)が市場と工業を中心とした社会経済であったのに対して、その外部の第二義的世界としての環境の因子を導入した新しい第三の経済学であり、持続可能性の基盤としての自然生態系を研究するという性格を併せ持っている。

さらに科学・技術や社会科学の根底の学問として、思想・哲学がある。しかし環境思想・環境哲学・環境倫理と三様の表現があるように、それらの領域設定に関する議論があるものの、いまだ定まっていない。環境倫理に関しては次章で検討する。

本論で対象とするホワイトヘッドは、独特の時空論など存在論を根底にもっており、ホワイトヘッドの活躍した時代と現代とは科学・技術レベルや社会環境などの違いなどもあるが、ホワイトヘッドは存在論的な「環境哲学」の先駆者として、今日のグローバルな環境問題の主要点を既に取り上げていた初めての哲学者と考えられる。

第6節 個人からの取り組み

既述したように、環境問題は地球が有限であるとの認識のもと、国内・国際的に科学・技術、政治や経済の大きな動きとなったが、同時に、行政や事業者のみならず個々の生活者が一体となって従来のあり方を見直し、総合的、システム的かつ科学的な取り組みを目指していくことが解決のために切望されている。いわゆる「生活世界」からの発想が大切と考えるものである。ライフスタイル、生きがい、経済システムとの対立などがあげられる。例えば各家庭のライフプランにあわせて、バランスをとりながら収入を確保するスタイルが普及している。

さらに具体的には第2章の環境倫理とも関係するが、モノや生き物の大切さ、こころの豊かさなどが求められている。例えば余暇時間を趣味やスポーツ、習い事にあてるなどがある。一方で第5章とも関連するが、最近地域内のボランティア活動や農作業、地域活動に従事する人々が増加し、自然環境と調和した農業への関心、期待が真の意味で高まっている。ここで指針となる、実践に必要な環境倫理や環境哲学が求められてくる所以がある。

【小括】

本章では、一般的な環境の定義とホワイトヘッドの定義を紹介した。次に環境問題の視点の変化、つまり公害問題から地球環境問題への内面化、反省化など哲学的問題へのシフトをのべた。またこうした環境問題が資本主義や市場原理、経済システムと関わっている視点を紹介した。一方、ホワイトヘッドは環境破壊が環境と有機体との正しい関係を見失ったり、環境の内在的な価値を見失うという「悪」の結果だとする見解を紹介した。

次に具体的に国連や国家、社会、個人レベルからの環境問題の取り組みと限界についてのべた。個人レベルでは、環境問題とライフスタイルや生きがいなどの関わりの視点が求められており、相応しい哲学が必要となっている。

【第1章の注】

- 1 猪原政治・伊藤重行、ホワイトヘッドと環境、日本ホワイトヘッド・プロセス学会、2009
- 2 尾関周二、『環境哲学の探求』、大月書店、1996
- 3 Whitehead, A.N, *Science and the Modern World*, Macmillan, 1925 (ホワイトヘッド、『科学と近代世界』1991, p.262)

第2章 環境思想・哲学の論点とホワイトヘッド

第1節 環境問題と近代思想

今日の環境問題の背景にはさまざまな近代思想の流れがある。本章では、はじめに環境問題の背景となる近代思想を歴史的にたどることによって、その意義を確認し、個々の問題への導入としたい。近代思想における人間・自然観の特徴として、機械的自然観、孤立的人間観、生存競争的人間観の3つを挙げることができる¹。

まづ自然に一切の目的を認めず、生体は複雑な機械にすぎないとみる機械論的自然観は、近代の自然観を特徴づけるものとして、しばしばアリストテレス的な有機体論的・目的論的な自然観に対して語られる。例えば エコフェミニズム社会主義者の Carolyn Merchant (以下、「マーチャント」) もいうように、デカルトの二元論の批判がしばしば取り上げられる。確かに全てをモノと心、すなわち延長と思惟とに二分する考えは、その自然の要素への還元主義、分割主義ゆえにホワイトヘッドなど多くの哲学者に批判された(第4章1節1項参照)。しかし、こうした二分法(二元論)のもっていた積極面、つまりデカルトの方法は、たとえそれが「機械論的」という一面的な形態であったにせよ、「科学的方法」の諸要素の確立と相関しており、むしろ科学を促進した面もあったことは認めねばなるまい。すなわち、デカルト以前有力であった有機論的自然観は、その妥当な理論的根拠なしに機械論的自然観に単純に対置された場合、物活論的、アニミズム(生氣論)的自然観という性格を帯びざるを得ないように思われるからである。しかし、それでは、近代科学の持つ意義を正当に評価することができなくなり、結局近代の自然観は、機械論的自然観と物活論的な自然観との分裂の中に在るととらえたほうが適当と考えられる。実際アリストテレスももっていた目的論や有機体論、宇宙を生命体とみたプラトン、ベルクソンのエラン・ヴィタール(生の飛躍、生命自体のうちに、より高度な生命体へと発展していこうとする衝動)、最近では第2章2節1項でのべる Capra(カブラ)の機械論から有機体論へのパラダイム転換、Loverock(ラブロック)のガイア理論など(2章3節1項参照)、ホワイトヘッドへと繋がる哲学の大きな流れが既に構築されているのである。

次に孤立的人間観とは、アリストテレスのいうように人間が植物や動物のように有機的自然のなかにその位置を、目的論的に占めあるいは階層に位置するものではなく、自然から全く独立に存在するという見方である。デカルトにとって人間を人間たらしめるものは、理論的になんら人間の身体性や社会性ではなく、個々の人間の精神であり、理性、自己意識であることに注意したい。この人間精神、自己意識は、一切を客体化する「主体」でもある。外的自然や動物のみならず、他者(第4章1節3項参照)もまたその主体的性格は剥奪され、客体化されたのである。そして、自然は、科学的認識と技術によって把握・操作され、支配されうる対象とみたのである。

ところでまたわれわれが忘れてはならないのは、このデカルト的自我の自明

性とは裏腹に「他者の存在はいかにして認識されるか」といった「他者の存在証明」が理論的なアポリア（難問）となったことである。ホワイトヘッドの他者論（第4章1節3項参照）の「窓のないモナド」（4章2節3項参照）もまたこういった脈絡の中でとらえることもできよう。他者に関していうと、例えばホッブスにとって注目される国家社会は「万人の万人に対する闘争」がその「自然状態」であり、契約によって形成されたものである。こうした「万人の万人に対する闘争」の思想、つまり外的自然や動物のみならず他者をも客体化し、操作、支配する思想の行き着く先の例として、工場における労務管理の一方式であるテイラー・システム（時間分析に基づくノルマの設定や職長制の導入など）などがあげられる。こういった事態を避けるためには、人間の共同的存在性を根底に、人間と自然、あるいは人間と人間における主体－主体関係を基にした共生、コミュニケーションがどうしても必要となるのである。ホワイトヘッドの場合も、主体－主体のコミュニケーション（連帯）が重要であることはいうまでもない。

最後に生存競争的人間観では、例えばダーウィンの進化論は、周知のように生物学の発展にとって画期をなすものであり、その自然淘汰、適者生存とされる自然観は、機械論的自然観と並んで近代の自然観を特徴づけるものといえる。後述するように、ホワイトヘッドもダーウィンやアインシュタインがわれわれの観念を修正することは科学の凱歌だと評価するが、しかしもっぱら自然淘汰だけに頼るのはダーウィン自身の理論の性格ではなかったとし、自然淘汰はいろいろな進化の作業者の一つであったという。

しかしその悪しき例が「社会ダーウイニズム」で、これはナチズムのユダヤ人の大量殺戮や今日も存在する「優生学」思想に見られる差別の人間観の根幹になっているのである。そこで生存競争的人間観に対しては、異種個体間の相互作用を重視する共進化や2章4節で紹介する生態学的な原理と社会原理の相関の指摘から、社会におけるヒエラルヒーや人による「支配」をラディカルに克服する、Murray Bucktin(以下「ブクチン」)のソーシャル・エコロジーなどが注目されるのである。後述するように、ブクチンはエコ・システムの範囲内での小規模な自治体で、直接民主政治によって自然破壊が止まるという。

以上今日の環境問題を考える上で重要な側面として、機械的自然観、孤立的人間観、生存競争的人間観をとりあげたが、それらはいずれも一面的な見方でしかない。注目すべきはこれらの問題に対して本研究で検討するホワイトヘッドはすでに彼なりの回答を示していたことである。すなわちホワイトヘッドはデカルト的な二元論や機械論的方法とは大いに対立し、第4章で詳述する彼独自の有機体の哲学やプロセスの哲学を構築したのである。また世界を構成する究極の実体としての現実的実質(actual entity)相互のコミュニケーション（「窓」を持つモナド）、連帯を強調し、ダーウィンの進化論に対しても冷静な見方をしているのである。前近代の科学、哲学の限界をみきわめ、脱近代へ総合的、体系的にしかもリアリティをもって格闘したのがホワイトヘッドであったといえる。

第2節 環境思想の流れ

第1節では現代の環境問題の背景となっている、近代の科学、哲学をレビューしたうえで、主要な問題点としてデカルトの機械的自然観や孤立的人間観、進化論や社会ダーウィニズムなどの生存競争的人間観をとりあげ有機体論や他者問題などについて論じた。さらにそれら前近代の科学、哲学の限界をみきわめ、脱近代へ総合的、体系的にしかもリアリティをもって格闘した哲学者としてホワイトヘッドを紹介した。

今日いわゆる脱近代の時代といわれ、ほとんどこれまでの主要な思想・哲学体系（大きな物語）や社会体制が崩壊した。環境の面でも、いわゆる脱近代の思想が必要なのではないかと思われる²。それは科学・技術、行政、哲学・思想の難点を解決するための総合性、体系性、リアリティをもち、或る意味独自なものである。例えば人間も自然もともにライブニッツのモナドというレベルで、連帯して、主体－主体の生き生きとした〈関係〉と捉える思想ではないのか。そういった思想を、環境の面からから考えてみたい。そこでこれまでの環境に関わる哲学、倫理などの主な論点を以下に検討してみたい。例えばこれまでの自然の保護か保全か、人間中心か自然中心か、全体か個か、さらには理論か実践かといった対立項が議論されてきたが、果たしてそれらは対立項なのかどうか、またそれらを統合する方向がないのかどうかを模索してみたい。ここにホワイトヘッドの哲学が浮かび上がってくる所以がある。

本研究対象のホワイトヘッドの哲学は、独特の時空論など存在論を根底にもっており、一方ホワイトヘッドと現代とは、時代の違いなどもあるが、ホワイトヘッドは存在論的な環境哲学のいわば先駆者として、今日のグローバルな環境問題の主要点を既に述べていたのである（詳細は4節で再論する）。

第3節 環境倫理の論点

・第1項 人間中心主義と自然中心主義

いわゆる環境倫理をめぐる主要な議論にふれておきたい。まず自然の内在的価値をめぐる、古くは Aldo Reopold（以下「レオポルド」）の wilderness（原生自然）の考えがある³。レオポルドは生態学者であり、環境倫理の祖とよばれる。「原生自然法」（1964）などを作り、「土地倫理（land ethics）」を唱え、森林局に勤務した。また自然環境は、人間の利益に奉仕する手段としてのみ価値があるとする環境保全派として、（自然環境を崩壊させたり劣化させたりする）いかなる人間活動からも自然を保護する環境保護派の John Muir（ミューア）と論戦を張った。レオポルドには「山の身になって考える」という有名な言葉がある。彼は「共同体」概念を自然界全体に拡張し、個体主義はとらない。人間の自然利用は不可避であることを認めたくえて生物個体の利益よりも生命共同体全体の利益を重視した。さらに彼のいう「土地の健康」とは生物共同体の統合、安定、美が保たれていることで、後述するホワイトヘッドの思想（文明

論)と似ている面がある。

現実面ではレオポルドは、オオカミの大量虐殺を原点に、「共同体」概念を自然界全体に適用し、生物個体の利益よりも生命共同体全体の利益を重視した。また生態学思想を環境の基盤として「自然」に権利を与えようとする思想や、伝統的なヨーロッパの近代思想形成である「自然権」を「自然」にも適用するといった思想をもった。このように、生態系中心主義の起点にはレオポルドの「土地倫理」がある。

後述の第2項動物解放で紹介する McDaniel は、レオポルドとホワイトヘッドの関係について論じている。つまりレオポルドによれば人間を含めた被造物は決して孤立してはならないのであり、McDaniel によればレオポルドとホワイトヘッドの強い平行関係がみられるという。すなわちレオポルドのコミュニティの考えはホワイトヘッドの有機体の理論に由来しているのである。また5章のはじめで再掲するが、ホワイトヘッドは森林の環境を、互いに依存しあう種の有機体の勝利と表現しており、ホワイトヘッドの思想からレオポルドの「生物コミュニティ」の思想までは小さなステップですむという。

関連して樹木の訴訟当事者適格⁴や、奄美大島のゴルフ場開発に対してアマミノクロウサギを原告として裁判をおこしたアマミノクロウサギ訴訟が話題になった。これはホワイトヘッドが、自然も人間も現実的実質という面では同じ価値を持つと主張する、そのよい事例である。

一方内面への回帰をめざすディープ・エコロジーは、先般死去したノルウェーの Arne Naess (以下「ネス」)⁵によって形成された。彼は、宗教的な色彩と哲学的素養、言語哲学に明るく、スピノザ、ガンジーにも詳しいとされる。ネスは従来型の人間中心主義で、現在の文明社会を前提としたいわゆる浅いエコロジー(シャロー・エコロジー)と深いエコロジー(ディープ・エコロジー)を提唱し、深いエコロジーでは、人間と自然の一体化によって、真の自己をめざす、Ecosophy T といった存在論、自己実現や大文字の自己、全体論と人間の独自性の把握が特色である。ネスの神秘主義や精神主義は、ある意味ホワイトヘッドとも親近感がある。

Roderick Nash (以下「ナッシュ」)⁶は『自然の権利』の中で、道德には人間と自然の関係が含まれるべきであり、倫理の進化は前倫理的時代の自己にはじまり、家族、部族、宗教と拡大し、さらに現在は国家、人種、人類と続き、ついに動物に至っているという。さらに未来における植物、生命、岩石、惑星、宇宙に至るまで進化は14段階にわかれており、ナッシュの論文「岩は権利をもつか」はレオポルドの土地倫理を精緻化したものだという。ここで岩石のような無機物から惑星へさらに宇宙へという発想は、ホワイトヘッドを思わせる。また後述するようにナッシュは真の意味での生態学者として、ホワイトヘッドを評価している。

John Baird Callicott (以下「キャリコット」)はヨーロッパの古典的倫理であるプラトンの思想に、土地倫理と同じ全体論的な考え方をみている。キャリコットに多大な影響を与えているレオポルドの土地倫理そのものは、ダーウィ

ンの理論の延長上に登場している。それは食物連鎖に代表される一つの生態系（エコ・システム）という考え方である。「自然の権利」は、権利というヨーロッパの伝統的な理念と、動物という生物学的存在あるいは生態系という自然科学的概念を結びつけたものである。

Carolyn Merchant（以下「マーチャント」）は、ホワイトヘッドと同じく有機体論、反機械論、反自然破壊、反女性抑圧などを論点としており、著書に『自然の死』⁷、『ラディカル・エコロジー』⁸などがある（4章7節1項で再論する）。

Fritjof Capra（以下「カプラ」）は、環境の視点としてデカルトの還元主義である機械論から、有機体論へのパラダイム転換をはかった。

またネスのディーブ・エコロジーに影響を与えているものに、James E. Lovelock（以下「ラブロック」）の「ガイア理論」もある⁹。彼は、地球の生命圏が有機的であり、自己維持システムをもつことを、大気の組成や温度の自動調整を例に主張し、ギリシャ神話における大地の女神「ガイア」にちなんで、地球をガイアとよぶ。ラブロックは生命圏を地球の表層全体をおおうものとみなし、生態系よりも広く理解し、生命圏全体はガイアが自動的な自己組織化をおこなう点で「知性的」であり、人間を通じて自分を自覚するという。こうしたラブロックの主張は擬人的で必ずしも論理的でなく、科学的ではないとの批判もある。実際ラブロックも、自分の説が擬人論や目的論と受け取られることを危惧している。ガイア仮説といった見解は、有機体の理論、ホワイトヘッドと共通するものがある。

以上、人間中心主義か自然中心主義かといった議論をみてきたが、ホワイトヘッドの場合は、ガイア仮説と同様に主客未分の現実的実質をベースとしており、意識の方が、経験を前提とするという立場であり、人間中心主義対自然中心主義は対立軸ではないといえる。また尾関は対立から共生へという意味で共生型持続社会を主張していることに注目したい（5章3節参照）。

・第2項 動物解放

動物解放とは動物の権利をどの程度認めるかという論争であるが、例えば動物の解放における功利主義者の Peter Singer（以下「シンガー」）と障害者差別の問題がある^{10, 11}。シンガーは『動物の擁護のために』を編集し、動物解放を展開しているが、利益をもつものは権利を持つと功利主義の立場から一般的に語っているにすぎない。こうした「動物解放論」に対し、動物が権利をもつと明確に主張しているのは Tom Regan（以下レーガン）である。彼は、シンガーのように功利主義に立脚することを批判する。功利主義は「最大多数者の最大幸福」の原則に基づいて利益の相互調整をはかろうとするが、多数者の利益のために少数者の利益を犠牲にすることもあるからである。したがって、功利主義によっては、権利は擁護できないことになる。さらにシンガーたち動物権利論者（アニマルライト派）は「権利」の視点から高等哺乳類のみを権利の対象にしている点が問題と思われる。実際これに対して、レーガンは、急進的動物解放論に立ち、極端な肉食主義で、人間による動物の利用自体を認めてい

ないのである。

ところでホワイトヘッドは功利主義について多くを語らないが、これがホワイトヘッドの社会哲学の一つの論点と思われる。ホワイトヘッド研究者のMcDaniel J.はカブと Birch の『細胞からコミュニテイへ』で、土地倫理研究者と動物解放論者は一つの環境倫理に統合されるべきであるといっている。というのも人間を含めて個々の生き物は、内在的な価値をもっており、生き物は孤立しては生きていけないからだとする¹²。

・第3項 世代間倫理

Hans Jonas (ヨナス) は、ドイツ生まれのアメリカの哲学者で、思想に現在と未来にわたる人間相互の関係を含ませるだけではなく、現在の人間と未来の自然との関係も含ませた。ヨナスはホワイトヘッドの影響を受けており、またカントの責任倫理を、技術時代にふさわしいものにつくりかえようとして、「未来存続」を究極的な価値とみており、「責任」とはなにかがヨナスの論点になっている¹³。ホワイトヘッドの場合は、存在論的原理からも、未来世代への責任は語られうるし、未来永遠に関して現実的実質の定義から人間と自然の連帯性(solidarity)が導かれ、これは明らかに世代をこえた倫理的観点につながるものである。

第4項 環境社会派

いわゆる環境の社会派には、Reiner Grundmann(グルントマン)、David Pepper(ペッパー)、マーチャントらのエコ社会主義者、アナーキスト哲学者ブクチンなどがいて、資本主義への批判、自然主義、人間主義を特徴とする。

ブクチンはロシア系移民で、ソーシャルエコロジー、エコアナキズムの代表といわれる。人間社会のヒエラルキーの存在と環境問題との関連で国家と市場を批判し、それらの克服をめざした。分権化され、自給が可能な地域社会の緩やかな連合、オルタナティブな社会の構築、社会的公正をめざした。著書には『エコロジーと社会』などがあり、人間による人間の支配こそが、人間による自然の支配を生み出したという。ブクチンは「支配」という意識こそが、人間をして自然を支配させているとみなしている。したがって支配-被支配関係を清算し、エコシステムの範囲内の小規模な自治体で直接民主政治が行われるようになれば、自然破壊が止まるとブクチンは考えている。さらにブクチンはプロセスの哲学に関して、「自然は『人格』でも『世話をする母親』でも、あるいは前世紀の粗野な唯物論者の言葉で言うと『物質と運動』でもない。またそれは、季節変化のような繰り返しのサイクルや、代謝活動の構築と分解の単なる『プロセス』でもなく、むしろ自然の歴史は、より多様で、分化した、複雑な諸形態と諸関係に向かったの累積的な進化なのである¹⁴」という。ブクチンは、ホワイトヘッドらの過程の哲学は、単なる代謝活動の構築と分解以上のものとみており、ブクチンはホワイトヘッドの過程の哲学に対して理解を示していると考えられる。

第5項 環境プラグマティズム

80年代A.Westonを嚆矢とし、E.KatzやA.Lightの反論を経て、リベラルな環境思想への反動として、政策などを重んずるのが90年代中ごろからの、Norton(以下「ノートン」)らの環境プラグマティズムである¹⁵。彼らの「環境プラグマティズム」の枠組は、厳密に一つの主義を成しているというよりも、むしろ環境哲学のより望ましいアプローチを模索する、一つの新たな戦略の総称と捉えるべきである。その戦略として例えば、①異なる複数の価値や原理の存在を認める、②上記の現実の個別問題からの議論の立ち上げを抽象的理論よりも優先させることなどがあげられる。これらの論点を、いわゆる「プラグマティズム」という言葉で括る必然性は必ずしもない。というのも彼らの目的はアメリカのプラグマティズム思想を進展させることではなく、比喩的にプラグマティズムという呼称を用いているだけであると思われるからである。環境プラグマティズムは、例えばノートンの収束理論（環境問題に関して主義、主張が違っていても、実際の解決においては解決手段の意見は収束する）など、現在ホットな論争がなされている領域である。なお、ホワイトヘッドはプラグマティストのジョン・デューイを評価しており、プラグマティックな考え方に反対していないことが注目される。

第4節 環境問題解決の限界とホワイトヘッド

以上でホワイトヘッドとの関連で、主要な環境問題に関する科学・技術、行政、哲学の概要と限界が示された。ここから見えてくるのは、脱近代の哲学とは現代科学を否定せず、リアリティがあり、総合的で一本筋の通った体系的なものでなくてはならないということである。これから検討するように、こうした条件をみたすのは、様々な観点からして、ホワイトヘッドの哲学がもっとも近いのではないかと思う。次に、ホワイトヘッドがいかに近代の科学・思想と格闘したかを論考する。

まずはじめに強調しておきたいのは、ホワイトヘッドは当時の最先端の科学に通暁し（アインシュタインに対抗するほどのホワイトヘッド独自の相対性理論を創り、量子力学にも明るかった）、なおかつ哲学を正當に位置づけようと試みた、稀有の学者であったことである。哲学者としてこれほど科学に詳しかった研究者はまずいないといえる。さらに強調したいのは、科学にかぎらず論理学、文学、教育、神学などおよそあらゆる分野に通暁し、体系化（対照化）したということである。そこに余人の追随を許さない、独特のホワイトヘッドの世界が開かれる。例えば過程と実在、活動的と存在といった一見相矛盾するような概念の同時存在をリアルにみつめ、造語（例えば世界を構成する究極的な存在としての *actual entity* に関し「現実的実質」又は「活動的存在」などと表記した）したことにも現れている（造語、用語については補論「ホワイトヘッドのターミノロジーで再論する」）。

それと近代哲学が受け継いだ前代の知的遺産を、ホワイトヘッドはよく知悉

していたことである。特にホワイトヘッドは、プラトンの後期対話編である『ティマイオス』を重視していたが、これを現代風に書き直したのが主著の『過程と実在』といわれている。『ティマイオス』は「統一された、秩序ある宇宙」という世界観の枠組みをのべているからである。

一方でホワイトヘッドは、自然科学者としてのアリストテレスを評価した。これはホワイトヘッドに独自の「目的」、「秩序」、「調和」などといった表現にみることができよう。しかしホワイトヘッドは、アリストテレスの論理学、すなわち主語－述語論理を批判し、実体概念は誤謬であるとし、「有機体の理論」を主張した。アリストテレス批判をつきつめれば「実体概念」にいたる。「実体概念」は「主語－述語論理」の基礎になっているからである。しかしホワイトヘッドにとって、世界は人間も自然も全て、現実的実質として生き生きと関係する<有機体>として理解されるべきであり、「実体概念」こそが誤謬なのである（「具体を抽象と置き換える誤謬」）。

また先述のプラトンの『ティマイオス』と共にホワイトヘッドが重視したのはニュートンの『数学原理』（プリンキピア・マティマティカ）である。このことは後のラッセルとの共著、『数学原理（プリンキピア・マティマティカ序論）』というタイトルに偲ぶことができる

ニュートンは西洋で最初に物理的総合を成し遂げた学者である。しかしホワイトヘッドは、ニュートンのいわゆる絶対時間・絶対空間、ひろがりのない点などの概念は批判している（先述の、「具体を抽象と置き換える誤謬」）。

またアリストテレスの「可能態－現実態」という図式にとって代わる「新たな学問」としての「力学」は、主にデカルトによって「哲学」へと仕上げられた。デカルト哲学の中心は延長と思惟による。いわゆる二分化（二元論）である。ホワイトヘッドは、これらの「空間」「時間」「物質」とガッサンデイがよみがえらせた「原子論」を再検討した。その結果 17 世紀の「科学革命」の成果を斥けたのである。すなわちデカルトの方法は自然を分割するという思想であり（『自然という概念』1 章）、自然と人間を「物質」と「精神」という構成要素に分けるというやり方である。デカルトはこうしたやり方を確かに批判されたのだが、しかし一方で、既述のように（2 章 1 節）デカルトによって近代科学が促進されたことも否めない。ところでバークリーのニュートンやロック批判の役割は重要である。その意義は『科学と近代世界』（4 章）でバークリーと関連してホワイトヘッド独自の抱握（prehension）の概念を提示するところに現れている。バークリーの知覚論の「知覚する主体」は、ホワイトヘッドでは、後述するように意識的に、あるいは無意識的に「世界を抱握する」つまり現実的実質同士が、「窓」を通してお互いに関係しあう主体に置き換えられているのである。ところで、4 章で詳論するが、主体－客体モデルは、抱握作用を十分に扱えない。何故なら、ホワイトヘッドの抱握は世界の「対象性」のみでなくプロセス（過程）によっても規定されるからである。ここにはプロセスと絡む「抱握」の発想がある。またそこにゲシュタルト心理学の影響を見る人もいる。なお抱握する主体に関して、ライプニッツのモナドの影響もある。（ホワイトヘッ

ドは後述のように(4章2節3項)、ライプニッツのモナドよりも、スピノザの考え方をあげているが)

またロックの『人間知性論』の「力」(power, force)の概念であるが、ロックは、機械論的な世界を理解するためには、外的物体にある、いろいろな単純観念を我々の心に生じさせる「力」の概念に依拠しなければならないという結論に達している。新しい動的な自然観のために、ホワイトヘッドは「力」の概念を有機体理論に埋め込んだのである。ホワイトヘッド、ロック、ライプニッツを結びつけるのは「力」あるいはエネルギーの概念であり、この概念が動的・プロセス的に理解された新たな自然概念の出発点ともなった。

近代の最大の哲学者であるカントに対しては、第4章第1節第4項で再掲するが世界の捉え方に関して、ホワイトヘッドは独自のリアリティの観点から、「有機体の哲学はカント哲学の逆転である。カントにとっては、世界は主観(subject)から出現する。有機体の哲学にとって、主体(subject)というよりも「自己超越体」は世界から創発する」(カントの逆転)といている。

またホワイトヘッドは晩年になって、形而上学に理論的な転向をしたのだが、ホワイトヘッドとヘーゲルの関係が注目されている。つまり例えばコントラスト(対照化)や弁証法など、ヘーゲルの概念でホワイトヘッドの理論を捉えなおすことによって、ホワイトヘッドの形而上学もより強固になるというものである。ホワイトヘッドは、ネオ・ヘーゲリアンに位置づけられ、後述(3章2節補項)のように、その著書のなかでもヘーゲルを評価していたことが窺われる。

また確かにホワイトヘッドは晩年に形而上学へ没頭したのだが、それがラッセルなどの論理実証主義との方向の違いともなった。

このように本章で取り上げたのはホワイトヘッドのほんの一部分であり、まだまだ多くの解明されていない部分もあり今後の研究がまたれる(4章で再論する)。

【第2章 小括】

現代の環境問題の背景となっている、近代の科学、哲学をレビューし、主要な問題点として、デカルトの機械的自然観や孤立的人間観、生存競争的人間観をとりあげ有機体論や他者問題などを検討し、克服の方向を探った。またそれらの諸問題を独自の概念である現実的実質の連帯や、総合性、体系性、リアリティをもって格闘した哲学者としてホワイトヘッドを紹介した。

環境に関わるおもな科学、倫理の対立点を明らかにし、それとホワイトヘッドの哲学の関係をのべた。ホワイトヘッドの哲学は、こうした対立を乗り越える思想であることを示した。具体的には、環境哲学とホワイトヘッド、環境倫理の諸問題としてレオポルドやネスなどの人間中心主義対自然中心主義、シンガーなどの動物の解放、ヨナスの世代間倫理などを取り上げた。さらにブクチンの環境社会派や環境プラグマティズムなどの動向とホワイトヘッドとの関わりについて論じ、ナッシュやマーチャント、ラブロックなどとの関連を明らか

にした。また脱近代の哲学として、ホワイトヘッドの思想をプラトン、アリストテレス、ニュートン、デカルト、ロック、カント、ヘーゲルなどの西洋哲学思想の流れに位置づけた。

【第2章の注】

- 1 尾関周二、『環境哲学の探求』大月書店、1996
- 2 尾関周二、『環境思想と人間学の革新』、青木書店、2007
- 3 レオポルド,A.『野生の歌がきこえる』、新島義昭訳、講談社学術文庫、1997
- 4 ストーン,C.「樹木の当事者的確」『現代思想』1990.11
- 5 ネス,A.『ディープエコロジーとは何かーエコロジー、共同体、ライフスタイル』、斎藤・開訳、文化書房博文社、1997
- 6 ナッシュ,R.『自然の権利ー環境倫理の文明史』、松野弘訳、ちくま学芸文庫、1999年
- 7 マーチャント,C.『自然の死ー科学革命と女・エコロジー』、団・垂水・樋口訳、工作社、1985
- 8 マーチャント,C.『ラディカル・エコロジーー住みよい世界を求めて』、川本・須藤・水谷訳、産業図書、1994
- 9 ラブロック,E.『地球生命圏ーガイアの科学』、星川淳訳、工作舎、1984
- 10 シンガー,P.『動物解放論』、戸田清訳、技術と人間社、1988
- 11 シンガー,P.『実践の論理』、山内友三郎、塚崎智訳、昭和堂、1979
- 12 McDaniel, J. Land Ethics, Animal Rights and Process Theology, Process Study, 17(2), 1988, pp88-102,
- 13 ヨナス,H.『責任という原理』、加藤尚武監訳、東信堂、2000
- 14 ブクチン,M.『エコロジーと社会』、萩原なつ子ほか訳、白水社、1996
- 15 Light,A. & Katz.E.ed., Environmental Pragmatism, Routledge, 1996

【第1編のまとめ】

第1編では、まず今日の環境問題の背景をなす近代の科学、政策、倫理・哲学について論考し、その超克者としてのホワイトヘッドの哲学にむすびつけた。

環境問題の諸相として、科学・技術面に関わる環境破壊の実際や例えば経済システムなどの社会構造と意味（環境破壊は人間破壊である）、国家や国連などの行政・政策面や個人活動の面などを考察した。

次に人間中心主義対自然中心主義、動物の解放、世代間倫理など環境倫理のこれまでを概観しホワイトヘッドと関連づけた。

環境哲学の領域規定は難しいが、ホワイトヘッドは独自の時空論による存在論など、西洋哲学の流れに位置づけてみると、その独自の立場が明確になった。またそのような存在論的立場など、いわゆる環境哲学の先駆的な発想を多く持っていることが分かった。

第2編 有機体の哲学とプロセス哲学による人間と自然の解明

2編は本研究の理論的な中心であり、まず第3章では背景としての近代哲学とホワイトヘッドとの関係、補項ではプロセス哲学と弁証法との関係を考える。第4章ではホワイトヘッドの哲学のなりたち、主要概念の説明、その環境との関連を明確にする。さらにホワイトヘッドの哲学の影響や評価、問題点を検討し、社会と秩序、目的と文明などを論ずる。この結果得られたホワイトヘッドの方法や視点、主要概念をとりまとめ、第5章で「共生、持続社会」の構築に向けたホワイトヘッドの哲学の貢献に関して検討を加える。

第3章 ホワイトヘッドによる環境思想の形成と特色

第1節 思考の形成過程と関連分野

ホワイトヘッドの哲学の内容は、一言でいうなら多くの分野にわたる研究からもたらされた彼なりの独特なコスモロジーである。つまり世界を無数の究極的物質 (actual entity: 現実的実質あるいは活動的存在)、経験の滴り (drop of experience)、あるいは瞬間的な閃光 (パルス) からなるネットワークで構成されるものとみて、それらの現実的実質の無限の生成と消滅の繰り返し、すなわち創造 (creativity) の過程 (process) の構造や機能を記述したものといえよう。こうしたホワイトヘッドの方法や世界観を検討するとそれが実に多彩であり、多くの理論が混然と溶け合って共在しており、世界や環境を多様に深く捉えることができることが分かる。一言でいえば、ホワイトヘッドは既存の哲学の超克を試みたのである。これにより現代の思想や環境思想へ示唆するものは多い。

ここでは1編で検討してきた環境問題を念頭に、必要な範囲でホワイトヘッドの著作全体の構成や個々の主要概念の変化などを論じる。経年的にみた思想の変遷や用語の変遷、主要著作などを概説し、成立過程などやや立ち入った考察を試みる。

まず編年的な理論の形成では、特に思想の生成の過程や、それに伴う概念、用語の変化に注目したい。これは解釈の正確さにつながってくる。(用語については、補論で再検討する)。ここではとくに、ホワイトヘッドの思想の内容、すなわちその思想の歩みと、主著『過程と実在』の構造や動きについて概説し、主要論点を紹介しながらその及ぼした影響などを検討する。ホワイトヘッドがどのように既存の思想・哲学を読み解いて自分の哲学として再構築していったのか、深い読みが要求される。さてホワイトヘッドにはその特色(方法)を表すいくつかのキーワードがある。例えば理論基盤としての存在論や経験論、独自の発想・用語である構造としての現実的実質(モナド)、機能としてのプロセス(抱握や合生)、創造性、システムと秩序などがあり、そのほか今回は十分に検討しなかったがキーワードとして、例えば教育におけるリズム、またプロセス神学などが挙げられる。

さて多くの分野にわたり活躍したホワイトヘッド (Alfred North Whitehead, 1861-1947) はイギリス人で、幼少からの宗教的雰囲気にも包まれ成長し、また牧歌的な自然の中で成長した。ホワイトヘッドは広範な多面性をもっており、たとえば①数学的論理学者②理論物理学者、③プラトニスト、④形而上学者、⑤プロセス神学の創始者、⑥エコロジスト、⑦教育者、⑧文明批評家などであるが、ケンブリッジ大学での数学（純粋数学と業績の多かった応用数学-応用面）から研究を出発した。なお同じように数学から出発した哲学者として Edmund Husserl (以下「フッサール」)、Charles Sanders Peirce (以下「ペース」) などがいる。しかしとりわけ論理主義にたった Bertrand Arthur William Russell (以下「ラッセル」) との共著『数学原理』(『プリキア・マテマティカ』)¹ が有名である。これは数理論理学など全部で6章からなり、幾何学の章は書かれなかったが、方法論としての「論理主義」、カントールの集合論や、数学の論理への還元などが背景にある。しかしその後ラッセルは論理実証主義² などホワイトヘッドと方向を別にする事となった。またホワイトヘッドは理論物理学も研究し、例えば事物の相互内在などを内容とする「相依性の原理」³ 等の手法を用い、アインシュタインとは別の形での相対性原理⁴ を発表した。この相対性理論は結局アメリカの物理学者ウイラーらによって反証されたが、「延長的抽象化」などの手法（相対性理論でいう意味での時空の[四次元的な]延長ある「出来事」とその相互関係から、拡がりをもたぬ空間点や瞬間を導き出すという手法）により、アインシュタインに対抗する理論を創った。これらの自然科学や宗教の基礎はホワイトヘッドの哲学にとって大きな要素をなしているといえるが、その後1918年、戦争で三男を失ったことなどもあって、急激に形而上学へ没頭した。

1924年ロンドン大学を定年退職し、63歳にしてアメリカのハーバード大学に哲学の教授として招請され、本格的に哲学の研究に邁進することとなった。ホワイトヘッドはこの哲学という分野でも成功したのだが、それはとりわけ幼少から親しんだプラトン、アリストテレスなどの古代ギリシャ哲学は言うに及ばず、主にデカルト、ロック、ヒューム、カント、ニュートン、さらにはスピノザ、ヘーゲルなどの研究の蓄積が背景にあったからである。ホワイトヘッドの研究では、デカルトについてはその二元論の批判を、ロックについては高い評価を、ヒュームについてはその中間の評価をしており、カントについては、ホワイトヘッドからみたカントの逆転を論じている(2章4節、4章1節4項参照)。ヘーゲルについては後述するように、弁証法がその大きな論点となっている。なお Victor Lowe (以下「ロー」) の『ホワイトヘッドへの招待』は、ホワイトヘッドの活動について第1期から第3期までの時期的にわけ詳細に論じている。活動の第1期(1891~1913)は、『普遍代数論』と『プリンキピア・マテマティカ』、『物質世界の数学的概念について』およびその後の著作があり、第2期(1914~1923)は、自然科学の哲学、第3期(1924~1947)は、有機体の哲学や『観念の冒険』とそれ以後の著作となっており、以上は一般的にも用いられている時代区分である。例えば同じような試みを図る研究者に、Charles Hartshorne (以下「ハーツホーン」) などがいる。

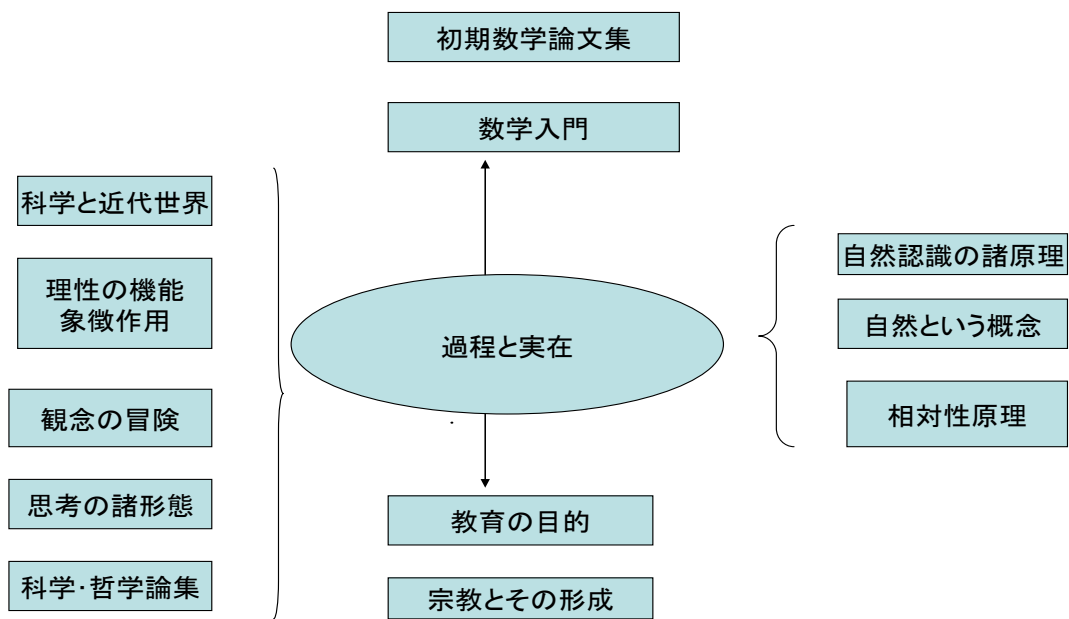
特に主著『過程と実在』⁵に注目したい。前述の主要な哲学者の名前や主要な概念が、主著『過程と実在』や著作集には頻繁に登場しており、それらの的確な解釈と批判、超克がその主著の骨格を成している。『過程と実在』はホワイトヘッドの自然科学三部作といわれる『自然認識の諸原理』⁶、『自然という概念』⁷、『相対性原理』⁸を軸に、多方面の研究をもとに1929年に結実したものである。ここで『過程と実在』と全著作集の関係を深く考えたい。また出来事から現実的実質へとといった執筆時期と用語の変化に注意したい。なおホワイトヘッドの全集には観念の冒険としての社会に関する著作⁹や思考の諸形態に関する著作¹⁰、教育論¹¹、宗教論¹²もあり、これらは全て既存の哲学の解釈と超克が背景となっている。

ところでL. Price(ルシアン・プライス)は、ホワイトヘッドとの個人的な思い出をのべている¹³。学問的な著作ではないがホワイトヘッド本人の素顔や世界大戦などといった社会情勢との関連がよく分かる。例えば歴史上の人物としてモーゼ、プラトン、イエスとヨハネ、デイクケンズ、クロムウェル、ヒトラーとワーグナー、グラント将軍、デューイと孔子、ルターとカルヴィン、チャーチルとルーズヴェルト、レーニンとスターリン、ジェームズとデューイ、事項としては戦争、大学、文明、アメリカ、黒人問題、日本と中国などと多岐にわたっている。

ホワイトヘッド自身もいうように、『科学と近代世界』(この著書で初めてprehension、抱握が登場してくる)、『過程と実在』、『観念の冒険』の三部作は、事物の本性を理解する仕方を実現し、かつまた、こうした理解の仕方が、人間経験のさまざまな変異を概観することによって如何に例示されているかを指摘しようとする試みである。それらの書物は、それぞれ独立した著作であるが相互の欠落とか圧縮を補っているものなのである。

なおホワイトヘッドは「抽象を具体と置き違える錯誤」(the fallacy of mis-placed concreteness, 例えば抽象的なレベルと具体的なレベルの話と一緒に論じてしまうことなど)についてしばしば警告していることに注意したい。中村昇によれば、「ホワイトヘッドは、こうした具体的な状態を、いったん抽象化して把握しているにもかかわらず、抽象化したことを忘れ、その結果の方を、<具体的なもの>だと、われわれは思い込んでしまう。このような錯誤を、『具体的なものを抽象的なものと取り違える間違い』と呼んだのだ」という。例えば後述の数学の点のように拡がりをもたず、単に位置を占める(simple location)といった考え方などがある。

上述したホワイトヘッドの思想と著作の体系について、図表3-1にまとめた。



図表 3 - 1 ホワイトヘッドの著作

次に主著の『過程と実在』の構造を紹介する(図表3-2)。

1部	思弁的構図	→宇宙論を組み立てる諸観念の構図カテゴリー
2部	議論と応用	→デカルト、ニュートン、ロック、ヒューム、カントの検討
3部	抱握論	→宇宙論の構図：発生理論
4部	延長の理論	→宇宙論の構図：形態理論
5部	最終的解釈	→宇宙論の究極的方法

図表3-2 『過程と実在』の構造

ホワイトヘッドは『過程と実在』の序文で次のように解説している。

第1部では、方法が説明され、宇宙論を組み立てる諸観念の構図が、要約的に述べられている。

第2部では、文明思想の複雑な構造を形づくる諸観念と諸問題の解釈によって、この構図が十全であることを示す努力がなされている。当然生じてくる哲学問題との関係において考察された人間の経験について、かなり完全な説明を得るために、17・18世紀の一群の哲学者ならびに科学者、特にデカルト、ニュートン、ロック、ヒューム、カントが検討されている。第2部ではもっぱら物理学と生物学との最も一般的観念に限られている。

第3ならびに第4部では、宇宙論の構図は、それ自身の範疇的諸観念によって、また他の思想体系をあまり顧慮せずに、展開されている。

第5部は、宇宙論の問題を考察すべき究極的方法についての最終的解釈に関わっている。

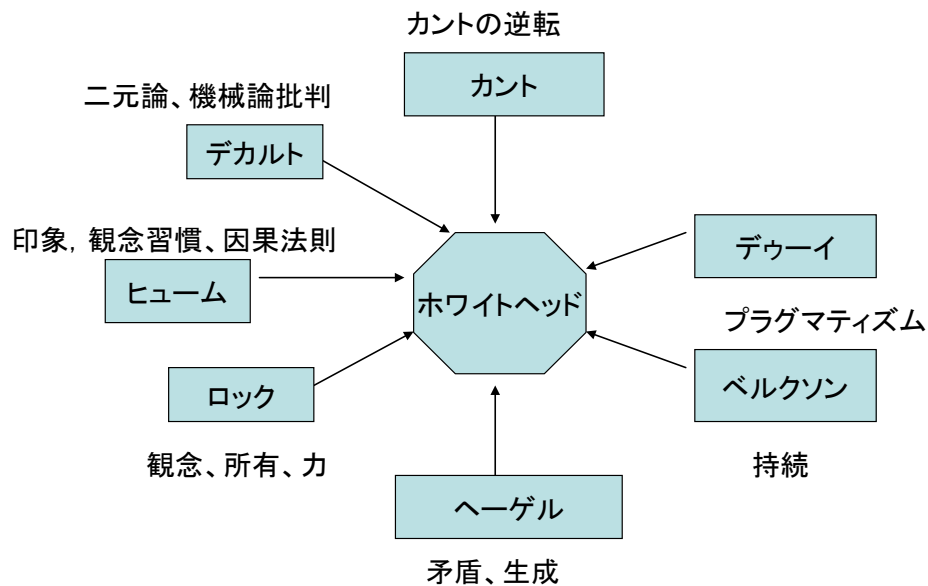
さらにホワイトヘッドはいう

「つまり有機体の哲学は、現実態の細胞理論である。事実の各究極的単位は、細胞複合体であり、現実態と同等の完結性をもつ構成要素には分析できない。細胞は発生的にも形態論的にも考察することができる。発生理論は第3部で考察される。形態理論は、現実的実質の「延長的分析」の見出しで、第4部で考察される¹⁴」。

『過程と実在』の構造に関する全体的な考察として、小島雅春は、ホワイトヘッドの思弁哲学と想像力、言語と形而上学、創造性、神の本性などを論じており¹⁵、特にホワイトヘッドの言う思弁 (speculation) を分かりやすく説明している。ここで思弁とは、シャーマンによれば重要な知識を生み出す方法であるという。平田一郎も同じくホワイトヘッドの思弁哲学にふれ、ホワイトヘッドの哲学の総合的な構成的分析を行っており、これらの論文は、ホワイトヘッドの哲学の全体の理解にあたって参考になる¹⁶。

さて『過程と実在』の基本を成している既存の哲学との関係であるが、既にのべたように、ホワイトヘッドは本書において、デカルトの「存在するために他の何ものをも必要としない」という実体観や、先述の「数学の点のように拡がりをもたず、単に位置を占める (simple location)」という考え方を否定している。次にロックに関しては、第一性質、第二性質などに言及し、ロックの学説に関して評価している(図表3-3)。ここで第一性質とは、無職無味無臭の客観的な性質であり、第二性質とは色彩や香りなどを指す。

Wolf-Gazoは、ロックについて、その著書における力(power)の地位、ロックの力の変換、モノとそのリアルな本質のリアルな内的構造を論じている¹⁷。またヒュームに関してシャーマンは、ホワイトヘッドのヒュームに対する論駁を論じている¹⁸。つまりヒュームの因果性の理論は、彼の知覚論に依存しているが、知覚の理論は不適切であり、よって因果性の理論は不適切であるという。カントに関して、Gordon Treasはカントの批判書とホワイトヘッドの関係を詳しく論じている¹⁹。カントは人間の経験や理性の研究に力を注いだが、とくに第三批判の目的論が鍵となる。これらの論考はホワイトヘッドと関連する哲学の理解のうえで欠かせないものである。



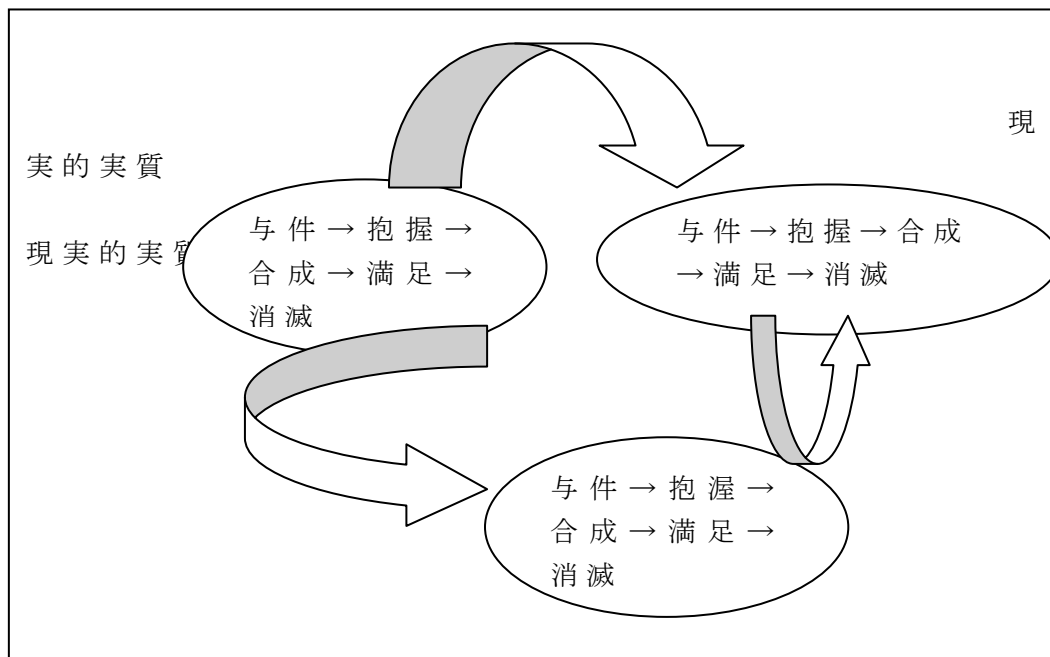
図表 3 - 3 ホワイトヘッドと関連する哲学

ここでホワイトヘッドの世界（宇宙）モデルとは、あらかじめ言ってしまうと端的には独自のコスモロジー（世界観）である。そのコスモロジーを成り立たせている主要な概念としては、まず①存在論的原理による時空観がある。ホワイトヘッドによれば、現実世界におけるどんなものも、ある現実的実質に関連をもちうる。それは1) 過去における現実的実質から伝達されるか、それとも2) それとその合生に属している現実的実質の主体的指向に属しているという。次に②有機体論的観点からは、例えば生物学が説明すべき有機体は純粹に還元主義的な分析を試みるだけでは説明しつくせない存在で、生命体の特徴はそれらの組織化の程度に帰するということであり、この組織化（秩序）が4章5節でのべるようにホワイトヘッドの社会哲学の鍵となる。さらに上述の世界を構成している究極的な実体が現実的実質(actual entity)である。この極めてラディカルな発想の現実的実質は、デモクリトスの原子(atom)が不活性で不滅な物質的素材であるのに対して、生氣をもった「瞬間的な経験の滴り(drop of experience)」であり、複合的で相互に依存している²⁰。またライプニッツのモナド²¹とは違って、現実的実質は相即しつつも他の現実的実質に入り込む（「窓」をもつ）のであり、ライプニッツのように神の予定調和もなく、あるのは絶えざる創造の展開（プロセス）である（図表4-2を参照）。ここで「窓」をもつ、すなわち現実的実質同士のコミュニケーションに注目したい。これは後述の現実的実質同士の連帯に関係し、ホワイトヘッドの脱近代化の思想のなかでも大きな役割をはたすものである。

そのプロセスの中身として、4章でのべる抱握 (prehension)²² や合生 (concrecence)²³、つまり経験における現実的実質同士の相依関係による無限な世界の創造があり、その根底は人間的な情動である。ホワイトヘッドは「経験のなかの第一次的な要因は、第一に、愛、共感、凶暴などの動物的な情感、ならびに、それらに類した欲求と満足であり、第二に、意識的に享受された美や知的優雅さといったもっと明確に人間的な経験であるという。ここに、ホワイトヘッドの人間規定がよく現れており注目したい。

さらに秩序を根底とした目的的社会理論²⁴などが重要である。ホワイトヘッドは文明批評として真理、美、冒険、芸術さらにそれらを結びつける平安（諸調和の調和）などを挙げ、実際、秩序 (order) を基本概念として、『観念の冒険』や『ホワイトヘッドとの対話』において商業、労働・経済政策、政治などに言及している。後述するが、ここにホワイトヘッドの社会哲学の一端が現れていると思う。

さて図式的にみれば、ホワイトヘッドの「プロセス」は、図表3-4のような経過をたどる（詳しくは4章3節4項も参照）。



図表 3 - 4 プロセスの構造

この図は現実的実質相互の関係（ネットワーク）や、一つの現実的実質の成長から目的が達成された「満足」（4章3節2項参照）、満足に達した後の「消滅」、次の現実的実質への「与件」までの様を描いているが、具体的な社会、世

界の実体の実態はこのようになっていくという図である。繰り返しになるが、こうしたモデルの背景の要点を今一度まとめると、まづ背景として「抱握」の先行概念である、デカルトの「思惟」²⁵、ロックの「観念」²⁶の一般化、Francis Bacon(以下「ベーコン」)²⁷の自然誌『森の森』、バークリー²⁸の『アルシフロン』がある。このモデルの意味は、死んだ自然から生きた自然へ(抱握)、多から一へ(合生)、弁証法(異質の統合、ヘーゲル的な理論構造)、システム理論、創発、創造性などである。つまり無数の究極的(現実的)実質が、主体として世界(コスモス)のネットワークをなし、世界を無限に創造・生成し続けるというもので、「現実的実質」(actual entity)のプロセス(相互作用、相依)による目的実現となっている。またホワイトヘッドの思想は、環境思想史的にみると、経験や有機体の立場からの、「生きた生命ある自然を、死んだ対象として取り扱う機械論的哲学と、形式論理に基づいた科学技術論に対する警告」であり、「共生の哲学」、「主体の哲学」を提示している。こうした考えの環境問題に対する意義は非常に大きいものである。具体的には5章で再検討する。

第2節 思想の特色と問題点

第1項 特色

科学論はホワイトヘッドの思想の主要なバックボーンとなっている²⁹。現実的実質に関しては、哲学的背景のほかホワイトヘッドでは数学や物理学(相対性理論、量子力学)の研究などをふまえた、「モノからコトへ」、つまり物から出来事(event)、さらに現実的実質へという思索の歩みに重なっていることに注目したい。また「モノからコトへ」という出来事やプロセスを重視する考えは「関係」の理論や「情報」、最近の工学的的方法論とも関連するものと思われ、実際にも「人工物工学」といった分野で応用されている。

先述のように、ホワイトヘッドは、量子力学の考えも導入している。19世紀にファラデーからマックスウェルをへて、「電磁場」という概念が登場し、それまでのわれわれの自然観が大きく変化した。そこでホワイトヘッドは、個別の存在を前提するのではなく、量子論的な「場」という概念から出発して、この世界の有様を記述することにしたのである。さらにホワイトヘッドは、量子力学がいうように、身体や世界を構成する最小の単位が、粒子であり、かつ波なのであれば、そういうあり方を基底にすえて説明するのが筋であろうと考えた。量子論のホワイトヘッドに対する影響は、いわゆる「量子化」という概念である。ホワイトヘッドは、電子などにみられる非連続な性質、すなわち同一の電子なのにとびとびにしか確認できないという不思議な性質に着目した。量子力学によれば、われわれの世界を構成する物質の最小単位は、非連続に連続しているということになってしまう。特殊相対性理論は、等速直線運動をするものをひとつの「慣性系」(慣性の法則が成り立つ系)とみなし、それぞれの系において時間の流れは異なったものと考えることによって、「現実的実質」の概念を導いた。すなわちここでは量子化と連続が注目される。ホワイトヘッドに対する量子力学や Henri Bergson(以下「ベルクソン」)の影響がみてとれ、それま

での哲学者には無い発想が呈示されている。「連続」に関してベルクソンは、持続は瞬間の集合ではなく、幅の無い瞬間における自然の状態を一齣づつつなげても「生きた」自己は記述から零れ落ちるという。

またホワイトヘッドは「正確さは嘘だ」といったがこれは自然科学や数学のもつ正確さは、真の具体的なあり方を抽象することによって可能になるのだから、必ず何かを見落としているということの意味している。

田中裕は、『相対性原理』など、ホワイトヘッドにおける数学や物理学の主要問題を論じ³⁰、また同氏は数理と宗教についても詳しい議論を展開しており

³¹参考になる。沢田弁茂は、ホワイトヘッドの論理主義やラッセルとの関係を論じ³²、Shieldsはプロセス哲学と技術、例えばバーチャル・リアリティなどを論じており³³、これらの論文は情報化時代にタイムリーな視点であると思う。一方大塚稔は、近代啓蒙主義と精神の自由、量子論・相対性理論の出現と自然言語などを論じており³⁴、文理にまたがるホワイトヘッドの総合的な論考となっている。

さて、ここで環境とも関わる問題として、進化論について若干述べたい。ホワイトヘッドは、ダーウインの進化論に関してたびたびふれている。そのいくつかを以下に紹介する。

「この世紀に耳目を轟動させた主要な科学的問題は、ダーウインの進化論であった³⁵」。

「実際近年における最も重要な事実は、生物関係の諸学科の進歩である。これらの科学は本質的には有機体に関する科学である³⁶」。

「ダーウインやアインシュタインがわれわれの観念を修正する理論を宣言するとき、それは科学の凱歌である³⁷」。

ホワイトヘッドは進化について、

「もっぱら<自然淘汰>だけに頼るのは、ダーウイン自身の理論の性格ではなかった。「<自然淘汰>は他にもいろいろある進化の作用者の一つだった³⁸」

と冷静にみつめ、この生存競争説は確かに、弱弱しい生存力しか備えていないような、一般的なタイプの複雑な有機体にはいかなる光もなげかけるものではないという。

第2項 問題点

これまでホワイトヘッドの哲学・思想について概説してきたが、次にいくつかの問題点について紹介し考察したい。

1) 擬人化

市井によれば、「人間の経験に見出される基本的諸特性が、またすべての『現

『実質』にも見出しうると考えるホワイトヘッドの体系は、安易に解釈すれば、擬人的世界観という前科学的なものの見方を助長させるおそれがある。(中略)さらに「例えば『概念的抱握』は、無数の可能性、すなわち無数の『永遠の対象』(4章6節2項参照)のなかからある共可能的な組み合わせを選択し実現させることであり、それは選択的である故に目的的であり、また価値的な過程であると彼(ホワイトヘッド)はいい、あらゆる『現実的実質』がなんらかの『概念的抱握』をしているのだから、価値はある意味で実在する客観的なものだ、という論じ方をする。すなわちすべて人間的心性に固有のものと考えられてきたものが、ホワイトヘッドの体系にあっては、自然と人間とを包括するより統合的な理論的カテゴリー(現実的実質、抱握、結合体、存在論的原理など)の個別例にすぎないもの、として示されるのである。したがって正しく解釈すれば、ホワイトヘッドの哲学は John Dewey(以下「デューイ」)が評したように『統合的自然主義』(integrated naturalism)とも呼びうるであろうが、ホワイトヘッドが、『感情』とか『目的』、『理想』、『意識』といった人間的用語を、あらゆる存在に適用する(意味を広く定義しなおすとはいえ)ことは、はなはだしい誤解を招きやすいと思われる³⁹⁾という。擬人化の例は2章で紹介したラブロックのガイア理論などの例もあり、必ずしもホワイトヘッドの哲学の致命的な欠点だとは思わないが、ひとつの問題点ではある。

2) 実体と概念

また市井は、「実体概念に反逆する彼(ホワイトヘッド)が、『主体』とか『自我』といったものは、さまざまな『抱握』によって構成されそこから帰結するものである、という場合には着実な根拠付けをもつと思われるが、例えば次のように一般的な形で述べられた場合、少なくとも現在のわれわれは理解しがたいものを感じるであろう。すなわち『現実的実質』は、みずからの諸『抱握』に先んじて存在してその諸『抱握』を自ら生じさせるような、何者かなのではない」と。(中略)われわれは、何らかの作用があるとき、それはつねに何らかの事物が作用しているのであって、その作用が起こる前に当の事物が存在していなければならない、と考える習慣にあまりにも深入りしている。したがって既に言及した統一場理論のようなものが、中学校の教科書に載るようなときがくるまで、ホワイトヘッドのカテゴリーは、一部の知識人にしか理解されないものとなり続けるであろう。これを逆に見れば、彼の提案する主要概念は、通俗化される場合にはなはだしい歪曲や神秘化の危険にさらされることでもある⁴⁰⁾。」という。上記のような思考の習慣(統一場理論がなかなか理解されていない)のためもあってホワイトヘッドの哲学は、未だに普及していないのではないかということも事実である。

3) 社会哲学

たしかにホワイトヘッドは正面きって社会哲学を展開していない。わずかに、たとえばホワイトヘッドはこういつている。「この説明のもう一方の側におかれるべき二つの知的な運動がある。一つは「最大多数の最大幸福」というく功利主

義的原理>に基づく Jeremy Bentham(以下「ベンサム」)の法律改革であり、もう一つは、Auguste Comte(以下「コント」)の「人類教」すなわち<実証主義>である」と⁴¹。しかし既述のようにプライスの『ホワイトヘッドとの対話』を含めると、ホワイトヘッドは、いくつかの社会に関する発言はしており、わが国でも、例えば伊藤重行らのホワイトヘッドの経営や政治に関する理論的研究がなされ始めており、今後の大きな研究テーマとなる。

4) 言語をめぐって

また言語に関して、ホワイトヘッドは哲学とは、宇宙の無限性を言語の限界を通じて表現しようとする試みなのだという。すなわちホワイトヘッドの例えば「抱握」などの造語は苦心の表れといわれている(補論を参照)。ホワイトヘッドは当時用いられている言語では、自分の思想を十分に表現できなかったとみており、言語を信頼しなかったという事実が何人かの研究者によって指摘されている。言語は人間一人間のコミュニケーションにおいて必要不可欠なものであるため、ホワイトヘッドの社会哲学の拡がりに関する鍵となっていると思われる。さらに補論のホワイトヘッドのターミノロジーは、ホワイトヘッドの言語理解の一つのヒントを与えるものである。

補項 方法論をめぐって

これまで筆者はホワイトヘッドの研究上の方法論について考察してきた。しかし明らかにホワイトヘッドは例えば弁証法や現象学、分析哲学などの現代の主要な、特定の метод論に立っていない。そこでここでは補項としてホワイトヘッドにみられる主要な方法論について考察したい。これまでもホワイトヘッド研究者によって指摘されてきたが、有機体の哲学におけるプロセスとコントラスト(対照化)や弁証法との関連を考察したい。つまりホワイトヘッドのプロセスの哲学はヘーゲルの弁証法と関連が深いのではないかという点や、有機体の哲学とプロセスの哲学との相互関係を検討したい。

1) プロセス哲学と弁証法

ホワイトヘッドの方法についていうと、存在の範疇(カテゴリー)でのなかの「コントラスト」、つまり対照化の方法と弁証法との関係が注目される。ホワイトヘッドは対照化と弁証法について次のようにいっている。

「諸事実をコントラストへと統合することは、一般に新しいタイプの所産を生み出すものだ(中略)コントラストのうち最も重要なものは『肯定—否定』コントラストである。そこでは命題と結合体から一つの与件に統合される⁴²」。

「私の考えでは、ヘーゲルが正・反・合と呼ぶ三つの段階で進歩を分析したかぎりではヘーゲルは正しかったのです。(中略)総合化という最終の

段階は、ヘーゲルの『合』にあたります⁴³」。

「ヘーゲル哲学への私の関係は以上の報告によって明らかにされたと思います。彼は敬意を受けてしかるべき大思想家であります。彼の手順に対する私の批判は、彼が議論のなかで矛盾に逢着するとそれを宇宙の一大事と解釈する点であります。私は宇宙の中での人間の地位についてそれほど大それたことは考えておりません。ヘーゲルの哲学的態度は神としての態度であります。しかし私はヘーゲルをじかに研究なさった方々にヘーゲルのことはおまかせせねばなりません⁴⁴」と。

Nussbaumは、ヘーゲルとホワイトヘッドにおける論理と形而上学、特にホワイトヘッドの方法は弁証法的性格を持つのかどうかを議論している⁴⁵。Curtis論文では、ホワイトヘッドの方法とヘーゲルの方法の類似、ホワイトヘッドとマルクスの形而上学の比較など斬新な理論展開を見せており⁴⁶、貴重な論文と思われる。

ここで参考のため、少々長いがホワイトヘッドの労働観を紹介したい。ホワイトヘッドはこう言っている。「私が注意を払いたい本日の講演に関する部分は、上述の『仕事が遊びであり、遊びが人生である』というくだりに表現されています。これこそ技術教育の理想です。この表現は、私たちが理想を現実的な諸事実と照合するとき、たいへん奇妙に聞こえます。疲れ果て、不満感をもち、生活に興味をもつ精神をなくしてしまっているような、あくせく働く幾百万人の人々が居るという現実。それにまた企業家ときたらー。私は社会の分析を試みようとしているのではありませんが、社会の現状が先の理想とはるか遠くにかげはなれているという私の認識地点に皆さんをお連れしたいのです。

さらにいえば、企業家が、『労働は遊びでなければならない』という原則で自分の工場経営をやれば、一週間で駄目になるだろうことに、私も同意します。人類に課せられてきた呪いは、寓話においても事実の上でも、人間は額に汗することによって生きていくということです。

けれども理性と道徳的な直感、この呪いのなかに前進への基礎を見てきたのです。初期のベネディクト会修道士たちは、自分たちの労働を喜びましたが、それは修道士たちが労働によってキリストとの働き仲間になれると自認したからです。修道士たちの神学的な飾りをはぎとってしまえば、本質的な思想が残ります。

労働は、知的および道徳的な洞察力によって、退屈や苦痛を克服し、喜びに転じられねばならないという思想です。(中略)このような素晴らしい成果をあげるにはひとつ、まさに、たった一つの方法があるだけです。それは、自分の仕事を楽しむ労働者と科学者と使用者を作り出すことによるものです⁴⁷」と。

2) 弁証法と対照化 (コントラスト)

ホワイトヘッドにおける方法について若干論じたが、ホワイトヘッドにあっ

ては特定の方法で全体を貫くというのではなく、例えば弁証法と現象学的な方法など、事象の説明にとってもっとも相応しい方法をその場に応じて使い分けているのが特色となっている。いわゆる対照化(コントラスト)、統合の方法で、これは普遍的で脱近代の方法といえる。

【小括 第3章】

3章では、ホワイトヘッドおよびホワイトヘッド研究者の思想的な独自性を検討した。まずこれまでの様々な世界観(コスモロジー)を説明し、その中で有機体の思想を位置づけた。ホワイトヘッドの著書の紹介や、特に主著『過程と実在』の構造や関連する諸哲学を図解した。次にホワイトヘッドの脱近代の思想の形成過程をのべた。また「現実的実質」、「抱握」、「合生」などのホワイトヘッドに特有な概念の変化や用語の変化を指摘した。次に、思想の根底にある「モノからコトへ」という考えがホワイトヘッドの哲学に大きな影響を及ぼしていることを指摘した。また量子力学や進化論との関連を明らかにした。問題点として擬人化、実体と概念、言語などをとりあげた。そしてホワイトヘッドの思想には、体系性、総合性、リアリティがあることを確認した。

特に方法論としてホワイトヘッドにみられる弁証法に注目した。またプロセス哲学と弁証法、および対照化との関係、さらにホワイトヘッドの労働観を紹介した。

【第3章の注】

- 1 『プリンキピア・マテマティカ序論』、A・N・ホワイトヘッド、B・ラッセル[著]、岡本賢吾[ほか]訳、哲学書房、1988
- 2 論理実証主義とは1920年代のウィーン学団が提唱した理論。経験論に基づいて、形而上学を否定し、実験や言語分析により厳正さを求めた。
- 3 相依性の原理とは、諸事物の連帯性が、現実的実質の生成の中で成り立つという思想で、仏教用語である。
- 4 ホワイトヘッドの相対性理論によれば、「存在」の本性には、それがすべての「生成」にとって、潜勢的なものであるということが属しているという。
- 5 Whitehead,A.N., *Process and Realiy*,Free Press, 1929, (ホワイトヘッド『過程と実在』、山本誠作訳、松籟社、1991)
- 6 Whitehead,AN., *An Inquiry Concerning the Principles of Natural Knowledge*, 1919 (ホワイトヘッド『自然認識の諸原理』、藤川吉美訳、松籟社、1991)
- 7 Whitehead,AN., *The Concept of Nature*, 1919 (ホワイトヘッド『自然という概念』、藤川吉美訳、松籟社、1992)
- 8 Whitehead,AN., *The Principle of Relativity*, 1922 (ホワイトヘッド『相対性原理』、藤川吉美訳、松籟社、1991)
- 9 Whitehead,AN., *Adventures of Ideas*, Cambridge University Press, 1961(ホワイトヘッド『観念の冒険』、山本誠作・菱木政晴訳、松籟社、1988)

- 10 Whitehead,AN,, *Modes of Thought*, Macmillan, 1938 (ホワイトヘッド『思考の諸形態』、藤川吉美・伊藤重行訳、松籟社、1990)
- 11 Whitehead,AN., *The Aimes of Education and Other Essays*, Williams & Norgate, 1949(ホワイトヘッド、『教育の目的』、森口兼二訳、松籟社、1986)
- 12 Whitehead,AN., *Religion in the Making*, 1926 (ホワイトヘッド『宗教の諸段階』、斎藤繁雄訳、松籟社、1995)
- 13 ルシアン・プライス、『ホワイトヘッドとの対話 1934-1947』、岡田雅勝・藤本隆志訳、みすず書房、1980
- 14 Whitehead,AN.,*Process and Reality*,op.cit.,p.219 (ホワイトヘッド、『過程と実在』、前掲書、p.399)
- 15 小島雅春、「思弁哲学、形而上学、道徳性—『過程と実在』、第一部読解の試み」、プロセス思想、6、1995、pp3-23、
- 16 平田一郎、「『過程と実在』に対する構成的分析と思弁哲学の方法」、プロセス思想、6、1995、23-45
- 17 Wolf-Gazo,E., *Whitehead and Lock's Concept of "Power"*, *Process Studies*, 14(4), 1985, 237-252
- 18 ドナルド・シャバーン、『「過程と実在」への鍵』、松延慶二・平田一郎訳、晃洋書房、1994
- 19 Treasha, J., *Purposive Organization:Whitehead and Kant* ,*Process Studies*, 246-258, 21(4), 1992
- 20 デモクリトスの原子は、種山恭子「生きる自然」の観念、プロセス思想、4、1991、pp17-35 を参照。
- 21 ライプニッツのモナドに関しては、田口茂「時間性と個性—ライプニッツ・フッサール・ホワイトヘッド」、プロセス思想、8、1998、pp3-15 を参照のこと。なお *actual entity* の訳語には、現実的実質、活動的存在、現実的存在などいくつかある。筆者としては活動的存在がふさわしいと考えるが、本研究では「現実的実質」に統一し、原語をそえた。
- 22 *prehension* の訳語は「抱握」に統一した。
- 23 *concrescence* の訳語は「合生」に統一した。
- 24 秩序、目的的社会理論については、ポール・G・クンツ『ホワイトヘッド』、一ノ瀬正樹訳、紀伊国屋書店、1991 を参照。
- 25 デカルトの思惟は『方法序説』を参照。
- 26 ロックの「力」や第一意識説、第二意識説などを参照。
- 27 ベーコンの自然誌『森の森』は、ホワイトヘッドの「抱握」に影響を与えた。
- 28 バークリーはニュートン物理学の批判者としても有名である。ホワイトヘッドはポパーに先立って、バークリーを評価した。
- 29 山本誠作、『ホワイトヘッドと現代』、法蔵館、1991
- 30 田中裕、『ホワイトヘッド—有機体の哲学』、講談社、1998、
- 31 田中裕、『逆説から実在へ—科学哲学・宗教哲学論集』、行路社、1993
- 32 沢田弁茂、「ホワイトヘッドとラッセルを結ぶ」、プロセス思想、3、1989、

- pp1-5,
- 33 Shields G., “Special Focus : Process Philosophy and Technology”,
Process Studies
- 34 大塚稔、「ロマンティシズムの新たな可能性」、プロセス思想、2,
1987,pp41-53
- 35 Whitehead,AN., Science and the Modern World, Macmillan, op.cit., p.49
(ホワイトヘッド、『科学と近代世界』、前掲書、 p.44)
- 36 Whitehead,AN., Science and the Modern World, op.cit., p.149 (ホワイ
トヘッド、『科学と近代世界』、前掲書、 p.141)
- 37 Whitehead,AN., Science and the Modern World, op.cit., 270 (ホワイ
トヘッド、『科学と近代世界』、同上書、 p.252)
- 38 Whitehead,A.N., Adventures of Ideas, Macmillan, 1933, p.43 (ホワイ
トヘッド、『観念の冒険』、山本誠作・菱木政晴訳、松籟社、1988, p.47)
- 39 市井三郎、『ホワイトヘッドの哲学』、第三文明社、 p.168
- 40 市井三郎、同上書、 p.168
- 41 Whitehead,A.N., Adventures of Ideas, Macmillan, 1933, p.43 (ホワイ
トヘッド、前掲書『観念の冒険』観念の冒険、 p.48)
- 42 Whitehead,A.N., Process and Reality, Free Press, op.cit.,p.24 (ホワイ
トヘッド、前掲書『過程と実在』、 p.40)
- 43 Whitehead,A.N., The Aims of Education and Other Essays, William &
Norgate, 1949, pp26-27 (ホワイトヘッド、『教育の目的』、森口兼二訳、
松籟社、1986, pp26-29)
- 44 Whitehead,A.N., Essays in Science and Philosophy, Philosophy Library,
1947, p.99 (ホワイトヘッド、『自然科学論集』上、村形明子・蜂谷昭雄・
井上健訳、松籟社、1987, p.158)
- 45 Nussbaum,C., Logic and Metaphysics of Hegel and Whitehead, Process
Studies, 5(1), 1986, pp32-52
- 46 Curtis,R., Process Via Marx, Process Studies, 32(1), 2003, pp106-120
- 47 Whitehead,A.N., The aims of Education and Other Essays, op.cit.,
pp67-68 (ホワイトヘッド前掲書、『教育の目的』、 pp66-67)

第4章 ホワイトヘッドの環境思想—主要概念

ホワイトヘッドと環境について、第4章は最も中核の章である。ここでは第3章をうけて、まずはホワイトヘッドのコスモロジー(世界観)と環境を論じ、環境と関係項、時空論などモデル全体を捉える。次に有機体の哲学の視点から現実的実質について、生命やモノドロロジー、経験論などを論じる。次にプロセス哲学の視点から、プロセス(過程)、抱握、積極的抱握としてのフィーリング(感じ)、「多」から「一」への収束である合生について論じる。それらの主要概念をもって、環境の知覚から環境の把握へのパラダイム・チェンジを考察する。

その後にはホワイトヘッドの哲学の環境思想としての評価や、ホワイトヘッドを受け継ぐ John B. Cobb Jr. (以下「カブ」)などを紹介する。彼らによって現在の環境問題が取り組まれている。その後にはホワイトヘッドの社会論や目的論、文明論などを考察する。

本章では主著の『過程と実在』や、必要に応じて他の著作からも引用し、できるだけ多くの視点や論点を取り入れるようにし、それらを噛み砕き現実との対応を考える。そのため視覚的にイメージが湧くようにいくつか図解を試みている。先述のように、ここで得られた抱握や合生などの概念は次章で論じる環境問題のみならず、例えば情報、工学基礎論など多くの分野に応用が利くものと思われる。

第1節 コスモロジーと環境

第1項 既存のコスモロジー

ここではホワイトヘッドの有機体の思想を焦点に、これまで議論されてきた環境に関わる主なコスモロジーを紹介・検討する。ホワイトヘッドの有機体論も、目的論、機械論、全体論との関係で検討したい。そのうち、特に本項2)のデカルトによる機械論に注目したい。

1)目的論

古代ギリシャのアリストテレスは自然や生命の営みの説明として四原因論(形相因、質量因、動力因、目的因)を唱え、とくに「何のために」という目的因を中心に説明した。しかし例えばデカルトは、確実性や明証性の観点から、このような目的といった内的な力を認めず、機械論による外的な力のみを認めた。なおホワイトヘッドにも独自の目的観があり、それについては、本章第6節で論述する。

2)機械論

機械論は目的論に反対し自然に一切の目的を認めない立場であり、さまざまな考え方があがる。機械論はデカルトに淵源があり、批判も多いが近代科学技術

の基本にある考え方である。なお機械論には自然科学を推進した積極的な意義があることに注意したい(2章1節参照)。

3)全体論

全体は部分の総和としては認識できず、全体それ自身としての原理的考察が必要であるという立場である。例えば3章で紹介したネスのディープ・エコロジーでは、エコシステムは人間の上位に成立するもので、それに人間や社会が適合するという立場である。

4)有機体論

全体論に対して生命や社会といった複合体は、部分の総和以上の特殊な性質を発現しているものとみて、組織化といった視点を強調する立場である。有機体論には、例えば宇宙を一つの生命体とみたプラトン、ストア派、能産的自然などを唱えたスピノザ、モナドロジー(単子論)のライプニッツ、シェリング、有機体論を目的論の一部としたカント、有機体論が再評価されているヘーゲルにいたるまで多くの論者がいる。機械論的観点からは生体システムは単なる複雑な機械にすぎないが、有機体論的観点からは、生物学が説明すべき有機体は純粋に還元主義的な分析を試みるだけでは説明しつくせない存在で、生命体の特徴はそれらの組織化の程度に帰するというものである。なお John Stewart Mill(以下「ミル」)、Herbert Spencer(以下「スペンサー」)などの社会有機体説では、社会を生物体になぞらえて生成発展する有機的な統合体とみなし、個々の要素が全体の中で一定の機能を果たすとする。社会を生物有機体になぞらえる社会有機体説では、生物を部分に分解すれば死んでしまうから、一度死んだ部分をいくら積み重ねても生命は戻らない、つまり全体は部分からなるのではなく、全体は部分に先だつという考え方になる。とくにスペンサーは、進化の一般法則、つまり脳容積の増大、統合の発達、同質性から異質性への移行という法則が、個人有機体と同様、社会有機体にも適用されることを示そうとした。社会有機体論者は、こうしたアナロジーをはじめは多く用いていたが、のちには有機体説を断念した。大部分の社会有機体論者は当初の狭隘な視点を放棄し、今日ではこのような考え方は克服されている。

上述した有機体論に対して、本研究の対象となるホワイトヘッドは現実的実質による独自の有機体の哲学を提唱するにいたったのである。

5)システム(プロセス)論

Wiener(以下「ウイナー」)のサイバネティクスによれば「自然システムは、変化する環境の中で自らを存続させ、さらに環境の挑戦に応じて自らを創造していく」という。第5章1節でみるように、伊藤重行によれば「ホワイトヘッドの「出来事」(現実的実質)は時間的に非可逆的に推移し、成長、発展、進化していくと同時に、全体と部分の関係も存在しており、これはファースト・サイバネティクスの「自然システムは、変化する環境の中で自らを存続させ

ている」にあたる。また「出来事」はセカンド・サイバネティックスの自己組織性つまり「自然システムは、環境の挑戦に呼応して自らを創造していく」を満たしているという（ホワイトヘッドとシステム論については、5章1節で再論する）。

以上のコスモロジーとホワイトヘッドのコスモロジーの関係をまとめると、ホワイトヘッドはデカルトの機械論を克服し、有機体論、目的論、システム論的な側面を持った独自で総合的な体系といえる。

第2項 ホワイトヘッドのコスモロジー

中村昇もいうように要するに、ホワイトヘッドが難解なのではなく、この世界そのものが難解なのだ。二元的・一元ともいふべき、神と世界、それはまた生成と関係から成り立っている。その世界モデルとはホワイトヘッドなりのコスモロジー、つまりくりかえしになるが、世界を無数の究極的物質（現実的実質あるいは活動的存在、*actual entity*）、つまりは経験の滴り（*drop of experience*）、瞬間的な閃光（パルス）からなるネットワークで構成されるものとみて、それらの現実的実質の無限の生成と消滅の繰り返し、すなわち創造（*creativity*）の過程（プロセス）の構造や機能を記述したものといえよう。

こういったホワイトヘッドの考えは、これまでの哲学に無い視点であり、環境問題を根底から考えさせるものである。例えば、ホワイトヘッドは主著『過程と実在』で次のように述べている。

『有機体』という観念は、『過程』の観点と二重に結合されている。現実的実質の共同体は有機体である。けれども、それは静的な有機体ではない。それは産出の過程にある未完性なものである。こうして、現実的実質に関して宇宙が膨張することが『過程』の第一義的意味である。そしてその膨張の任意の段階にある宇宙が、『有機体』の第一義的意味である。この意味で有機体は結合体である¹。

ここで結合体とは、日常的な経験におけるマクロ・コスモス的な存在をいい、あるいは社会（*society*）とも称される。さてこの意味、特に有機体と過程（プロセス）について考えると、ホワイトヘッドのコスモロジー（世界観、宇宙観）は宇宙大の発想、宇宙時代にも適用可能なもので、現実をよくみており、現実の世界にみられる規則性、差異の反復、秩序をリアルにみているものといえる。

第3項 コスモロジーと環境、関係項

ここでホワイトヘッドの環境の定義や関係項としての身体論、他者論についてのべる。ホワイトヘッドはいう

「人間は存在群の中の一つにすぎない。動物、植物、微生物、生きた細胞、非有機的物理的活動体といったものが存在するのである。科学の始めの頃

には、自然は乗り越えられない境界によって分離された多様な種と類とを含むものとして見聞されていた。今日においては、進化論が支配している。われわれはこの理論が必ずしも上むきの進化を含意していると考えする必要はない²」。

「だが、身体は外界の一部なのであって、外界と連続しているのである。実際、身体は自然の他の何らかのもの、たとえば、河とか、山とか、雲とかいったようなものと同じように、まさに自然の一部なのである³」。

さらに続けて、

「しかしながら、動物と人間との間には、あらゆる推移の段階がある。(中略)人間と動物とのあいだに認められる相違は、ある意味で、程度の差にすぎない⁴」。

「われわれが顕微鏡的精密さでその問題を考える場合、身体がどこで始まり、外的自然がどこで終わっているかということを決する明確な境界は存在しない⁵」。

「身体は存在するために環境を必要としている。こうして一人の人間の中での身体と精神の統一と同様に、身体と環境の統一が存在している。しかし人間の統一を考える場合、われわれは身体よりもむしろ精神の方を強調しがちである⁶」。

「身心の統一は、一人間を形成する明らかな複合体である。(中略)身体というのは各瞬間における人間経験が親密に協同して働く自然の一部なのである⁷。」

さらにホワイトヘッドは、こうもいっている。

「デカルトの『コギト・エルゴ・スム』は『われ思う、ゆえにわれ在り』と誤って訳されている。われわれが目にとめているのは、決してむき出しの思惟、ないしむきだしの存在ではない。わたくしは自分自身を本質的には情緒、享受、希望、恐れ、後悔、選択の価値評価、決断<これらすべてはわたくしの本姓における活動的なものとして、環境に対する主観的反応を示している>の統一体であると見ている。私の統一体<それはデカルトの『われ在り』である>は、この構成体のうねりを、感じの守備一貫したパターンに変えていく、私の過程になっている⁸。」

「われわれは、どんな分子で身体が終わり、外の世界がはじまるのか、ということとはできない。脳髄は身体と連続しており、身体は自然の世界のほ

かの部分と連続しているというのが真理なのだ⁹⁾」

「われわれは、めいめいが他者の中の一者である。そして、われわれはすべて全体の統一の中で抱かれあっているのである¹⁰⁾」

『実質』は世界の持っている『他者性』の総体です。その他者性がわれわれに経験を押し付けるのです¹¹⁾。

こういった現象学にも通じるホワイトヘッドの表現は、メルロ＝ポンテイの身体論である世界と人間の身体のつながりを思わせるものがある。

なお既述のように(第1章第1節第1項)、猪原政治・伊藤重行らの研究によれば、ホワイトヘッドの環境は「人間が価値の創造を目的とした自己創造の過程において、能動的な相互作用により、常に、創造的前進を行う場」であるという。

第4項 コスモロジーと時空論

ここではホワイトヘッドの世界観の構造をベースにして、さらに深く内容を読み解く鍵として、枠組みとなる概念を検討する。研究対象としては『過程と実在』や他の著作からの引用が主であるが、主要な解釈や論点は触れるようにした。またホワイトヘッドの真意に迫る噛み砕いた解釈を心がけた。さらに特に第5章との関係で、応用可能性—例えば環境問題など、ホワイトヘッドの考えが何に応用できるのかということ念頭に考察した。

さてホワイトヘッドは時空に関して、次のようにいっている。

「デカルトにとって、物体の原初的属性は延長である。有機体の哲学にとって、物的契機¹²⁾の原初的關係性は、延長的結合である¹²⁾。」

ここで延長的結合とは、物理的な「場」すなわち時空で、現実的実質の連帯性に基盤を与える形而上学的な「場」でもある。

「時間と連続に関して、連続性の生成はあるが、生成の連続性はない。活動的生起は、生成する創られたものであり、それらは、連続的に延長的世界を構成している¹³⁾」。

ホワイトヘッドの延長的連続体について、中村昇は次のように噛み砕いて解説している。

『延長連続体』とは、『活動的存在(現実的実質)』が、そこから生成してくる時空(空間であり、かつ過去)のことである。つまり、『活動的存在(現実的実質)』が、原始的な形で発生することにより、時間が生じるというの

だ¹⁴。」

「この現実的実質の今、ここの〈唯一無二の経験〉は、連続的に成立しているのではなく、非連続的に生成消滅し（量子論）、それぞれの時間を刻んでいる（相対論）。そして、おおくの『活動的存在（現実的実質）』が、ほかのすべての『活動的存在（現実的実質）』をみずからのうちに含み（抱握）、ある『場』（電磁気学）を形成しているのだ。そして、その『場』は、全宇宙にひろがっている¹⁵。」

「こう考えれば、私たちのまわりをとりかこんでいる空間は、空間であると同時に過去だということになるだろう。つまり、われわれの周囲の空間は、そのまま過去という時間なのである¹⁶。」

ここに、ホワイトヘッドのいう、時間と空間（場）の関係が説かれている。われわれの周囲の空間は、そのまま過去という時間であるといった表現は環境哲学的にも印象深いものがある。またこの延長連続体と社会に関して、ホワイトヘッドは次のように説明している。有機体の哲学では、社会は孤立しては存在しない。それぞれはその社会的環境を前提としている。それゆえ自然は、一連の諸々の社会から派生する。その場合、より広範な社会がより特殊な社会を含んでいる。より一般的な環境は延長的連続体であるが、しかし実際には、論理以外にも過去の環境が永遠的客体的世界への「進入」(ingression)を限定する。われわれの宇宙的時代を超える広大な社会として、延長的連続体が礎定される。それは無数の世代にわたるずっととした社会的継承を通して、純粋な可能態を随所にそして最も一般的に限定する、と。ここで進入とは、永遠的客体が(4章6節第2項)、現実的実質の中に存在する仕方を示している。

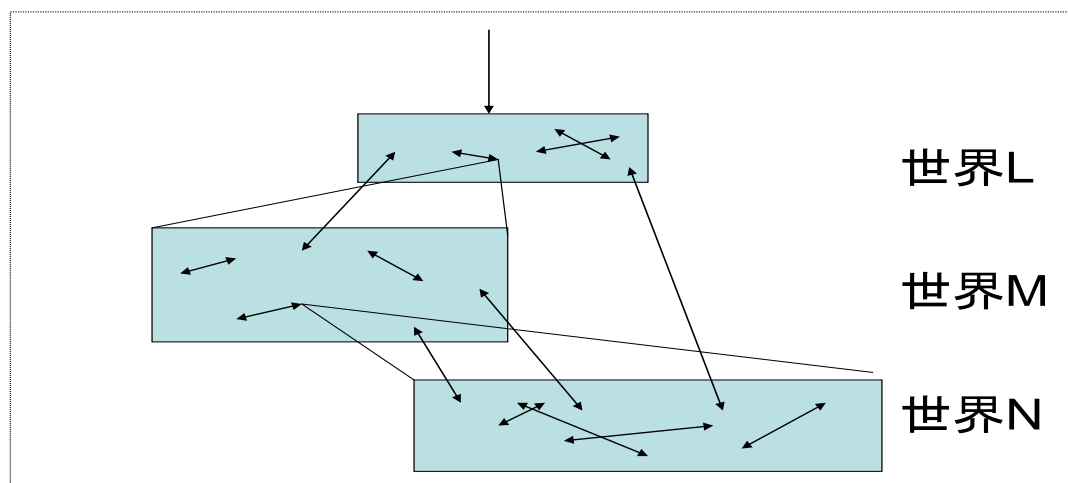
またここで注意したいのは、より広範な社会がより特殊な社会を含んでいるということである。いわゆる社会の重箱的、入れ子状態を意味している。さらにこうした宇宙的時代を超える広大な社会といった表現は、延長的連続体、すなわちわれわれと環境の連帯性や世代間倫理を意味している。また中村は、時空と「場」の関係を次のように説明している。

「ホワイトヘッドにとって電磁気学は、『場』という革命的な概念を提出したことによって、時代をくっきりと画するものだった。その電磁気学とニュートン力学とを調停するために登場したともいえるのが、相対性理論だ。(中略)量子論のホワイトヘッドに対する影響は、いわゆる『量子化』という概念である。電子などにみられる非連続的な性質のことだ。(中略)量子力学によれば、われわれの世界を構成する物質の最小単位は、非連続に連続しているということになってしまう。19世紀から20世紀にかけて物理学によって解明された、(中略)これら驚くべき世界の見方を、哲学の立場から統一的に説明しようというのが、ホワイトヘッドの有機体の哲学なの

である。(中略)このような相対性理論においては、時間と空間は、おなじひとつのものとなる。そのことを『時空連続体』と呼ぶ¹⁷。

「この『場』という概念は、『過程と実在』、では『延長連続体』ということばで呼ばれる。それが『出来事』であり、『活動的存在(現実的実質)』だ。たしかに、さまざまな『出来事』や『活動的存在(現実的実質)』を取り出すことはできるであろう。それは、一瞬ではあれ『もの』的なあり方をする。しかしそれは、恣意的な切り取りにすぎない。こうした『出来事』の重なりが、ひとつの『場』を形成することによって、この宇宙は、成り立っているのである(中略)こうして、『出来事』から時間と空間があらわれてくる。あるいは、最も具体的に出来事<が、時空が発生するという事実から逆算して、この世界で『次々と』生じるといった方がいいかもしれない¹⁸」。

図表 4-1 は、筆者が佐倉統の著作からヒントを得て、ホワイトヘッドの言う場と世界の関係を図で表現したものである。ここで次々と世界(出来事)・・・世界 L→世界 M→世界 N と、互いに関係しつつ出現してくる様子がみてとれよう。



図表 4 - 1 . 関係の階層構造 矢印は要素間(出来事)の関係を表す。
佐倉 統『現代思想としての環境問題』中公新書、p 47 を改変

世界の捉え方に関して、出来事から時間と空間が現れるといったが、ホワイトヘッドは、カント哲学との対比でつぎのように印象的に表現している。

「有機体の哲学はカント哲学の逆転である。カントにとっては、世界は主観(subject)から出現する。有機体の哲学にとって、主体(subject)というよりも「自己超越体」は、世界から創発する¹⁹⁾。

ここでこれらの時空論の背景となっている、ホワイトヘッドの存在論的原理について説明したい。はじめに存在論とは認識論と並ぶ哲学の主要なテーマであり、それは例えば「もっとも根源的に存在するものはなにか」といった問題を扱うが、時間・空間、実体と属性、さらには最近のオントロジー工学（存在論の全体・部分の考えなどを取り入れ、セマンテック・ウェブなどコンピュータソフトウェアにおける対象の記述に依している）などに関わる広い概念である。それとも関わってここではホワイトヘッドの世界（コスモス）を見る視点、立ち位置としての「存在論的原理」について明確にしておきたい。それは一言でいえば「あらゆるものが、必ずどこかになければならない」という至極当たり前のことである。ホワイトヘッドは存在論的原理について次のようにいう。

「存在論的原理によれば、どこでもないところから世界に流れこんでくるものは何もない。現実世界におけるどんなものも、ある現実的実質に関連をもちうる。それは過去における現実的実質から伝達されるか、それともそれがその合生に属している現実的実質の主体的指向に属している²⁰⁾。」

これがホワイトヘッドのいう「存在論的原理」で、

「あらゆるものは積極的には現実態のどこかにあり、潜勢態においては至る所にある²¹⁾」

分かりやすくいうと、「物事を説明する場合、最終的には1)過去に生成し終えて客体となった現実的実質か（『過程と実在』4部）、または2)現に生成しつつある主体としての現実的実質（『過程と実在』3部 抱握論）のいずれかに言及しなければならない」という原理である。つまり一方で、現実には過去の事実が現在、未来を拘束しているということであり、ここにはホワイトヘッドの思想を貫く、存在論における厳然たる過去の事実の重視がある。他方で、それに基づく未来の生成(創造)ということ(時空論)が見て取れる。ここにホワイトヘッドのリアリティがある。すなわち実際には既に現在は過去によって限定されているのだ。これは、環境問題を現実に即して論ずるうえで重要なポイントである。

第2節 有機体—人間と自然

第 1 項 有機体と生命

もともと生命体に関しては、プラトンが宇宙が一つの生命体といており、宇宙と生命に関しては、このほかストア派、ブルーノ、スピノザ、シェリングなどが言及している。

以下ホワイトヘッドの生命観を検討する。ホワイトヘッドはいう。

「論争の第一段階は、生命とは何を意味しうるのかということについて概念を形成することでなければならない。またわれわれは物理的自然という概念の欠陥は、生命との融合によって埋められるべきであると要請する。また他方、生命という概念は物理的自然という概念を含有すべきであることも要請する²²。」

ここで重要なのは生命ということ、また物理的自然と生命との融合という視点であり、次のようにホワイトヘッドは論を進める。有機体のすべては因果的能動性というものによって、自らの営みはその環境に条件付けられていることの経験を持っている、という仮定であって、低次の社会形態に注意を喚起するのは、社会生活が高級な有機体の特異性である、という観念を払拭するためである。実際はその逆なのだ。生き残るという価値に関する限り、ほぼ 8 億年という過去の歴史をもつ一塊の岩石は、どのような国民が達成している短い寿命をも、はるかに超えているのである。ここにホワイトヘッドの有機体論・生命観がよく現れている。さらに続けてホワイトヘッドはいう。

「わたくしが主張している学説は、物理的自然も生命もいずれも、もしわれわれがその相互関連と個的特性が宇宙を形成している『真に実在的な』物を構成する基本的な要因として、それらを融合していないのであるならば、理解不能であるということなのである。ところで、最初に接近してみると、生命という概念は自己享受のある絶対性を意味するということが解る。そのことにはある直接的な個性を意味しなければならず、そういう個性は自然の物理的諸過程によって有意であるとされた多くの与件を、統一的存在に向かって充当していく複雑な過程である。生命はそういう充当過程から生じてくる絶対的な個的自己享受を意味する²³。」

「自己享受というこうした概念は、ここで生命と称した過程の様相を尽くしていない。明瞭さに向かって進む過程は、各々の契機の本性的なものに属する創造的活動の概念を意味する。それはその過程に先立って、現実化されない潜勢態の様相でのみ現存している宇宙において、諸要因を現実存在へと引き出していくのである。自己創造の過程は、潜勢的なものを現実的なものに変えていく過程であり、またそういう変換の事実自己享受の直接性を含んでいる²⁴。」

こうしてホワイトヘッドは、生命の特徴は、絶対的自己享受、創造的活動、目的をもっているということであるという独自の生命観に至る。さらに生命、創造、目的に関してホワイトヘッドはいう。

「しかしまだ、自然の理解にとって基本である創造の概念については言い尽くしていない。依然として生命の記述には別の特徴を付け加えなければならない。その触れられていない特徴とは「目的」(aim)である。この目的という語によってこれから選択可能な無限に豊かな可能性の排除と、統一過程で与件を享受する選択方法を構成している新しさという有限の内包とが意味されている。目的とは、そのようなやり方で与件の享受をしている、感じの複合体である²⁵」。

ここで目的とは、ホワイトヘッドによれば例えば「より良く生きる」ということである。

ところで本章第1節第1項で述べたように、プラトン、アリストテレス、カント、ヘーゲルなど様々な有機体論がある。ホワイトヘッドの独自の「有機体」に関して中村昇は次のように解説する。

「この宇宙は、一刻もとどまることのない関係そのものの流動体ということになるのだ。このあり方こそ、<有機体>なのだ。(中略)こういう、あらゆるものが生き生きとしている状態を、ホワイトヘッドは<有機体>と呼ぶのである。(中略)このような唯一無二の、しかし同時にあらゆる宇宙を包み込む一事態のあり方こそが、生命なのである。(中略)さらにホワイトヘッドは、生命の特徴として、上述の<創造的活動>と<目的を持つ>ことを挙げる。(中略)要するに、ホワイトヘッドが描くこの世界は、根本的に途切れ途切れなのだ。しかし、なぜか世界は連続しているように見える。連続性を保証するのは、周りを取りかこんでいる<過去>という空間だ。これが、ホワイトヘッドの宇宙であり、生命であり、有機体なのだ。非連続でありながら、すべてが連続した状態を「生きている」、つまり、ことごとくが有機的な状態なのである²⁶。」

ここにもベルクソンの面もありながら、ホワイトヘッド哲学独自の生命観・有機体論が現れている。

既述のように一般に有機体論では、生命や社会といった複合体は、部分の総和以上の特殊な性質を発現し、全体は全体として把握するという立場である。機械論的観点からは生体システムは単なる複雑な機械にすぎないが、有機体論的観点からは、生物学が説明すべき有機体は純粋に還元主義的な分析を試みるだけでは説明しつくせない存在で、生命体の特徴はそれらの組織化の程度に帰

するということが重要である。

以上につき村田康常は、有機体の哲学における関係性、関係性における創造性、全体と個の交互連関などを論じており参考になる²⁷。この組織化（秩序）に関しては Paul G. Kunz(以下「クンツ」)が考察を深めており、次章の社会への応用でのキー概念となっている²⁸。

また荒川善廣はホワイトヘッドの生命観に関して、「ネクサス(nexus, 現実の木や家などの結合体)と社会、生命体と非生命体、現象と実在、魂としての場所、生などを論じている。(すなわちホワイトヘッドにおいては)風の香りや花の美しさもその哲学に包摂され、分子や細胞もわれわれ人間と変らないものとして生きている。それが、有機体の哲学である。また鉱物、植物、動物、人間、神、心的極と物的極、物資と記憶などが論点となる²⁹」と解説している。

以上ホワイトヘッドの有機体論、生命論についてまとめたが、ホワイトヘッドの生命や目的の考えは5章でみるように、持続や共生などの環境論、コミュニティにおけるホワイトヘッド流の農業、来るべき望ましい環境社会論などに応用できる。

第2項 現実的実質と生命

ホワイトヘッドの哲学において、とりわけラディカルと思われるのがこれまでしばしば触れてきた世界の究極的物質としての「現実的実質」(actual entity)である。以下はこの現実的実質と生命、モノドロジー、経験について論ずる。

ホワイトヘッドはこの現実的実質といったラディカルなものを世界（コスモス）の説明の手段に使うことによって、逆に世界のありようを実に自然に柔軟に表現しているといえる。「現実的実質」(actual entity)は、時間のファクターをもった「活動的生起」(actual occasion)ともいわれ、世界を構成する究極的な実在物である。「結合体」(nexus)ないし「社会」は、われわれの日常経験におけるマクロコスモス的な存在、つまり個体としての樹木、家屋、人物などを形成する。これはアリストテレス的な「エネルギー(活動態)」であって、出来事(event)ともいわれる。この「現実的実質」(actual entity)は、客体と同時に主体という二重の性格をもつ、経験の一つ一つの生起である。意識は、活動的存在の主体としての働きをもつ多様な形式の一つであるが、ホワイトヘッドでは意識よりも存在が先行する。その存在とは、有機体の哲学においては、物質的なものと精神的なものとの区別がなされる以前の一つの統一性をもった「活動的」な根源的なものである。「現実的実質」(actual entity)は、世界を構成する究極の実在的事物であって、なにかもって実在的なものを見出そうとして、「現実的実質」(actual entity)の背後をさがしてもなにもない。

ホワイトヘッドはいう。

「それら（現実的実質）は、互いにちがう。神は、一つの活動的な存在(現実的実質)である。そして、はるか彼方の空虚な空間における最も瑣末な一

吹きの存在も、そうなのだ。重要さに段階があり、機能もさまざまだが、現実が示す原理において、すべては同一レベルにある。究極的事実は、一様にみな活動的な存在(現実的実質)なのだ。そして、この活動的な存在は、複合的で相互依存している経験のしずく (drop of experience) である³⁰⁾

「現実的実質 (actual entity)はスピノザの実体観念を満たす。それは自己原因的 (causa sui) である³¹⁾」。

ここで自己原因とは、その本質が存在を含むもの、あるいはその本性が存在するとしか考えられないものという意味である。つまり実体とはそれ自体で存在し、それ自体を通して考えられるものである。

この「現実的実質」(actual entity)という言い方は『過程と実在』で多用される。だが、中期では、「出来事」(event)といういい方がされていた。中期から後期にいたる過渡的作品である『科学と近代世界』においては、その「出来事」という概念が、或る出来事と他の出来事とのかかわりを表す「抱握」(prehension)と呼ばれるようになり、それが、つぎに「活動的生起 (actual occasion) という言い方になる。そして『過程と実在』では、最終的に「現実的実質」(actual entity)という概念に彫琢されたのだ。ここにホワイトヘッドの概念と用語の変化の対応がみてとれる。

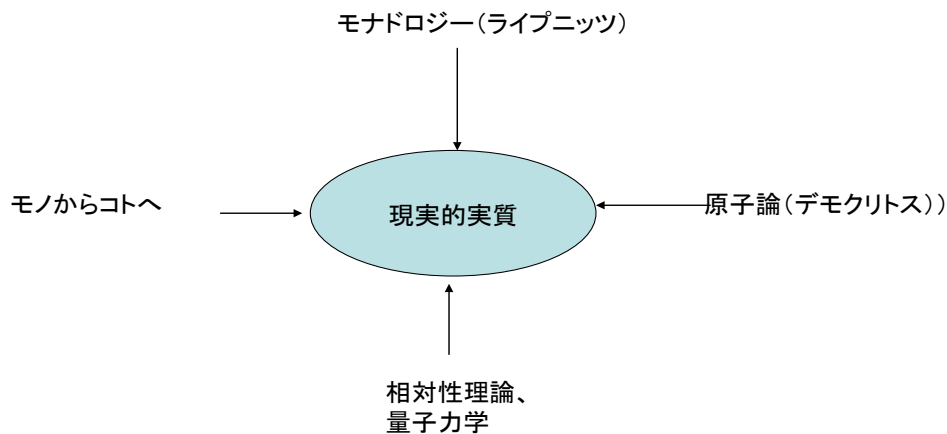
第3項 現実的実質とモナドロジー (単子論)

既述のとおり現実的実質 (actual entity)は、生気を持った瞬間的な「経験の滴り (drop of experience)であり、複合的で相互に依存している。またライプニッツのモナドとは違って、現実的実質は相即しつつも他の現実的実質に入り込むのであり、ここには現実的実質同士のコミュニケーションがある。さらに現実的実質 (actual entity)は変化せず、ライプニッツのように神の予定調和もなく、あるのは絶えざる創造の展開である。ホワイトヘッドはモナドについて、次のようにいう。

「パースペクティブという観念が哲学においてきわめて親しみ深いものであることはご承知であろう。それはまず初めてライプニッツによって、宇宙のパースペクティブを映すモナドという概念において用いられた。わたしも同じ概念を用いているが、ただ私の場合は、彼のモナドという概念を弱めて、空間および時間における統一された出来事(event)という概念に改めた。ある点ではむしろスピノザの様態がいつそう似通っている。それゆえにわたくしは「様態」および「様態的」という言葉を用いるのである。スピノザに似通っていると行ったが、彼の唯一実体は、私の場合では、それ自身を個体化して、相互につながりあったおびただしい様態に化する唯一の基体的実現活動力である。こうして具体的事実というものは過程

(process)である³²。」

「これは単子論である。しかしこれとライプニッツとの違いは、彼の単子
が変化するにある。有機体理論においては、単子はただ生成するだけだ。
各単子的な創られたものは、世界を「感じる」過程の一様態であり、複合
的感じの一つの単位において、それぞれ限定的な仕方世界に宿る過程の
一様態である³³。」



図表4-2 現実的実質の関連領域

図4-2は現実的実質(actual entity)と関連する分野を図式化したものである。

現実的実質(actual entity)は究極の実体とされるが、それを現実の実体とみるか、カテゴリーとみるかWallac,Cなどの論争がある。Wallac,Cは神、瑣末な一吹き存在、一羽の鳥・・・も現実的実質だといっている。このカテゴリーとは4つの観念、つまり現実的実質、抱握、結合体、存在論的原理、4組の範疇(究極性(「創造性」、「多」、「一」)、存在、説明、範疇的拘束)、存在の8つの範疇(現実的実質、抱握、結合体、主体的形式、永遠的客体、命題、諸多性、コントラスト)、説明の27の範疇(「現実世界は過程である」など)などである。現実的実質はカテゴリーともみられるし、また同時に現実の実体でもあり、両面性がある。

注意したいのはこの現実的実質という言葉(概念)には活動(activity)、生成(becoming)と存在(being)といったある意味形容矛盾的な複数の意味が込められており、補論(「ホワイトヘッドのターミノロジー」でも説明するが、ホワイトヘッドの概念・用語の使用(ターミノロジー)にはこうした言葉の使用に関

して特徴があることに注意したい。またそれぞれの現実的実質は有機物であれ石のような無機物であれ、それぞれが主体であることが重要である。すなわちこのモノイド、現実的実質は極(pole)、つまり心的極(有機物)と物的極(無機物)とをあわせ持つことに注意したい。これは心身統合論による持続の考えにつながり、デカルトの二元論批判となっている。

第4項 現実的実質と経験論

ここではホワイトヘッドに独特な経験論、経験と意識などを論ずる。一般にイギリス経験論では既述のミル、ベーコンなどが著名であるが、ホワイトヘッドは、ロック、バークリ、ヒュームなどイギリス経験論の仔細な研究をふまえて独自の経験概念を提出した。つまり前述のように、ホワイトヘッドによれば現実的実質の抱握、合生のプロセスは、経験の滴り(drop of experience)、瞬間的な閃光(flash)ともいわれるが、その根底は人間的な情動であり、こうした経験のプロセスが世界の实在ということになる。ホワイトヘッドはいう。

「私が採用しているのは、意識は経験を前提しており、経験が意識を前提しているのではない、という原理である³⁴」。(これは4節を参照)

「われわれの経験の基礎には「価値」の感覚がある³⁵」。

「経験のなかの第一次的な要因は、第一に、愛、共感、凶暴などの動物的な情感、ならびに、それらに類した欲求と満足であり、第二に、意識的に享受された美や知的優雅さといったもっと明確に人間的な経験である³⁶」

ここで世界の实在が経験のしたたりであり、無機物も経験することがポイントである。すなわちホワイトヘッドによれば、いわゆる無機物は物的極の極限にあるが、無機物でも少しは心があるということである。中村昇によれば、

「『活動的存在』(現実的実質)が、原子的なあり方をしていないとはいっても、この存在は、「もの」ではない。〈いま・ここ〉で、起こっている〈経験そのもの〉だ。〈ここでいま経験している〉『こと』こそが、『活動的存在』(現実的実質)の正体なのである。この経験は、それだけで成立しているわけではなく、ほかの様々な経験が入り込む。(中略)ここで、あきらかにホワイトヘッドは、あらゆる『活動的存在』(現実的実質)に関する『一般化された記述』を基礎づけるさいに、人間の経験を基準にしているといっている³⁷。」

経験論に関して間瀬啓允は、経験を豊かに積み上げる、よりよく生きることを強調する。間瀬はいう。

「倫理の一般原則は、『存在するものそれ自身のもつ固有の価値、内在的とか、内属的といわれる価値は無視されてはならない』ということである。それでは人間生命をも含むすべての生命体に固有の価値を与えるものは何かというと、それは『経験の豊かさ』であり、また『経験の豊かさを感じ取る能力』である。(中略)ただし、ここでの『経験』という言葉から、ただちに『意識的な経験』を思い描くならば、それは人間中心、アントロポセントリックである(第2章の人間中心思想対自然中心を参照)。というのは、『経験』は必ずしも『意識的な経験』に限定する必要はないし、また『経験の豊かさ・経験の豊かさを感じ取る能力』に対して、『意識』を先行条件に立てる必要もないからである。(中略)たしかに『経験は意識を前提する』というのが、従来のアントロポセントリックな意識論の立場であった(2章2節1項を参照)。ところが、これに反して『意識のほうが経験を前提にするのであって、経験は意識を前提にするのではない』という主張も成り立つ。これはロックやデカルトを批判して到達したホワイトヘッドの基本的な立場だったのである。つまり、経験は何よりもまず客観が主観を限定することから始まり、人間をも含むすべての経験構造は、原初的には情緒的なものなのである。そして意識が現れてくるのは、脳細胞の経験が直接的に寄与して、意識的生命となる動物生命においてである。自意識となると、それが現れてくるのは人間の経験においてであり、しかもそれは、後期段階においてのことなのである。ホワイトヘッドの言葉でいえば、『意識は複合的統合の後期派生相においてのみ生じてくる』のである³⁸⁾。

一方 Jorg Nobo は、創造的な連帯性の形而上学にむけて、経験と世界における創造的連帯などを論じており³⁹⁾、ホワイトヘッドの連帯を論じるうえで重要な論考となっている。その連帯に関連して、ホワイトヘッドは次のように言う。

「この体系[有機体の哲学]が保持しようとする整合性は、次の発見、つまり何であれひとつの現実的実質の過程ないし合生は、他の現実的実質をその構成要素のうちを含むという発見である。このようにして、世界の明白な連帯性が説明される⁴⁰⁾」。

第3節 現実的実質とプロセス

第1項 プロセスとは

ここでは現実的実質(actual entity)同士の動きである「プロセス」について考察する。ホワイトヘッドはいう。

「われわれは最初に『過程』の概念を調べてみなければならない。この概念を把握するには、与件、形式、推移、結末の織りなしを分析してみる必

要がある。それによって創造活動が自然の躍動を生み出し、それぞれの鼓動が歴史的事実の自然的統一を形成するような、そういった過程のリズムというものがあることがわかる。このようにして、結ばれ合った宇宙の無限性の中で、われわれは事実の有限の統一を漠然と識別することができるのである。もし過程が現実態にとって基本的なものであるならば、それぞれの究極的な個的事実は過程として記述できるにちがいない。物体についてのニュートンの叙述は、時間から物体を抽象化してとりだしている。つまり、『瞬間にある』物体が考えられているのである。デカルトの叙述もそうである。だが、もし過程が基本的なものであるならば、そのような抽象化は誤っている⁴¹」。

ここでホワイトヘッドは過程の哲学の立場から、ニュートンなどの科学批判を行っているのである（具体を抽象と置き換える誤謬）。過程に関してホワイトヘッドは『過程と実在』において次のようにいう。

「この一連の講義で展開した一つの主要な学説は、＜存在＞（existence）はそれがたとえどのような意味のものであれ、「過程」からは抽象化されえないということである。過程と実在の概念は、たがいに相手を前提している。（中略）点という概念は、ここでは過程がそれ自身、過程を失っている究極的実在という構成体へと分析されうる、ということの含意を意味している。たとえば、どんな時間的ひろがりをも欠いている瞬時という概念—たとえば、かくかくしかじかの日の正午—を考えてごらんになるがよい。そのような概念は、既に過程を失った点という概念である⁴²」。

ここで重要なのは、過程と実在がたがいに相手を前提しているということである。つまり過程は実在であり、実在は過程である。

さてプロセス（過程）とは前述のコスモロジーにおける現実的実質による「動き」であり、具体的なイメージが描け、また様々なプロセスを伴う事象への応用可能性も高い。ホワイトヘッドは世界や自然を固定したものにとらえず、調和をもった創造的連続の過程としてとらえている。このことにつきホワイトヘッドはおなじく『過程と実在』で、前節の引用に続けて次のようにいう。

「第二に、各現実的実質自身、有機的過程としてのみ、記述可能である。それは大宇宙において宇宙であるものを、小宇宙において繰り返す。それは相から相へと進んでいく過程であり、各相はその後継者が当の事物の完結に向かって進んでいくリアルな基礎である⁴³」。

ここで重要なのは、現実的実質の過程は大宇宙で宇宙であるものを、小宇宙においても繰り返すということである。大宇宙と小宇宙が互いに入れ子に

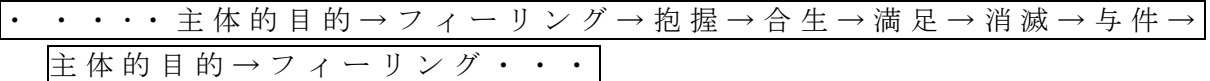
なっているということである。

「現実的実質のその最も具体的な要素への最初の分析は、それがその生成過程において生起してきた諸抱握の合生であることをあらわにする。そのすべての分析は諸抱握の分析である⁴⁴」。

第2項 抱握

上記の抱握、合生の意味について考えたい。まず抱握(**prehension**)とは、現実的実質の生成における現実的実質同士の相互関係を述べているものである。ある現実的実質の可能性が、他の現実的実質の可能性のうちに実現される場合、前者に即して見たときは客体化、後者に即して見たときは主体化とよばれる。この主体化、客体化の関連様態を「抱握」(**prehension**)という。たとえばいまここでの経験の主体にとって、直接それに先立つ過去は、決して失われてしまっているのではなく、それはそのまま残存してはたらいっているのである（既述のホワイトヘッドの「存在論的原理」）。

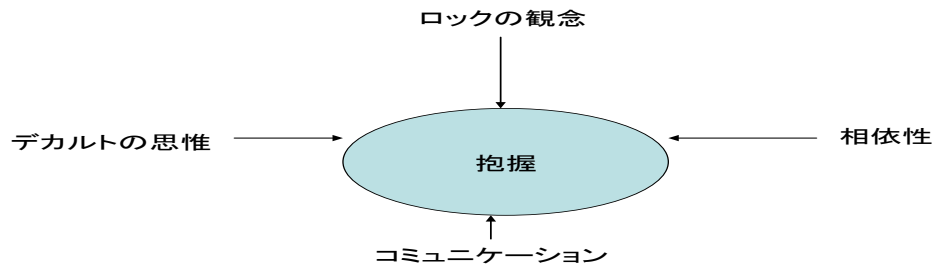
経験の主体はこういう仕方で、直接過去とかかわり、それをみずからのうちに受容している。それは彼方のものを此方へというベクトルの性質をもち、むしろ受動的なはたらきである。ホワイトヘッドのプロセスのイメージは平面的には以下のようになる（実際は図表3-4のように多面的である）。



ここで説明を加えると、上図の主体的志向活動的存在の主体的目的とは、その主体が目指す理想であって、生成する主体が何であるべきかを導く。3項でのべる積極的抱握としてのフィーリング(感受)が、主体をめざすのである。なお主体的志向は、現実的実質がその合生の最初の相において、神を感受することに由来する。この過程は、それ自身を越えた将来において、客体的不滅性を享受する。自己超越体とは、必ず自己を他者(他の活動的存在)に与えるものとして理解しなければいけない。自己を他者に与えるということから、活動的存在を単なる主体として捉えるのは、一面的なわけである。そして活動的存在(現実的実質)は、不完全にしか主体的に統一されていない多くの作用が一つの作用に完全に統一される過程であり、この統一された作用は『満足』と名づけられる。活動的存在が終了するのは、宇宙のあらゆる「項との完全に決定された結びつきを含む一つの複合的な感受を生成することによってなのであり、この結びつきは肯定的抱握であったり、否定的抱握であったりする。この過程の終了が、現実的存在の『満足』である。

さて抱握(**prehension**)はプロセスの中身であり、最も中心の概念である。つまり複数の様々な種類の抱握が活動的存在の具現において統合される過程を記

述することが、『過程と実在』における抱握の理論の主題である。抱握はホワイトヘッドによれば「デカルトの精神的「思惟」ならびにロックの「観念」を一般化したものである⁴⁵⁾という。(図表4-3)。



図表 4-3 抱握の構造

ホワイトヘッドは抱握 (prehension) について次のようにいう。

「わたくしの最近の研究では、この充当過程を表現するために抱握 (prehension) という語を用いている。またわたくしは直接的自己享受の各々の個的行為を、経験の契機 (occasion of experience) と称している。わたくしは存在の統一体、すなわち経験の契機こそが、総体的統一体においてはどこまでも創造的前進に向かって突き進んでいく進化する宇宙を構成する、真に実在的な物なのだという立場をとっている⁴⁶⁾」

「抱握は原子的ではない。それらは他の諸抱握に区分することができ、そして結合されて他の抱握になったりすることができる。またそれらは相互に独立ではない。それらの主体的形式間の関係は、それらの形成を嚮導する一つの主体的指向によって、構成されている。主体的諸形式のこうした相関が、抱握の「交互的感受性」と呼ばれる⁴⁷⁾」。

「それから、統合、除去そして主体的諸形式の決定につれて、抱握の成長がある⁴⁸⁾」。

このように抱握は、成長を続け統合、除去など複雑な過程を経ていることが分かる。さらにホワイトヘッドはいう。

「また例えばいまここでの経験の主体にとって、直接それに先立つ過去は決して失われてしまっているのではなく、直接過去と関わり、それをみず

からのうちに受容する働きをいう。それは彼方のものを此方へというベクトルの性質をもち、むしろ受動的な働きである。ここでベクトルとは情動、目的、価値づけ、因果作用をふくむという意味である⁴⁹⁾。

この「抱握」(prehension)という語は『科学と近代世界』では、「非認識的な把握」という意味で使われたが、『過程と実在』では「関係づけられているという具体的事実」という意味に一般化された。一つの現実的実質(actual entity)は、さまざまな範疇の存在に関係づけられている。すなわち、他の諸々の活動的な存在、永遠的客体、結合体、命題、多岐性、対比など、およそ「ある」とよびうるすべての存在は、一つの現実的実質(actual entity)の成立に際して具体的で確定した関係をもっている。この具体的な関係性の事実を表す最も一般的な用語が「抱握」(prehension)である。

- 物理的抱握 (他の現実的実質を含む抱握)
観念的抱握 (永遠的客体を含む抱握)

- 肯定的抱握 (現実的実質の構成に寄与する抱握)
否定的抱握 (現実的実質の構成から排除する場合)

- ▲ 純粋な抱握 (物理的抱握と観念的抱握)
不純な抱握 (純粋抱握を統合した抱握)

図表 4-4 抱握の種類

現実的実質(actual entity)は現実の世界の最も基本的な構成要素であるから、それを分析することは、さらに基本的な構成要素に還元することではなくて、その世界の他のすべての諸存在との関係性を分析することを意味するのである。あらゆる抱握は三つの要素からなっている。

- 1)抱握しつつある『主体』、すなわち、その抱握が具体的要素となっている現実的実質。
- 2)抱握される『与件』。
- 3)どのようにしてその主体がその与件を抱握するのかという『主体的形式』である。

図表 4-4 に示したように、抱握の与件が他の現実的実質を含む場合は「物理的抱握」、与件が永遠的客体を含む場合は「観念的抱握」と呼ばれる。さらに、

与件がただ一つか複合的かによって「単純」または「複合」という形容詞が付く。物理的抱握と観念的抱握の双方を「純粋な」抱握という。「不純な」抱握は、より後の具現の相において、二つの純粋なタイプの抱握を統合する抱握である。「混成的抱握」は、他の主体に属している観念的抱握あるいは『不純な』抱握を、ある主体が抱握するそういった抱握である。意識、情緒、好み、忌避、目的などは複合的な抱握の主体的形式である。与件が永遠的客体であるとき、その抱握の主体的形式は、とくに「価値付け」と呼ばれる。抱握は宇宙のあらゆる存在と関係をもつとあったが、一つの現実的実質の内的構成に寄与する場合は「肯定的な抱握」と呼ばれ、内的構成から排除される場合は「否定的な抱握」と呼ばれる。「肯定的抱握」は感受と同義的に使われる。主体の統一性のゆえに、「原始的与件」の全体を肯定的に抱握（感受）することはできない。

こういったホワイトヘッドの抱握は、考えてみれば世界や世の自然の理をよく表現しているものと思われる。要するに具体的な例としては、例えば死んだ自然（例えば過去の思想なり）を生きた自然によみがえらすこと（そのある人の思想の再評価）などをいっているものと思われる。環境論的にはリサイクルの概念とも関連してくるものと思われる。

Scarfe は消極的な抱握と創造的な過程について論じている。内容的には消極的抱握と創造的過程、創造的過程における消極的抱握の機能、物的抱握の重要性などいずれも注目すべき論点である⁵⁰。Scarfe によれば消極的な抱握は、活発で有効な因子である。というのも創造における有機的な選択において、消極的な抱握は、創造的過程を動かすものであるからである。ホワイトヘッドにとっては、懐疑的な消極性や批判は、思考の前進のための動的なパワーである。しかしこうした結論は、ホワイトヘッドの哲学を懐疑論の形態と誤解してはならない。逆に懐疑論的な消極性が消極的な抱握のもとにあったとしても、それは創造的なプロセス一般の統合的な因子であり、ホワイトヘッドは様々な懐疑の形態を派生させるように努めているという。

第3項 フィーリング（感じ）：積極的抱握

積極的抱握がフィーリング(feeling)である。ホワイトヘッドによれば、感じ（積極的抱握）は本質的に合生を惹起する移行である。感じの複合的構造は、その移行が何からなっており、何を惹起するかを表現する五つの要因に分析できるといえる。

- 1)感じる「主体」、
- 2)感じられる「最初の与件」
- 3)消極的抱握による「除去」
- 4)感じられる「客体的与件」
- 5)その主体がその客体的与件をいかに感じるかの「主体的形式」

ホワイトヘッドは、「感じ」に関して次のように論じている。

『積極的種類』と『消極的種類』の二種類の抱握がある。現実的実質は、宇宙におけるそれぞれの事項と完全に一定の結びつきをもっている。この決定的な結びつきが、それによるその事項の抱握である。(中略)消極的抱握は、その事項を、主体自身のリアルな内的構造への積極的寄与から判然と排除することである。積極的抱握は、その事項を主体自身の内的構造へ積極的に寄与することへと判然と包含することである。この積極的包含が、それがその事項を『感じ』ることと呼ばれる。(中略)感じられたものとしての現実的実質は、その主体に『客体化』されるといわれる。ある選択された永遠的客体のみが、或る与えられた主体によって『感じ』られる。そしてこの場合、これらの永遠的客体は、その主体への『進入』(ingression)をもつといわれる。しかし感じられない永遠的諸客体は、だからといって無視しうるものではない。それぞれの消極的抱握は、瑣末でかすかなものとはいえ、それ自身の主体的形式をもっているのだから。それは客体的与件にたいしてでないとはいえ、情緒的複合に対して付加する。この情緒的複合は、最終的な「満足」の主体的形式である⁵¹⁾

「概念的感じは、原初的には物的感じから派生し、第二次的には交互的に派生する⁵²⁾」。

「こうして、補完相が、最初の純粋な物的相を引き継ぐ。この補完相は、概念的創始の二つの従属相で始まり、そこから、命題的感じと知性的感じが顕現するかもしれない統合と再統合の諸相へと移行していく⁵³⁾」

「命題が経験に介入するのは、物的感じと概念的感じとの統合から派生する複合的感じの与件を形づくる実質としてである⁵⁴⁾」。

「命題的感じは、抱握主体の過程の後期相においてのみ生じる⁵⁵⁾」。

「『比較的感じ』は、まだ考察していない合生の結果である。その与件は類的コントラストである。より複合的な感じの多様性は、『比較的感じ』の見出しの圏内に入る⁵⁶⁾」。

抱握(prehension)においては感じ(feeling)が重要な概念であるが、それは他動詞的な、主体が知覚の対象として客体を「感じる」ということではなくて、客体が主体に触れて、その客体が「・・・の感じがする」という意味である。

また Arran Gare(以下「アラン・ゲイ」)はホワイトヘッドの積極的な抱握である感じ(フィーリング)について次のようにいう。

「Alexander の著作は、ホワイトヘッドがそれ(『感じ』)を現実的実質の

『合生』における中心と捉えたり、また『感じ』は物的存在、生活、美の性格づけや、倫理の基底を与えると主張したことへの擁護と展開とみられる⁵⁷⁾。

一方、中村昇はホワイトヘッドの「感じ」(feeling)に関して次のように解説している。

「大きい音や強い衝撃を受けたときも、対象と自分とをべつべつに意識するわけではなく、事態そのものがこちらに迫ってくる。だとすれば、やはり、個々の<もの>が存在すると考えるよりも、境界が曖昧なくこと>的な事態が、まずは生じていると考えたほうが実情にあっているだろう⁵⁸⁾。

ここでは最も重要な概念である「感じ」(feeling)を説明したが、「感じ」は自然－自然関係、人間－自然関係、人間－人間関係、社会関係などすべてに適用できる重要な概念である。

第4項 合生－プロセスの具体化

合生(concrescence)は、抱握(prehension)と対になっている重要な概念である。ホワイトヘッドは大要以下のようにいう。

「二種類の流動性がある。一つは個別的な現存の構造に内在する流動性である。この種のもを、『合生』(concrescence)と呼ぶ。別の種類は、個別的な現存が完結して過程が消滅し、その現存を、過程の反復が引き出す別の個別的な実在の構造における初めの要素とする流動性である。この種のもを『推移』(transition)と呼ぶ。(中略)『合成』(concrescence)は目的因へと向かう。そしてその目的因とは主体的志向である。推移は作用因の媒体である。そしてその作用因は不滅な一すなわち客体的に不滅な一過去である⁵⁹⁾。

合生とは、抱握がおこなわれているまさにその状態、すなわちひとつの現実的実質の生成を意味する。つまり多くの現実的実質からなる宇宙が、もとの「多」(many)のそれぞれの項(item)をあらたな「一」(one)の構造に決定的に従属させることによって、個体として関係しあい形成される過程である。そこで現実的実質とは、「多」の「一」への統合を通して自らをつくっていく「自己創造的被造物」(限定を受けながらも新たに創造していく実質)であるといえよう。まず合生の初期の相では選言的に諸々の現実的実質についての多くの「感じ」からなる。合生の相が進むと最終的に「満足(satisfaction)」を達成して現実的実質は完結し、「消滅」する。すなわち次の新たな現実的実質の合生への一つの「与件」になる。因みに山本誠作は「合生」に関して①後続の現実的実質の与件と

なること、②神の記憶として保持されること、③世界の自己形成作用の焦点となることの三点をあげている。

ホワイトヘッドはこういった現実的実質相互の主体—主体関係のサイクル（現実的実質の生成→満足→消滅→次の現実的実質の生成への与件→次の現実的実質の生成・・・）が、鉱物、植物、動物、人間を問わず、ミクロからマクロにいたるまですべてにおいて永遠に繰り返されるとみたのである。これはヘーゲルの弁証法に近いものがある。

さらに合生とは、一つの現実的実質の生成をのべている。つまり多くの現実的実質が決断(decision)によってもとの「多」(many)のそれぞれの項(item)の構造に決定的に従属させることによって、「一つ」の新しい(one)個体として形成される(becoming)過程である。このとき現実的実質は、可能体から存在(being)へと至り、一つだけ世界に増し加えられる(increased by one)。つまり合生の初期の相(phase)では選言的に諸々の現実的実質についての多くの「感じ」(feeling)からなる。合生の相のプロセスが進むと最終的に現実的実質は「満足」(satisfaction)を達成して消滅(perish)し、抱握の与件(datam)となる。要するにホワイトヘッドの世界観は、現実的実質が受容と伝達、内在と超越との交互的ダイナミズムにおいて、世界の創造に参加するというメカニズムである。

ところでホワイトヘッドは、次節でも触れることになる、知覚の三重構造、つまり直接に知覚者が世界を知覚する、呈示的（現示的）直接性と、因果的効果による知覚、そしてこの2つの知覚が、象徴的関連付けによって合生される過程を詳しく解説している。ホワイトヘッドは、合生の過程に関して次のようにいう。

「全ての究極的な決定は、あなたの経験の総体に由来する⁶⁰。」

「合生過程は、十全に決定的な「満足」の達成を持って終息する⁶¹。」

「この満足に体现された感じのトーンは、この客体化のゆえに、超越する世界へと移行していく。世界は自己創造的である。そして自己創造的な創られたものとしての現実的実質は超越する世界の協働創造者として、その不死的機能へと移行していく⁶²。」

「『合生』は、多くの事物の宇宙が、『多』の各項を新しい『一』の構造における従属性へと決定的に追いやることにおいて、個体的統一性を獲得する過程の別称である⁶³。」

「現実的契機は、合生の特殊な事例に帰せられるべき統一性以外のものではない。この合生はこうして、当の現実的契機の「リアルな内的構造」に外ならない。現実的実質の形成的構造の分析は、感じの過程において、(1)呼応相、(2)補完段階そして(3)満足という、三つの段階を与えてきた。満

足はたんに、一切の未決定の蒸発をしるす頂点にすぎない。したがって、感じのすべての様態に関して、そして宇宙における全ての実質に関して、満足した現実的実質は、「諾」か「否」の決定的態度を体現している。こうして満足は、合生の目的因である私的な理想の達成である⁶⁴。

これらの「現実的実質」、「抱握」、「合生」などの意味するところは、一般的なプロセスのメタ概念として、まさに哲学的な、ある意味弁証法的なプロセス知を示しているものと思われる。そこでわれわれもまさにこれらの根本概念に注目せねばならないであろう。自然も人間もさらには情報・人工物もすべて「関係」によって支えられている。そうした「関係」の無限のネットワークこそがホワイトヘッドのいうプロセスということができ、自然と人間が共生する持続型社会にはこうした「有機体の哲学」が必然的に要請されてこよう。さらに合生は、言語の関与という問題もあるが、或る意味社会的で複雑な「合意形成」のモデルとしても有効なのではないかと思う。これについては今後の課題としたい。

第4節 環境の知覚から把握へ

ここで抱握の一つの具体例を考えてみたい。ホワイトヘッドのプロセスの概念（とくに既述の抱握や感じ）を用いて、環境論の転換について、以下に論考する。谷口はいまや環境問題は環境の「知覚」ではなく、環境の「把握」の問題であるとして、近代科学による知覚のあり方の克服を試みた。

近代科学ではこれまで圧倒的に視覚が重視されてきた。しかし既述のように、人間は身体を通して他の世界とつながっている。人間と環境との持続的な相互作用は、視覚以外の感覚によっても環境との一体化を感得していく。

ホワイトヘッドの知覚理論は独特なものであり、「因果的効果（causal efficacy）」「現示的直接性（presentational immediacy）」「象徴的関連づけ（symbolic reference）」という知覚の三重構造からなっている。

因果的効果とは、知覚する場合に身体をつかっているという感じである。環境からの「促し」をそのものとして受け取ることである。

現示的直接性とは、眼前に広がる感覚対象の幾何学的な諸関係の直接的な知覚である。現示的直接性は、因果的効果を基礎としているという点が重要である。

象徴的関連づけとは、因果的効果と現示的直接性をひとつの知覚に融合する総合的活動である。確実に現実的な知識は象徴的関連づけによる。谷口によれば、「M・ポンティは、意味は見えないものであるが、しかしそれは見えるものうちに（透かし模様で）描きこまれているといったが、象徴的関連づけと似たものがある⁶⁵」という。

さてわれわれは基本的には、知覚の三重構造によって物事を知り、また環境を把握している。とくに象徴的関連づけによって因果的効果や現示的直接性に

よるところの、情報や知識を単に比較しただけでは得られない「情動(emotion)」「価値づけ(valuation)」「目的(purpose)」「敵意(adversion)」「反感(aversion)」「自覚(consciousness)」がもたらされる。しかし、それは正しいこともあれば、誤ることもある。因果的効果や現示的直接性はそれ自体としては、正しいとも間違っているともいえない。しかし象徴的関連付けは、解釈に基づいているし、因果的効果による知覚の不確かさや曖昧性のために、象徴が指し示すところの意味が転じやすく未決定であるからである。

ホワイトヘッドは、環境把握にむけて人間の五感の重視と、プロセス理論による人間と環境との交互作用を強調している。知覚の三重構造によって環境と人間ないし主体の交互作用を再解釈し、かつ人間ないし主体の行動パターンをも説明できるようにしなければならないといているのである。これは環境の知覚に関して、これまでの知覚論とは違った、ホワイトヘッド哲学の独自の視点であろう。また5章でも再論するが、例えば身近な生活環境である、公園や景観などもまさに環境の知覚ではなく五感を通しての、自然とのふれあいにこそその真価があるといえる。

第5節 社会と秩序

本節では広く社会について考えてみたい。ホワイトヘッドは、以下に説明する細胞社会、粒子社会など多くのタイプの社会をとりあげつつ、社会と秩序に関して次のようにいう。

「細胞社会には、中央管理型になっている動物生命体がある。また細胞が組織化し共和国を作っている植物生命体があり、分子が組織化し共和国を作っている細胞生命体がある。また空間的諸関係から派生した必要な物の受動的総合をしている大規模な無機的分子社会があり、もっと大規模な自然の受動性のあらゆる痕跡を失った下分子活動がある⁶⁶。」

「動物と植物との生ける世界を見渡すとき、そこに全てのタイプの身体がある。生けるそれぞれの身体は社会であり、それは人格的でない。全ての脊椎動物も含めて大抵の動物は、「人格的」である従属的社会によって支配された、社会体系をもっているようにみえる⁶⁷。」

「社会的秩序を享受し、数珠つなぎになった存続物に分析しうる結合体は、『粒子的社会』とよばれる⁶⁸。」

「様々な諸結合体を際立って異なった諸々の限定性質でパターン化して纏め上げて、構造化された社会がなりたっている。これらの諸結合体のあるものは別のものよりもより低度のタイプであり、あるものは際立って高度のタイプである。同じ構造化された社会の中に『従属的』諸結合体と『支

配的』諸結合体がある。このように構造化された社会は、その下位社会のそれぞれ、従属的なものも支配的なものも同様に維持する直接の環境を与えるだろう⁶⁹」。

さらにホワイトヘッドは、社会についてきびしい見方をしている。

「生きている社会のもう一つの特色は、それが食物を必要とすることである。(中略)こうして、全ての社会は、その環境との相互作用を必要とする。そして生きている社会の場合、この相互作用は窃盗(強奪)という形をとる。生きているこの社会は、その解体する食物よりも高次の有機体であるかもしれないし、そうでないかもしれない。しかし一般の善のためになるうとなるまいと、生命は窃盗(強奪)である。この点でこそ、道徳が生命にとって、焦眉のものとなる。窃盗者(強奪者)は正当化を必要とする⁷⁰」。

ここにはホワイトヘッドの社会に対する厳しい見方や、道徳観がよく現れていると思う。さらにホワイトヘッドは、いくつか注目すべき社会的発言をしている。

「私は、女性が大きな間接的影響力を持っているのは本当であると思います。そして、まさにこのために、女性は政治組織の中で明確な決まった位置をあたえられるべきなのです⁷¹」。

またプライスによると、ホワイトヘッドはアメリカ人の「心の温かさと抜け目なさとの混合」に注目していたといわれる。さらに国連(国際連盟)に関して、ホワイトヘッドは次のようにいう。現在の国連が代表する道徳の枠内での、同情的妥協に基づく世界の統一がもたらされないかぎりには、わたしは文明の将来になんらの希望をも認めることはできない、と。

これは伊藤重行(『ホワイトヘッドの政治理論』)によれば、ホワイトヘッドが1939年に、「正気への訴え」(An Appeal to Sanity)に寄稿した論文の脚注とされる。ここで同情的妥協とは、国連が代表する倫理の枠内での好意的歩み寄りに基づく世界統一の事をいっている。しかしホワイトヘッドには、もう一歩具体的な提言に結び付けてほしいところである。このように断片的ではあるが、ホワイトヘッドは社会問題にも関心をよせていたことが分かる。

第6節 目的と文明

この節ではさらにホワイトヘッドの哲学の根本テーマである、社会や人生の目的とはなにか、文明とは何かといったことを考えてみたい。関連してホワイトヘッドのいう永遠的客体を考察したい。

第1項 ホワイトヘッドの目的論と文明

ホワイトヘッドは『観念の冒険』において、文明批評として真理、美、冒険、芸術、さらにそれらを結びつける平安（諸調和の調和）を挙げ、彼なりの目的観を提示し、それとも関わって「創造性」について次のようにのべている。

「こうして生命の特徴は、絶対的自己享受、創造的活動、目的をもっているということである⁷²」。

「『創造性』は新しさ(novelty)の原理である。現実的契機は、それが統合する『多』のうちにあるどんな実質とも区別された新しい実質である。こうして『創造性』は、離接的で宇宙である多の内容に新しさを導入する⁷³」

平田一郎は秩序という観点から環境倫理とも関係付けて、目的論的自然観に立ち次のようにのべている。

「有機体の哲学は、自然の微小な生起から地球規模のある生起、動物の活動、人間の行為から組織（企業や政府等）の活動までもすべてが、同等な自己目的、自己創造的な現実的実質として、相互に関わり秩序を目指すことを認める視点を提供するのであろう。そして今環境倫理と称され、必要とされているのはまさにこういった視点ではないのか⁷⁴」。

筆者はこうした見方に賛意を表すものである。5章でのべるように、いまこそホワイトヘッドのいうところに耳を傾け、同等な自己目的的でかつ自己創造的に、相互に価値を認め合って連帯しなければならない。

ところでホワイトヘッドは「究極的なものの範疇」(カテゴリー)として、「創造」、「多」、「一」を挙げて説明している。

- (1) どんな瞬間においても宇宙は選言的に多様な「多」を構成している。
すなわち、具体的な事物が生成する可能性は「あれか、これか」という可能性の選択肢として与えられており、そのいずれかを決断することによって現実的な事物が生成する。
- (2) 「多」が複合的な統一性の一部となっていくのは、事物の本性による。
すなわち、可能性の「選言」から現実性の「連言」へと移行することを促す働きが創造活動である。
- (3) この統一、すなわち合生から生じた「一」は真に新たなものである。
すなわち、それは統一された「多」を超えており、それとは異なるものである。「多は一になることによって一つだけ増し加えられる」。

ところでこの創造活動は、一切の形あるものを超えていく純粋な活動で、それ自身は「その偶有性(accidents)」によってのみ現実的である。神ですら、創

造活動の「原始的な非一時間的偶有性」と呼ばれる。ホワイトヘッドの哲学(プロセス神学)では神も現実的実質の一つであり、神を含む一切の現実的実質は、創造活動により創られたものであり、創造活動を制約する条件となるという。

第2項 永遠的客体

ホワイトヘッドは現実的実質(actual entity)に対して、可能の実質というべき、可能界の対象を「永遠的客体」(eternal objects)とよんでいる。それはプラトンのイデア論と類比的に、特殊な直接的経験に訴えることなしに理解しえ、時空を超えたものとされる。この「永遠的客体」の機能は、生成しつつある経験に対して、その最初の「主体的目的」を付与するところにある。以下大要を記す。

「ある存在を観念的に認知するとき、その認知が時間的世界の何らかの確定した活動的存在と必ずしも関係しない場合がある。こういった存在を『永遠的客体』と呼ぶ。(中略)永遠的客体は恒に活動的存在に対する可能態である。しかし、観念的に感受されるものとして、永遠的客体は、時間的世界のどの個別的な活動的存在のうちに物的に進入するかについて中立的である⁷⁵」。

永遠的客体には、主体的種と客体的種があり、前者は数学的、プラトンの形相であり、後者は情動、好み、忌避などである。なおこの「永遠的客体」に関して、中村は次のように分かりやすく説明している。

「たとえば、複雑で目くるめくようなこの世界の混沌を前にして、われわれは「コップ」という言い方で、その一断面を切り取る。そのときの「コップ」や、その「色」や「形」が、「永遠的対象(客体)」だ。流動している過程のなかの変化していない側面が、「永遠的対象(客体)」なのである。(中略)「永遠的対象」は、それぞれ個体でありながら、ほかの「永遠的対象(客体)」とも一般的関係をもっている。つまり、ひとつひとつの「永遠的対象(客体)」は、ただひとつのものでありながら、その在り方は、ほかの永遠的対象との関係によってきまるということだろう。「このコップ」だけがもつ赤色は、ほかの様々な赤色と一般的関係をもちながら、しかしやはり、それ独自の色をもつということだ⁷⁶。」

第7節 ホワイトヘッドの環境思想の評価と後継者の思想

第1項 環境思想としての評価

環境問題に限定してもホワイトヘッドの影響は少なくない。わが国でもホワ

イドヘッドと環境問題に関する本が出版されており^{77,78}、さらに管見でも第2章3節で紹介した、環境学者・マーチャント、ナッシュなどのホワイトヘッドの引用や言及が見られる。

ホワイトヘッドはこれまでプロセス神学やスピリチュアルな面で評価が与えられてきたが、もともとは自然科学者(数学者)であり、また本研究5章でも紹介するように豊富な哲学の素養とそれに基づく多くの社会的発言などもあり、神学やスピリチュアルな面もたしかに重要ではあるがそれだけではない。とくに主著の『過程と実在』(“*Process and Reality*”)にみられる論理性・構造化は環境問題の根底に重要な意味を示唆しており、もっと注目されるべき哲学者のひとりである。ホワイトヘッドの哲学には先述の「全地球の死」(1章4節2項参照)といったコスモロジカルな視点に立った、自然と人間と社会など総合的な視点が展開されているので、それに立脚する環境問題への取り組みがますます期待されると考える。ここにホワイトヘッドの哲学と環境を論じるポイントがある。

マーチャントは、カリフォルニア大学教授でエコフェミニスト、科学史の専門家でもある。フランクフルト学派の影響を受け、近代の科学革命や産業革命を批判している。代表的な著書に『自然の死』があり、その中で反資本主義的産業主義、反性差別・反人種差別を主張しており、『ラディカル・エコロジー』では地球全体のエコロジー革命を試みている。現実的実質(actual entities)と環境の関係について著書『ラディカル・エコロジー』のスピリチュアル・エコロジーのなかのエコロジープロセス神学の章で、神学とエコロジーの関係を問うている。さらにカブや David Ray Griffin (以下「グリフィン」)にもふれている。マーチャントはいう。

「ホワイトヘッドがチャールズ・ハーツホーンを教えた。全てが過程の中にあるのではなく、アクチュアルであることが過程なのだ。原子や分子はそれぞれの物質としてではなく、エコシステムとして観察されねばならない。また神は混沌から世界を創造した。それぞれの個物(individual)は、有機体であれ原子であれ内在的な価値をもつ。人間と人間でないものとの連続性がある。犬、植物、岩であれエコシステムにおいて互いに助けあう役立つ価値をもっている⁷⁹」。

以上の文章から、マーチャントはエコシステムと過程(プロセス)に関して、ホワイトヘッドの思想の正当な評価をしていることが分かる。

一方、アメリカ思想史や環境倫理、思想の専門家であるナッシュはいう。

「ホワイトヘッドの過程の哲学と、フランスの古生物学者で神父のテイヤール・ド・シャルダン、は、広く道徳的な意味での自然の成り行きを探求した。かれらは幾人かのアメリカの研究者を鼓舞した。ホワイトヘッドもテイヤールも、とくに環境倫理や自然の権利について論じたわけではない。

テイヤールの思想はいくら良く見ても曖昧であった。自然は彼にとってはおもに意識の進化を通しての発生の立脚点であった。しかし二人の思想家は、他の人ならば環境倫理の構築のために使った全てのものの内在的価値の哲学的な基礎作業を据えた。ホワイトヘッドの弟子であるチャールス・ハーツホーンの学生であった Daniel Day Williams は、この展開における開拓者であった（中略）ホワイトヘッドは生態学者ではなかったが、宇宙のあらゆる物体の同一性と目的は、あらゆる他者との関係から生じているといった、もっとも根本的な意味での生態学的世界観を表現した。⁸⁰。

この中で印象的なのは、ホワイトヘッドの哲学が、もっとも根本的な意味での生態学的世界観を表現したと述べているところである。

そしてカブはディープ・エコロジーとプロセス思想について人間や自然の内在的な価値、倫理の重要性を論じ、ディープ・エコロジーの環境問題への貢献は非常に大きいとしている。またカブとグリフィンが環境倫理での含意や社会的正義のポリシー、環境の持続可能性を議論した。カブによると、McDaniel は内在的価値はすべての物理世界を含むとしたし、Armstrong-Buck はホワイトヘッドの哲学を環境倫理の基礎とみて、価値は非人間にも与えられるとしたという。

2章で紹介したカプラは、『現実の新しいヴィジョン』のなかの「時空を超えた旅」の中で科学の方法論を論じ、ホワイトヘッドが科学の本質についてと紹介している。カプラの東洋思想や、ラブロックのガイアは神秘的な面をもつが、地球生命主義である。

オーストラリアの Arran Gare（以下「アラン・ゲイ」）は、マルクス主義とホワイトヘッドの融合を試みている。倫理や政治の問題だけでなく、オーストラリア文化の視点に立ち、環境問題の原因の究明および克服の鍵を模索している。さらにアラン・ゲイは、芸術とラディカルな改革、宇宙を守るための自由の獲得、環境的に持続可能な文明の創造—エコ・マルクス主義的パースペクティブ、プロセス哲学とエコ倫理、物語と環境保護主義の倫理および政治などについても論じている。

以上本論第4章で言及したマーチャント、ナッシュ、カプラやその他の環境学者からのホワイトヘッドの環境論としての評価を若干紹介した。これをみると全てというわけではないが多くの環境の研究者からは、ホワイトヘッドが環境の学問の基礎づけにおいて貢献があったこと、コスモロジーや有機体・プロセスという基本的な発想に賛意を示していることがわかる。筆者としても、ホワイトヘッドが結果として、いわば環境哲学の基礎を創った（決してホワイトヘッドが意図したわけではないにせよ）と環境の専門家から評価されていることに、深い感銘をおぼえるものである。

第2項 後継者カブ等による展開

これまでホワイトヘッドの思想・哲学を検討してきた。またその主要概念と環境問題も考察してきた。しかし、実はホワイトヘッドの生きた時代と今日ではいろいろ事情も変わってきた。確かにホワイトヘッドの生きた時代にもあり、今日にも通ずる環境破壊や人心の荒廃もあったかもしれないが、例えば現実には、全地球の環境破壊などホワイトヘッドの予想もしない事態を招いている。やはりホワイトヘッドの後を継ぐ弟子や同調者もみていかねばならない。そこで限定されてはいるが後継者の幾人かをみていきたい。すなわち、これまでにもしばしば登場したカブ、Okamoto、Muraca などである。ここでは第5章にむけて、ホワイトヘッドの思想を受け継ぐものに焦点をあて、ホワイトヘッドとの関係や展開、環境問題をみていきたい。すなわち彼らは、今日の環境問題にどう応えているか。またその評価、論点を明らかにしたい。

カブは人口、人口爆発と人間に近いものの世界の権利、プロセス思想と組織研究、共通善へ向けて(H.Daly と共著)、持続的な農業(Birch と共著)デーブ・エコロジーとプロセス思想、持続性の確保、マルクスとホワイトヘッド、ホワイトヘッドと人間学、偶像としての経済主義、世界の貧困や環境問題の構造を分析し、それを克服する道を探求し、宗教の役割を探求している。また地域コミュニティの大切さを見直し、過度な貿易の自由化・グローバル化への反対という点で、西欧の宗教界を代表している。持続に関してカブは石油に頼らない食料・農業のあり方や、キューバの小規模有機農業を評価している⁸¹。

また Barbara Muraca は、文化的・自然的・社会的世界が、本質的に相互連結しているという仮定にたって、持続の体系的な理論構築を呈示している⁸²。すなわちプロセスの思想は、近代の二元論的パラダイムを繰り返すことではなくて、組織的な持続性の理論に哲学的な背景をあたえるものであり、自然や生産物に関する理論への道を拓く。連帯と自然への尊敬は、われわれの自由や創造性を限定するものではないという。

カブに賛成する Dennis U. Okamoto は第5章でみるように、アメリカでの家族農業の体験をもとに、日本型の家庭農業や地域コミュニティの大切さを強調する。Okamoto は30年におよぶ地域コミュニティの活動をとおして、持続的な農業コミュニティのモデルを考察している。それはホワイトヘッドの人間の本性の哲学的考察（特にホワイトヘッドの『観念の冒険』に詳しい）による素質（instinct）、知識（intelligence）、知恵（wisdom）をベースに、さらに予見（foresight）が本質的なものだとし、これにさらにカブのアーシズム（earthism：コミュニティにおいて、人々が互いに持続のために必要なものを適正に供給しあう）の概念をとりいれモデルを提案している。この共同体モデルでは経済的な物質のみならず、家族や隣人、自然環境を勝ち取り、維持し発展させることがコミュニティを持続可能なものとする。つまり純粋な個人主義ではなく、互いの協力や満足、成功が最終の目的であるとする。このためには、哲学的な背景のあることと、それが共同体の目的を成功させるための本質的な

ことであると主張する⁸³。

【第4章 小括】

本研究の中核部分である第4章では、ホワイトヘッ드의哲学のポイントであるコスモロジーと環境、時空論、有機体としての人間や自然を対象に、特に中核的概念である現実的実質や、生命、経験論、さらに現実的実質の生成展開としてのプロセス、プロセスにおける抱握、合生などのホワイトヘッ드에特有な概念や発想を検討した。

さらにそれらの概念を応用したホワイトヘッ드의知覚論、社会と秩序、目的と文明、永遠的客体などを考察した。

また例えばホワイトヘッ드의哲学におけるにおける生態学など環境思想としての評価や、ホワイトヘッ드의後継者としてのカブなどの思想についても紹介し、考察した。これらの諸概念は広く応用可能性をもち、次章ではその実際面への応用を検討する。

【第4章の注】

- 1 Whitehead,A.N., *Process and Reality*,Free Press,1978,p.214 (ホワイトヘッド、『過程と実在』、松籟社、1991,p.374)
- 2 Whitehead,A.N., *Modes of Thought*,Macmillan,1938,p.153 (ホワイトヘッド、『思考の諸形態』、松籟社,1990, p.144)
- 3 Whitehead,A.N., *Modes of Thought*, Macmillan, 1938, op.cit.,pp.29-30 (ホワイトヘッド、同上書, p.34)
- 4 Whitehead,A.N., *Modes of Thought*, Macmillan, 1938, p.37(ホワイトヘッド、同上書,p.41)
- 5 Whitehead,A.N., op.cit., p.221(ホワイトヘッド、同上書,p.197)
- 6 Whitehead,A.N., op.cit., p.221(ホワイトヘッド、同上書,p.198)
- 7 Whitehead,A.N., op. cit.,p.156 (ホワイトヘッド、同上書、p146-147)
- 8 Whitehead,A.N., op.cit.,p.227-228 (ホワイトヘッド、同上書、p.202-203)
- 9 Whitehead,A.N., *Adventures of Ideas*,Cambridge University Press,1933, p.226 (ホワイトヘッド、『観念の冒険』松籟社、1988,p.310)
- 10 Whitehead,A.N., op.cit.,p.151(ホワイトヘッド、前掲書『思考の諸形態』、p.141-142)
- 11 Whitehead,A.N., op.cit.,appendex (ホワイトヘッド、同上書、p.238)
- 12 Whitehead,A.N., *Process and reality*,op.cit.,p.288 (ホワイトヘッド、前掲書、『過程と実在』、p.517)
- 13 Whitehead,A.N., op.cit.,p.35 (ホワイトヘッド、同上書,p.60)
- 14 中村昇、『ホワイトヘッ드의哲学』,講談社,2007、p.77
- 15 中村昇、同上書、p.82
- 16 中村昇、同上書、p.93

- 17 中村昇、同上書、p.58-59
- 18 中村昇、同上書、p.56
- 19 Whitehead,A.N., *Process and Reality*,op.cit.,p.88 (ホワイトヘッド、前掲書、『過程と実在』、p.152)
- 20 Whitehead,A.N., op.cit.,p.244 (ホワイトヘッド、同上書,p.444)
- 21 Whitehead,A.N., op.cit.,p.40 (ホワイトヘッド、同上書、p.67)
- 22 Whitehead,A.N., *Modes of Thought*,Macmillan,op.cit.,p.205 (ホワイトヘッド前掲書、『思考の諸形態』、p.185)
- 23 Whitehead,A.N., op.cit., p.205 (ホワイトヘッド、同上書,p.185)
- 24 Whitehead,A.N., op.cit.pp.205-206 (ホワイトヘッド、同上書、p.186)
- 25 Whitehead,A.N., op.cit., p.207-208 (ホワイトヘッド、同上書、p.187)
- 26 中村昇、前掲書、『ホワイトヘッドの哲学』、p.64-67
- 27 村田康常、「有機体の哲学における関係性と情的知」、プロセス思想、9, ,2000,pp74-88
- 28 ポール・G・クンツ、『ホワイトヘッドー秩序への冒険』、一ノ瀬正樹訳、紀伊国屋書店、1991、pp74-88
- 29 荒川善廣、「ホワイトヘッドの生命観」、プロセス思想、11,2004,pp46-61
- 30 Whitehead,A.N., *Process and Reality*,op.cit.,p.18 (ホワイトヘッド、前掲書、『過程と実在』、p.30)
- 31 Whitehead,A., N.op.cit.,p.222 (ホワイトヘッド、同上書,p.405)
- 32 Whitehead,A.N., *Science and the Modern World*,Macmillan,1925,p.102-103 (ホワイトヘッド、『科学と近代世界』、松籟社,1991, p.94)
- 33 Whitehead,A.N., *Process and Reality*,op.cit., p .80 (ホワイトヘッド、前掲書、『過程と実在』、p.138)
- 34 Whitehead,A.N., op.cit.,p.53 (ホワイトヘッド、同上書,p.89)
- 35 Whitehead,A.N., *Modes of Thoughts*,Macmillan,op.cit.,p.149 (ホワイトヘッド、前掲書、『思考の諸形態』、p.140)
- 36 Whitehead,A.N., *Adventures of Idea*, Cambridge University Press,op.cit., p.18(ホワイトヘッド、前掲書、『観念の冒険』、p.13)
- 37 中村昇、前掲書、『ホワイトヘッドの哲学』、p.78
- 38 間瀬啓允、『エコフィロソフィ提唱』、法蔵館、1991
- 39 Nobo,J., *Experience, Eternity, and Primodability : Steps Toward a Metaphysics*, *Creative Solidarity, Process studies*, 26(1-4), 1997, 171-204
- 40 Whitehead,A.N., *Process and Reality*,op.cit.,p.7 (ホワイトヘッド、前掲書、『過程と実在』、p.10)
- 41 Whitehead,A.N., *Modes of Thoughts*,Macmillan,op.cit.,p.120-121 (ホワイトヘッド、前掲書『思考の諸形態』,p.116)
- 42 Whitehead,A.N., op.cit., p.131 (ホワイトヘッド、同上書、p.125)
- 43 Whitehead,A.N., *Process and Reality*op.cit.,p.215 (ホワイトヘッド『過

- 程と実在』、前掲書、p.374)
- 44 Whitehead,A.N., op.cit.,p.23 (ホワイトヘッド、同上書,p.38-39)
- 45 Whitehead,A.N., Process and Reality,op.cit.,p.59 (ホワイトヘッド、同上書,p.31)
- 46 Whitehead,A.N., Modes of Thought,Macmillan,op.cit.,p.205-206(ホワイトヘッド、『思考の諸形態』、前掲書、 p.186)
- 47 Whitehead,A.N., Process and Reality,op.cit.p.235(ホワイトヘッド、前掲書『過程と実在』、 p.428)
- 48 Whitehead,A.N., op.cit.,p.235(ホワイトヘッド、同上書,p.429)
- 49 Whitehead,A.N., op.cit.,p.19 (ホワイトヘッド、同上書,p.31)
- 50 Scarfe, "Negative Prehension" Process Studies,32(1),2003,94-105
- 51 Whitehead,A.N., Process and reality,op.cit.,p.41 (ホワイトヘッド『過程と実在』、前掲書、 pp.68-69)
- 52 Whitehead,A.N., op.cit.,,p.247 (ホワイトヘッド、同上書,p.449)
- 53 Whitehead,A.N., op.cit.,p.247 (ホワイトヘッド、同上書,p.450)
- 54 Whitehead,A.N., op.cit.,p.256 (ホワイトヘッド、同上書,p.464)
- 55 Whitehead,A.N., op.cit.,p.260 (ホワイトヘッド、同上書、 p.471)
- 56 Whitehead,A.N., op.cit.,p.266 (ホワイトヘッド、同上書、 p.481)
- 57 Gare,A., Process Philosophy and Ecological Ethics, Journal of Environmental Thoughts and Education, 1, 2007, P.71
- 58 中村昇、『ホワイトヘッドの哲学』、講談社、2007,p.109
- 59 Whitehead,A.N., Process and reality,op.cit.,p.210 (ホワイトヘッド、前掲書『過程と実在』、 p.366)
- 60 Whitehead,A.N., Modes of Thought,op.cit.,appendex (ホワイトヘッド、『思考の諸形態』、前掲書、 p.230)
- 61 Whitehead,A.N., Process and Reality,op.cit.,p.84 (ホワイトヘッド、前掲書『過程と実在』,p.145)
- 62 Whitehead,A.N., op.cit.,p.85 (ホワイトヘッド、同上書,p.146)
- 63 Whitehead,A.N., op.cit.,p.211 (ホワイトヘッド、同上書、 p.367)
- 64 Whitehead,A.N., op.cit.,p.212 (ホワイトヘッド、同上書,p.369)
- 65 谷口昭三、ホワイトヘッドの知覚論から環境把握の理論へ、プロセス思想、6,1995,pp89-124
- 66 Whitehead,A.N., Modes of Thought,Macmillan,op.cit., p.215 (ホワイトヘッド、前掲書『思考の諸形態』, p.193)
- 67 Whitehead,A.N., Adventures of Ideas,Cambridge University Press, op.cit.,p.207 (ホワイトヘッド、前掲書『観念の冒険』, p.283)
- 68 Whitehead,A.N., Process and Reality,op.cit, p.35 (ホワイトヘッド、前掲書『過程と実在』、 p.59)
- 69 Whitehead,A.N., Process and Reality,op.cit, p.103 (ホワイトヘッド、同上書,p.176)

- 70 Whitehead,A.N., Adventures of Ideas,Macmillan,op.cit., p.105 (ホワイトヘッド、前掲書『過程と実在』,p.180-181)
- 71 Whitehead,A.N., Process and Reality,Cambridge Unoversity Press, op.cit., p.105 (ホワイトヘッド、前掲書『観念の冒険』、p.415)
- 72 Whitehead,A.N., Modes of Thought,op.cit,p.208 (ホワイトヘッド、前掲書『思考の諸形態』、前掲書,p.187)
- 73 Whitehead,A.N., Process and Reality,op.cit.,p.21 (ホワイトヘッド、前掲書『過程と実在』、 p.34-35)
- 74 平田一郎、プロセス思想、ホワイトヘッドの目的論的自然観, 5, 1982,25-37,
- 75 Whitehead,A.N., Process and Reality,op.cit., p.44 (ホワイトヘッド、前掲書『過程と実在』、 p.74)
- 76 中村昇、前掲書『ホワイトヘッドの哲学』、講談社, 2007, p.105
- 77 間瀬啓允、『環境思想の課題』、行路社、1993, pp5-19
- 78 山本誠作、『ホワイトヘッドと現代』、法蔵館、1971
- 79 Merchant,C,, Radical Ecology:the Search for a Livable World,Taylor and Fransis, 2005, pp133-134
- 80 Nash,R., The Right of Nature, Univ. Wisconsin Press, 1989, p.62
- 81 Cobb,J.B.Jr., "Sustaining the Common Good", Cleveland, Ohio, Pilgrim Press, 1994
- 82 Muraca,B., Process Studies, Welt, Umwelt, Mitwelt : Cultural, Natural and Social World As complex Interwined Field of Internal Relatuions : Contributions to Process Thoughts to a General Theory of Sustainability, Process Studies, 34, 2005, PP.97-116
- 83 Okamoto, Dennis Y., Towards Attaining a Sustainable Community, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会 30周年記念全国大会報要旨集, 2008, PP.121-129

第5章 共生型持続社会に向けて

これまでホワイトヘッ드의理論を、いろいろな側面から考察してきた。特に有機体の哲学、プロセスの哲学を中心に、環境問題におけるこれまでのホワイトヘッ드의評価を確認し、ホワイトヘッ드의可能性を求めてきた。しかし以上は主に理論面からの検討であって、やはり具体面、社会面の考察が必要なのではないかと思われる。そこでこの5章では今日の環境問題の中心概念である持続、共生、共同体（コミュニティ）を軸にホワイトヘッ드의哲学と環境問題を考えてみたい。さらに今後の望ましい環境社会のシナリオを提示してみたい。

より具体的には第2章で検討した環境思想の論点とホワイトヘッ드의思想との関係、およびホワイトヘッ드의思想によるそれらの理論の乗り越えの視点や、第3章でのホワイトヘッドのコスモロジー、第4章の環境に関わるホワイトヘッドの主要概念（現実的実質、抱握、合生）を基に、カブなどの現代のホワイトヘッドの研究者の取り組みなどを総合的に考察する。すなわち共生型持続社会構築へむけて、持続や共生の概念とホワイトヘッドとの関係、また具体的な共同体（コミュニティ）における農業実践、今後のありうべき環境社会などを考察する。ところで、ホワイトヘッドも具体的な有機体としての森林について以下のように述べている。有機体の視点からの論述であり、納得のいくものである。

ブラジルの森林を作っている樹木は、各種の有機体が相互に依存し合って成す結合に依存している。ただ一本の木だけでは、環境の変転によって偶然に生じるあらゆる不利な状態に支配される。例えば、風がその成長を阻み、気温の変化はその葉の繁りを妨げ、雨はその土壌を洗い流す。その葉は吹き散らされ、土地を肥やす用をなさない。一本一本の見事な木を見るのは、特別の環境にある場合か、人間が手を加えて育てた場合だけである。しかし自然においては、樹木が正常な繁茂を遂げるのは、それらが結合して森林を作っている場合だけである。それぞれの木はその一本一本としての生長においてはやや完全に達しないとしても、生存条件を保持するために互いに助け合っている。土壌が保存され、影を与えられる。こうして、これを肥やすために必要な微生物は焼け死ぬことも、凍え死ぬことも、洗い流されることもない。森林の成立は相互に依存しあう種のなす有機体形態の勝利である。なおまた、森林を死滅させるような類の微生物は、そこでは全然生きていけない¹

ここには、ホワイトヘッドの森林という一つの生態系に関する見解が示されており、有機形態の勝利が謳われているのである。今日の環境問題にも通用する、印象深い表現であると思われる。この考えは4節で再考する。ここでは1章における環境行政への具体的展開という意味も込めて、持続、共生、共生型持続社会、コミュニティにおける農業、未来の環境社会への提言などを行う。

1 節 持続とシステム

第 1 項 ホワイトヘッドのシステム理論

持続に関して伊藤重行によれば、ホワイトヘッドは直接的には持続性(sustainability)に触れていないが、デカルトの二元論に立つ「持続」(endurance)、「存続物」(enduring object)に対して心的極と物的極の一元化(4章2節3項参照)や心身統合論に立ち検討をし、さらに「生存」(survival)に言及し、持続性がホワイトヘッドの現実的実質の基本概念から導出されているという²。こうしたシステム理論からの持続の考察は重要である。さてホワイトヘッドはその「持続」や「延長」に関して既に次のように述べている。デカルトにとって、物体の原初的属性は延長である。有機体の哲学にとって、物的契機(メカニスム)の原初的關係性は、延長的結合である(4章4節参照)と。

さらにホワイトヘッドは、社会の持続や生存(残存) survival について次のようにいっている(第4章第5節参照)。「生きている社会のもう一つの特色は、それが食物を必要とすることである。(中略)こうして、すべての社会は、その環境との相互作用を必要とする。そして生きている社会の場合、この相互作用は強奪(rob)という形をとる。(中略)生命は強奪である。この点でこそ道徳が生命にとって焦眉のものとなる³」と。

ここでホワイトヘッドは、社会について、なかなか厳しい見方をしているが、一部ホワイトヘッドの持続性と現実的実質の關係、社会の持続や生存の考えを紹介した。勿論ホワイトヘッドの哲学には、単に生き延びるだけではなく、価値の創造が根底にあることはいうまでもない。

ところでホワイトヘッドはシステム理論の元祖といわれている。要するに既述のホワイトヘッドのプロセスと、システム理論とが対応しており、ホワイトヘッドのプロセス理論はシステム理論の基礎になっているということである。そこでシステムの視点から伊藤はホワイトヘッドが L. von Bertalanffy(以下ベルタランフィ)、E. Laszro(以下ラズロー)などのシステム理論に影響を与えたことをふまえて、有機体とシステムとを比較して次の4つにまとめている⁴。

1) 現実の相は、抱握的統一体である。つまり事物は空間的、時間的に切り離せない抱握的統一体であり、全体性をもっている。そして全体性があるとなれば、そこに秩序正しいあり方があり、空間内でのそれぞれは、独立していることなく、全体のなかに含まれて存在し、それらをその環境から抽出すれば、かならずそれらの本質そのものを破壊する。

2) ホワイトヘッドは自然を概観すると、諸々の有機体よりなる有機体というものがあるという。例えば電子と水素核が基礎的有機体であると仮定すると、そのとき原子や分子は高次の有機体であって、これもはっきりまとまった有機的統一を表すという。つまり、始原的有機体、基礎的有機体、上位の有機体というように有機体の存続パターンのなかから進化し多様な有機体が創発してくることを意味し、結果的に一大有機体の階層をつくることも言明しているの

ある。これはシステムの基本要件と対応する。

3) ホワイトヘッドは、有機体が環境との関係で、みずからがそれに適応していくことを容認している。システム論においても、あるシステムがそのシステムの環境となっている多数のほかのシステムの関係からある臨界内でみずからのシステムを改変することなく適応すること、すなわち機能的適応をすることによってみずからの安定をはかること(ファースト・サイバネティックス)を理論的に説明している。

4) ホワイトヘッドは、有機体はみずからの環境を創造することができるという。ただしこのためにはただ一個の有機体だけでは無力であり、協働する有機体の社会が必要になる。この指摘は大変重要である。環境の創造といっても、実際には自分ひとりではなく、多くの協力が必要となる。これはシステム論でも同様で、あるシステムが、そのシステムの環境になっているシステムの多くが何らかの力、エネルギーでも加わってきた場合、みずからの存続を実現するためには、ほかの協力可能なシステムと手を組むか、あるいはそうすることによってみずからの組み込んでいた適応基準を改変して、つまりみずからのシステムの構造を改変してみずからを存続させようとする場合がある。これはシステムの創造であり、あるシステムの構造的適応といわれている(セカンド・サイバネティックス)。以上の結論として伊藤重行は、ホワイトヘッドの有機体の理論は、現代科学、とくに最近のシステム科学の発展によっていっそう合理的なものとして、システム概念に内含されているという。つまり、現実的実質(出来事)は時間的に非可逆的に推移し、成長、発展、進化していくという意味ではファースト・サイバネティックスに、また環境の挑戦に呼応して自らを創造していくといった自己組織性に対応するものだという。要するにホワイトヘッドの有機体の哲学は、なんらシステム理論と矛盾しないということである。こうしたホワイトヘッドのシステム論は、以下にみるように、組織論、環境、農業、情報など多面的に応用可能である。

第2項 持続に関するカブ等の理論

また持続に関してカブは環境と調和する有機体の哲学の立場から、キューバにおける石油に頼らない(without benefit of oil)食料生産・農業のあり方や、小規模な有機農業を評価している⁵。また Barbara Muraca は、文化的・自然的・社会的世界が、本質的に相互連結しているという仮定にたって、ホワイトヘッドのプロセス哲学が持続のバックグラウンドをなすものと論じている⁶。要するにこれらの諸論文からもいえることは、人間の創造性を生かしながら、資源を枯渇させないで環境とのバランス(調和)をはかり、自然との関係を高めることが最も重要であるということである。さらに Muraca は、自然との連帯や、自然への敬意は、われわれの自由や創造性を限定するものではなく、自然と共通の世界に根付いていることが、自然の破壊なしに新しいパターンを創っていくことだと述べている。これは後述の Okamoto の農業観とも呼応するもので、今後の社会のシナリオの基礎となる。以上要するに、ホワイトヘッ

ドは既に持続に関して関連のある発言をしていたのである。

第 2 節 共生

第 1 項 共生の意味

共生の語義に関しては、もともとは生物学で異なった種の生物どうしの利益の供与や依存といった意味で使用されていたことや、この語の拡張された使用におけるムード化への懸念がある。Ophuels-Kashima Reinold は、政治・社会的な概念としての「共生」、「共生」の語場、装置としての競争と共生、ドイツにおける政治的概念としてのエコロジー、日本とドイツでの共生という用語使用の違いを論じている⁷。著者としては、こうした環境用語の語義に関しては、補論での、ターミノロジー（概念・用語学）の立場からも注目する。

共生に関しては例えば間瀬啓允は、コモングッド(共通善)とサステナビリティ(持続可能性)に関してのべている。コモングッドは普遍的な善である。それは、ホワイトヘッドもいうように「よりよく生きること」への促しである。コモングッドは個々人の善よりも優先されるという意味で、公益である。しかし公益の実現のためには社会全体に対する配慮が欠かせない。配慮の倫理を根底に据えてコモングッドを促進させたのは、ヨーロッパ精神史上では、ギリシャ起源のスキュワードシップであったという⁸。

つまり間瀬によれば、人は大地との運命的な連続性のゆえに、大地にやさしく配慮する「スキュワード」であり、ここに「共生」の積極的な意味があるという。さらに共生はエコロジカルな生き方の基本、モラルの基本である。この共生の視点からサステナビリティを追求するならば、未来世代に対する現世代の配慮が欠かせないという。これは現代倫理における「世代間倫理」の問題である。

第 2 項 共生とホワイトヘッドの連帯性

田中裕はホワイトヘッドの言う現実的実質の連帯性(solidarity)や共在性(togetherness)に関して、ホワイトヘッドの生命観・社会観のポイントを次のようにのべている。それは、「一つの現実的存在 a が生起するためには、その因果的過去にあるすべての現実的存在(現実的世界 W(a)) が関わりをもっており、有機体の哲学は、諸々の個物の特殊性と価値の多様性が、事物の連帯性にとって必要不可欠であることを意識している点において、全体主義(holism)ではない。またホワイトヘッドの哲学は生活世界における直接経験の構造から出発しており、有機体の哲学は、人間自身を含む自然の連帯性(solidarity)と共在性(togetherness)を自覚する。どの個体も孤立することなく他のすべての存在と共にある。自然界の様々な生命の形態は『共に生きている(symbiosis)』、さらに一般的に、個々の現実的実質は、他のすべての存在を含んで現成することによって、その個体としての独自の価値を実現する。そして人間中心主義からの転回⁹というものである。ここでのべられている重要な主張は、ホワイト

ヘッドの哲学における経験からの出発、個物の特殊性と価値の多様性の重視、そして全体主義ではなく、全ての現実的実質の連帯と共在の自覚、人間中心からの転向である。

この論文では、ホワイトヘッドの有機体の哲学の中心となる人間と自然の連帯と共在、共に生きていること、個体としての独自の価値の実現、生活世界から出発していることなどが力説されており、リアリティもあり著者としては賛意を表す。

3 節 共生型持続社会

1 節と 2 節で持続や共生に触れたので、ここでは共生型の持続社会に関して考察する。尾関は以下の視点と課題を挙げている。

1. 環境思想は脱近代の思想であり、そのために近代の人間観・自然観・社会観の批判を踏まえて、新たな人間観・自然観・社会観を、他の脱近代をめざす諸分野の研究や思想と連携して構築していく。

2. 日本の研究者として、その普遍的な探求とともに独自の立脚点とは何かを意識すること。

3. 「人間学と社会哲学の総合」(あるいは「社会理論を含んだ人間学」という視点から環境思想を構築する。具体的には生活世界(人間にかかわる自然も含む)と経済システムとの対立という社会的構造の問題性に注目する。

4. 上記の人間中心主義と自然中心主義の対立を超える、人間—自然関係にかかわる理念を、人間—人間関係の「共生」も含めて多面的に考察する。

5. 「共生型の持続可能社会」を、その基本視点と構造的な諸アスペクトを最近のコモンズ論や市民社会論の議論をも取り入れて解明する。

そして具体的なトピックスとして、ヘーゲルが<近代>を「分裂の時代」と呼んだように、デカルト哲学の帰結として以下の分裂とその問題点をあげる。

1. 人間と自然の分裂：人間と自然はその本質を全く異にする実体とされ、人間と自然の連続的な一体感が打ち破られた。

2. 心と身体の分裂：臓器移植や安楽死

3. 人間と人間の分裂：他者問題のアポリア

さらに尾関はこういった哲学的アポリアが、コミュニケーション論的視点からどのようにアプローチされるかにふれるとともに、環境思想の哲学的基礎として、最近のコモンズ論や市民社会論の議論をも取り入れて、持続可能な社会の構築のための実践的な議論につなげるようにしたという¹⁰。

そこで、こうした共生型持続社会の構想に、いかにホワイトヘッドの思想がかかわるかを、特にコミュニケーションの視点からいくつか述べることにしたい。

1) 共生のためにはコミュニケーションが眼目となる。すなわちホワイトヘッドの現実的実質の抱握とは、まさに異質な現実的実質のコミュニケーションと創造のことに他ならないものと思われる。

2) 尾関の「人間中心主義と自然中心主義の対立」から人間—自然共生の立

場へで、人間も自然もともに相互に主体となるという表現が重要と思われる。これはまさに本研究の第2章や第5章で強調したことである。ホワイトヘッドは、世界を現実的実質のレベルで、人間も自然も共に目的を持ち、価値を実現（創造）していく過程とみたからである。

4 節 コミュニティにおける共生持続型農業の実践

第1項 ホワイトヘッド、カブとコミュニティ

共同体についてはすでにレオポルドも触れているが、ホワイトヘッドは一つの「有機体」を形づくる現実的実質の「共同体(community)」について語っている。すなわち「画期的機因はこの現実的な共同体の一義的単位であり、またこの共同体は、それらの諸単位から合成されている。しかし、それぞれの単位はその本性において共同体の他のすべての成員に準拠しており、その結果として、それぞれの単位は完全な全体包括的宇宙を自己の中で表象している一小宇宙である¹¹」と。つまり大宇宙と小宇宙の重箱構造を意味している。

Wolf-Gazoによれば、この「共同体」は、自然の全体的な脈絡を構成するものであり、動的な性質をもった自己形成的な組織である。この「共同体」が自己形成的な性格をもつのは、ホワイトヘッドによると、自然のシステムが「開いている」からである。これを言い換えれば、自然のプロセス的な出来事は「時間の枠組み」を形づくっているということだ。「未来」は、出来事、共同体、環境の自己形成にとって、常に一つの「契機」である。時間は自然の中で産み出される。自然の「開放性」は、ホワイトヘッドにとって、有機体の発展の本質的な様態である。がここには、ホワイトヘッドの共同体の見方、すなわち単位としての小宇宙が合成されて大きな宇宙、すなわち共同体(community)を形成していること、その根底にはプロセスの視点、すなわちシステムとしての自然が常に開かれていることが述べられている¹²。

Wolf-Gazoはまた「自然の創造性」は、また、「一」（単一性）と「多」（数多性）をめぐる問題を解決する鍵でもあるという。様々な共同体、あるいは関係のネットワークは、「環境(environment)」としての単一性を具体化すると同時に、自然の多種・多様性を構成する。一方、自然の力学は、特定の構造とパターンに従って<規範化>を行う。言い換えれば、自然の力学は、構造的な合法性と結合の可能性によって自然を秩序づける。しかしながら多数の「共同体」が絶えず再構成され、変異することによって、新しいものが創造される可能性ももたらされるのである。

さらにカブラやプリゴジンの著作にも示されているように、ホワイトヘッドの自然概念は、今日、生態学的な視点からも重視されており、著者も賛同する。

ここでは具体的な共同体におけるホワイトヘッドの理論の応用例を紹介する。カブの共同体について、アラン・ゲイは「コミュニティのコミュニティ」に注目している。「種々の地域は、自らの独自の歴史や文化や制度を認める必要があり、それらをより良い未来を創造するための出発点と捉えると同時に、互いに

学びあう必要がある。明確にもとめられるものは、完全に統一されるのでも、また分断された社会へと完全に分割されるのでもない世界であるが、それは多層的なコミュニティを備えた、多くの個別的に自立的なコミュニティとしての世界、すなわち Herman Daly(以下ハーマン・デイリー)とカブがいう『コミュニティからなるコミュニティ communities of communities』である。(中略)他のあらゆるコミュニティによる自由の追求を増幅させる仕方で、コミュニティの全てのレベルにおいて、みずからの運命をコントロールする自由を求めて奮闘することを意味するだろう。現在の世界において、この自由への努力の最も重要な側面は、グローバルな市場に対する奴隷状態を克服することであり、それはコミュニティからなるコミュニティという世界秩序に対して、そこから現れてきた市場と多国籍企業たちを従属させることによって克服するのである。そして、それぞれコミュニティが、他のあらゆるコミュニティの自由の追求を支援し増幅させる仕方で、自由を求めて奮闘するのである¹³」と。筆者としては、こうした見解に賛同する。

第2項 ホワイトヘッド、カブと農業

ホワイトヘッドは具体的に農業と文明について次のように述べている。

「しかし、人類学者たちは、年ごとの季節の移り変わり、特に「春」「収穫期」「冬至」に関連する部族的儀式が、ほとんど普遍的に行きわたっている事を報告している。疑いもなく、今振り返ってみるとき、このような儀式には農業との関連がある。ところで、農業は、近代文明への決定的な第一歩を記している。農業の導入は、出来事の経過に対して、高度な反省の段階に到達したことを記している。農業では、何ヶ月も先の自然の経過を予測することが必要である。(中略) おそらくそこには多くに原因が共に起こっただろう。しかし、このような原因のうちで、進歩を効果的に速めるものとして、農業の導入に高い地位が与えられなければならない¹⁴」。

こうした記述は意外と知られていないが、ホワイトヘッドの農業と近代文明との考え方をよく示している。予測に関しては、後述する Okamoto も農業における予見(foresight)について触れている。

また前にも紹介したが、持続に関してカブは環境と調和する有機体の哲学の立場から、キューバにおける石油に頼らない(without benefit of oil)食料生産・農業のあり方や、小規模な有機農業を評価している。さらにカブは漁業に関して、乱獲と汚染が世界の漁業の脅威であり、魚の一種類だけではなく、生態学的なアプローチが必要であるという¹⁵。カブによれば生物多様性の保持は大きな重要性をもつものであり、森林の消失、新鮮な水不足、伝染病の脅威、希少資源をめぐる戦争などについて言及し、特に石油をめぐる資源がとぼし

いことや、太陽エネルギーなど様々な側面を論じている。

第3項 Okamotoによるコミュニティでの農業実践

Okamotoの思想、提案はホワイトヘッドの哲学からの環境問題に対する一つの具体的な見解である¹⁶。Okamotoはアメリカにおける農業コミュニティ(野菜・果樹栽培)における30年間の家族農業の体験をふまえて、ホワイトヘッドの哲学に拠り、日本型の望ましい農業コミュニティのあり方について以下のように論じている。①基本的に、持続的な農業コミュニティは自然環境と調和しなければならない。人びとが単に自分だけの安寧にのみ関心をもつと必ずその持続を確かにするものへの見解が狭くなるであろう。②Cobbのアーシズム、(earthism、それはコミュニティにおいて人々が互いに持続のために必要なものを適正に供給しあうという思想であるが)とは単に持続的なコミュニティのみではなく、より広いエコ・コミュニティのくらしにコミットするものである。③特に日本においては基本的に家族農業であるが、アメリカ型の大規模で独立した農家では相互協力を創造(create)しない。④手作業(hand labor)は環境にとって優しい。⑤農業のプロセスはホワイトヘッドが『観念の冒険』という著書でのべているように生まれつきもっている素質(instinct)、知識(intelligence)、知恵(wisdom)を元に進むが、Okamotoによれば例えば不況など突発的なリスクに対する予見(foresight)そのための知恵が重要である。⑥しかし農家はマーケティングの専門家ではないので、国家的なネットワークをもつ地域の農業共同組織を使うことも実際的な解決であるし、農家や農業共同組織にとってホワイトヘッドがいうところの「ビジネスマインド」が必要である。⑦結論としてホワイトヘッドの哲学は根底的には人間やコミュニティの基礎をなすものであり、世界は全能の神の愛によって過程が持続され繁栄する。Okamotoは以上のような自分の考えは、(農業は非能率的であるので、農産物加工、貯蔵、流通販売などを含めた産業としての農業(アグリビジネス)に完全にとってかわられるべきだといった)、現代の支配的な成長志向の考えとは対極のものと位置づけている。

若干補足するとOkamotoは日米の農業の違いについてさらにこういつている。①日米の農場の規模、スケールの違いがある、②アメリカでは多くの雇い人がいる、③多くの農民は個人で計画、生産、マーケティングする④財政面では会計士を雇ったり、コンピュータのソフトを用いる、⑤機械化が進んでおり、⑥トラクターを所有したりレンタルする、⑦市場価格の動向を熟知しており、⑧大量の生産物を売るときにはmarketing shedsとよばれるマーケット・ビジネスに委ねる。そしてカブのearthismは、common goods(共通善)の持続であるという。

こうしたOkamotoの論文は、明確に農業とホワイトヘッドの関連を扱っており貴重なものであり、筆者としてはOkamotoの考察や実践に賛成する。また小規模なコミュニティにおける農業とアメリカのような大規模な農業との違いも明確に認識され、農協やマーケティングなど、いわゆるビジネス・マイ

ンド（これはホワイトヘッドも言っていた）にもふれており、現実的な側面も十分に考慮したリアリティをもった論考である。

5 節 ホワイトヘッドと未来の環境に配慮した社会

第 1 項 はじめに

ここではホワイトヘッドの思想が環境の実際問題でどのように応用できるか、具体的施策にどう生かされるかを考えてみたい。すなわちホワイトヘッドの思想がどこまで普遍的でありうるか、柔軟性をもつのかを検討したい。これは本論第 1 章での環境問題へのホワイトヘッドからの、一つの回答といってもよい。

実はわが国でも地球温暖化等の環境問題に関して、いくつかの省庁や企業、団体、個人などで未来の環境社会のシナリオが作られている。そこでホワイトヘッドからの提言ができないか、シナリオとして未来の環境社会の構築ができないか、現行のシナリオを参考に考えてみたい。

第 2 項 環境問題の取り組みとホワイトヘッド

1) 環境問題の論点の推移

本論 1 章でものべたが、環境問題の核心が環境破壊から住民の心や QOL(生活の質)へと移っている。『環境白書』の 1 章では、人口の推移や貧困・格差の状況、人口増加や経済活動の増大による資源消費、環境負荷の増大がみられ、これまでのような大量生産、大量消費、大量廃棄は問題とされ、またこれまで環境の保全がはかられてこなかったことや、一方で生活の質は必ずしも経済ばかりではないこと、心の豊かさが求められているという。

しかし同書は一方で「グリーン成長」では、環境を軸とした経済発展が期待されるとまとめている。これにより革新的な環境・エネルギー技術、社会システムの転換 産業・社会活動の効率化、新産業の創造や国民生活の向上などが期待できるという。

さて地球温暖化の現象はおそらくホワイトヘッドの時代には明確には無かったと思われるが、環境破壊に関してはすでに本論 1 章 3 節で、環境問題に関して、ホワイトヘッドがテムズ川の景観の毀損についてのべているのを見てきた。テムズ河の景観の毀損についてのべている。そこでは環境の内在的な価値、環境と人間との関係を見失う「悪」を指摘している。

2) さまざまな施策・方向とホワイトヘッド

現実には各省庁、企業、団体、個人などによって環境政策の推進がなされている。とくに地球温暖化と生物多様性は車の両輪であるとされる。

(1)地球温暖化

『環境白書』2 章では、温室効果ガスの排出が削減された持続可能な経済社会、新しい日本を展望している。すなわち 2009 年京都議定書以後の仕組みに関する政治的な合意である「コペンハーゲン合意」への留意、鳩山構想の温室

効果ガス二酸化炭素 25%削減からきているチャレンジ 2.5 が提示され、オフィスや家庭などにおける CO2 排出の少ない生活スタイル、地球温暖化対策基本法の制定と対策の推進やその中長期ロードマップなどが示されている。また今後の環境社会のシナリオとしての a) 個人の日々の暮らし中心、例えばゼロエミ(無公害)住宅、b) 地域づくり中心、例えば歩いて暮らせる地域づくりとの 2 つのシナリオがあるが、個人と地域の調和が重要な視点である。ここでゼロエミッションとホワイトヘッドのいう「満足」とに注意したい。(「満足」に関しては、4 章 3 節 2 項を参照。)つまり全ての現実的実質は究極のところ「満足」(例えば生態学的な調和)をもとめて創造のプロセスを繰り返すわけだが、その過程が、ゼロエミッション(無公害)の社会を追い求める過程と似たところがある。

(2) 生物多様性

『環境白書』3 章では、2010 年名古屋での COP10 (生物多様性条約第 10 回締約国会議) について解説している。生物多様性の損失の背景は、自然地域の農耕地への転換、継続的なインフラ施設の拡大、気候変動の影響などによるもので、安定した気候、清らかな水や大気、多様な生態系や自然環境が重要となる。

自然環境が持続するためには共生が必要で、これまでも生物多様性と私たちの暮らしに関して、ホワイトヘッドの共生・連帯の思想は矛盾しないものと考えている。一方現実には森林消失と砂漠化、魚の乱獲も危惧されているが、森林に関しては、ホワイトヘッドの生態学、森林における共生やまた自然への畏敬の念、レジャー、生態系の恩恵を人間が享受するといった人類共通の財産という思想がある。ここにはホワイトヘッド独自の、モノも心を持つといった生命観がある。

一方で『環境白書』では生態系サービスとは、人々が生態系から得ることの出来る便益のことで、食糧、水、木材、繊維、燃料などの「供給サービス」、気候の安定や水質の浄化などの「調整サービス」、レクリエーションや精神的な恩恵を与える「文化的サービス」、栄養塩の循環や土壌形成、光合成などの「基盤サービス」などがあり、生態系サービスを維持する取り組みを進めている。この文化的サービスには先述のホワイトヘッドの指摘した環境破壊、景観の保全などが関わっている。

(3) 里山の保全・管理

里山とは奥山自然地域と都市地域の間位置し、様々な人間のはたらきかけを通じて環境が形成されてきた地域であり、集落を取り巻く二次林とため池、草原などで構成される。生物多様性の観点から、奥山と都市とを繋ぐことが重要である。例えば霞ヶ浦では、NPO、住民、研究者、関連省庁が参画して環境問題に取り組んでいる。しかし現状では、担い手不足を通じた環境保全上の問題や、高齢に伴う限界集落などが示されており、林業生産活動の低下などにより放置されているといわれる。しかし里地・里山は癒しの空間として鉱物、植物、動物、人間などの共生する場であり、世界へ広げる自然共生の知恵とこころが大事である。

ホワイトヘッドの思想では鉱物、植物、動物、人間すべてが連帯するという思想であり、里山のあり方に示唆するところ多大なものがある。

(4)政府による現在の主な取り組み

経済産業省のエコ・タウンの構想は、ゼロ・エミッションとリサイクルの考え方が注目され、廃棄物をゼロにするという。これは前述のように、ホワイトヘッドの「満足」や生態系の調和の思想とも関連するのではないか。また先進的な環境調和型の街づくりの推進は、ホワイトヘッドのいう大宇宙と小宇宙の調和の思想と符号する。一方農林水産省のバイオマス・タウンの構想はバイオマス・ニッポンという理念の下、バイオマスを最大限に活用するというもので、対象は生ゴミ、稲わら、余剰農産物、木質バイオマス、微細藻類など範囲は広い。バイオマスに関しては様々な考え方があるが、アジア諸国との連携の下、バイオマスの発生から利用までが効率的なプロセスで結ばれた総合的利用システムが構築され、安定的かつ適正なバイオマス利用が期待されている。例えばコペンハーゲンなどでは、有効利用が現実化されているという。これもホワイトヘッドの言うプロセスが示唆するところがある。

第3項 展望

未来の環境社会を考えるにあたって、その核心が人々の心や生活の質へと変化していることもあり、今後はホワイトヘッドと人間に関する問題、特に人間のもつ感情、心などの側面の研究が大きなテーマとなりうるものと思われる。また政策面ではいくつか萌芽的な研究もみられる情報や人工物環境との関連の研究、社会的合意の研究¹⁷などが必要となるであろう。

【小括】

5章では、1章の環境問題の諸相や、第3章で抽出した環境倫理の主要論点やこれに対するホワイトヘッドの諸概念や、現代のホワイトヘッディアン¹⁸の思想などを元に、実際の主要な環境問題への応用を考えてみた。この結果、ホワイトヘッドの持続、システム概念が有効なこと、共生ではホワイトヘッド、カブの考えと、尾関の共生型持続社会とは矛盾するものではなく、コミュニケーションにおける共生との関連も示された。共同体における実践では、カブのコミュニテイに関する思想の紹介と、Okamotoによるコミュニテイでの農業実践を紹介し、いかにコミュニテイにおいてホワイトヘッドの哲学が応用されているかを紹介した。さらにホワイトヘッドの思想や概念をもとに、未来の環境社会のシナリオを提示した。そこでは全てが全てと主体—主体の関係で連帯し、互いの価値を認め、新たに価値を創造していく社会である。

【5章の注】

- 1 ホワイトヘッド、A. N., *Science and the Modern world*, pp296-297 (ホワイトヘッド、『科学と近代世界』、藤川吉美訳、松籟社、1992, p.275,)
- 2 伊藤重行、趙達峰、ホワイトヘッドと持続性、日本ホワイトヘッド・プロ

- セス学会 30 周年記念全国大会報告要旨集,2008,pp95-102
- 3 Whitehead,A.N.,*Process and Reality*,Free Press,p.105 (ホワイトヘッド、
『過程と実在』、山本誠作訳、松籟社,1979,pp180-18
- 4 伊藤重行、『システム哲学序説』、勁草書房,1996,pp41-57
- 5 Cobb,J.B.Jr., "Sustaining theCommon Good",Cleveland,Ohio,Pilgrim Press,1994
- 6 Muraca,Barbara, *Welt,Umwelt,Mitwelt,: Cultural,Natural,and Social World as
Complex Iinterwined Fieldof Internal Relations:the Contribution of Process Thought to
a General Theory of Sustainability*,*Process studies*,34(1),2005,97-116
- 7 Ophuls - Kashima,Reinold,『環境思想・教育研究』,3,2009,pp109-120
- 8 間瀬啓允、生命中心の自然理解と倫理, IN:『環境倫理の課題』、行路社、
1993
- 9 田中裕、『ホワイトヘッド—有機体の哲学—』、講談社,1998,
- 10 尾関周二、『環境思想と人間学の革新』、青木書店、2007
- 11 Whitehead,A.N., *Religion in the Making*,Macmillan,1926,p79 (ホワイト
トヘッド、斎藤繁雄訳、『宗教とその形成』,松籟社、p.52)
- 12 Wolf-Gazo,E., *Whitehead and Lock's Concept of "Power"*,*Process
Studies*,237-252,14(4),1985
- 13 Gare,Arran、*The arts and the radical enlightenment:Gaining Liberty to Save
the Planet*, *Environmental Thoughts*,2,2008,69-78
- 14 Whitehead,A.N., *Adventures of Ideas*,Macmillan,1933,p.114 (ホワイト
ヘッド、山本誠作・菱木政晴共訳、『観念の冒険』、松籟社、p.148)
- 15 Cobb,John B., *Ensuring sustainability,Justice in a Gloval
Economy:Strategies for Home,Community, and World*,2006,140-149
- 16 Okamoto Dennnis U., *Towards Attaining a sustainableCommunity*,
日本ホワイトヘッド・プロセス学会 30 周年記念全国大会報告要旨集,2008
- 17 藤川吉美、『合意形成論』、成文堂、2008

補論 ホワイトヘッドのターミノロジー

第1節 用語について

これまでも本論において、ターミノロジー（用語）にはしばしば触れてきた。例えば4章2節2項の「現実的実質」の用語からみた説明や、5章2節1項の「共生」をめぐる用語のドイツでの政治的な論議、政治・社会的な概念としての「共生」、「共生」の語場、競争と共生、ドイツにおける政治的概念としてのエコロジーなどを紹介してきた¹。

人文系、特に哲学・思想系における用語の重要性は言うまでもなく、正確な解釈のために著書に用語集を付す場合も少なくない。用語とは概念(定義)と表記からなり、コンパクトに概念を捉えることができ、他の概念との関係が一目でわかり便利なものである。

例えば用語に関する論文として、環境関連では数十人の第一線の生態学者へのアンケートからなる「生物多様性」²、安全学をめざした「安全」³、「環境行政」上の問題となる用語⁴、共生の語場や日独の用法の違いを論じた前述のOphuls 鹿島ライノルトの「共生」、また拙稿の環境思想や用語を分類・検討した研究⁵⁻⁶などがある。

また既存の用語集のほか環境など比較的新しい分野、学際分野でも用語集が作られている。環境思想では分類や用語の相互関係など、さまざまな工夫をこらしたキーワード集が作成されている⁷。

ところでホワイトヘッドの文章は難解だといわれるが、その大きな原因が用語、しかもホワイトヘッド独自の用語にあるともいわれている。後述するがターミノロジー学的にいうと、とくにこれまでにない新造語が問題となる。しかし4節で若干考察するが、ホワイトヘッドは恣意的に用語を作ったのではなく、どうしても作らざるを得ない必然性があったのである。

本補論では、代表的な三つの用語、「現実的実質」、「抱握」、「合生」をとりあげ、用例を示しながら、表記、概念内容、概念と表記の変遷、解釈の注意点などを検討し用語について考察を深める。

第2節 用語の科学（ターミノロジー学）

用語を考える際に、概念内容、表記などが重要である。用語を学問・科学(ターミノロジー学、概念・用語学)にしたのはオーストリア人のヴユスター(Eugen Wuester、1898-1977)である⁸。ターミノロジー学的には用語の研究は、基本的には概念分析が先、表記の検討はその後の作業となる。

概念では一般に存在論的に全体と部分、部分と部分関係が中心で、これが表記になると多義性、類義語、合成語、外来語、転用語、廃語(死語)などが問題となり、多義語、類義語などは全て概念が存在論的に同一、あるいはその複合であるが、表記や見方の異なるパターンの例である。

それと単位としての用語が重要な視点となる。基本的に一概念一用語が望ましいが、単位としての用語が確立すると、用語の科学的、コンピュータ処理が可能になり、冊子体の辞書やコンピュータ辞書が用語を基本に作成可能となる。

人文、哲学関係は辞書、あるいは用語そのものが研究の目的となるが、しかし哲学・思想系の用語では、理工系のように対象としての具体的な物や実体が少ない。そこで物の全体一部分関係も重要であるが、むしろ思想の中味としての研究者・学派間の対立や差異などが重要となる。このため文例や文脈の取り扱いに注意が必要である。ターミノロジーの世界ではこうした研究は少ないが、例えば radicalism, realism など科学哲学の ism に注目した、Ahmad、K などの研究が近いものである⁹。

以下では本研究中で、3つの重要で分かりにくい用語（「現実的実質」「抱悪」「合生」）を対象に、表記、概念、背景、変化などをのべる。

第3節 事例

第1項 現実的実質(actual entity)

1) 表記や意味

現実的実質は世界の構成要素であり、ホワイトヘッドの哲学では大変重要な概念である。この用語は形態・種類からみると造語で、合成語である。表記は「現実的実質」のほか、「現実的存在」「活動的存在」などいくつかある。活動的存在がよく意を伝えていると思うが、本研究では「現実的実質」に統一した。内容的にみると、「現実的実質」(actual entity)は「活動的生起」(actual occasion)ともいわれる世界を構成する究極的な実在物であり、活動的生起は類義語である

2) 経年的背景

この語の背景にはデモクリトスの原子、デカルトの思惟や、ロックの力、ライプニッツのモナド、さらには当時の最先端の科学であった量子力学などが考えられる。またなぜこの用語が使われるのかということそれは、現実的実質によってさまざまなことが統一的にうまく説明できるからである。

用語の思想形成の経緯としては、ホワイトヘッドの視点である、モノからコトへといった出来事(event)の視点がある。このためコト→出来事→活動的生起→現実的実質といったコトバの変遷がある。すなわち「現実的実質」(actual entity)という言い方は『過程と実在』で多用されるが、中期では、「出来事」(event)といういい方がされていた。中期から後期にいたる過渡的作品である『科学と近代世界』においては、その「出来事」という概念が、或る出来事と他の出来事とのかかわりを表す「抱握」(prehension)と呼ばれるようになり、それが、つぎに「活動的生起(actual occasion)という言い方になる。そして『過程と実在』では、最終的に「現実的実質」(actual entity)という概念に彫琢された。ここにホワイトヘッドの概念と用語の変化の対応がみてとれる。

3) 注目点

ここで注目点としては現実的実質は、客体(entity)であると同時に主体(actual)であるという二重の性格をもつことである。こうした例としては、ほかに「過程と実在」などがある。活動態(actuality)という語も(actualitiesのように)名詞化されて使用されるが、それは、個々の活動的存在だけでなく、

それらの結合体（日常的な経験におけるマクロ・コスモス）をも含む広い意味で使われている。そこで現実的実質は、そうした二面を同時に思い浮かべる必要がある。また有機体の哲学においては、物質的なものと精神的なものとの区別がなされる以前の一つの統一性をもった「活動的」な根源的なものから世界が発生してくるのである。

「現実的実質」(actual entity)は、世界を構成する究極の实在的事物だ。なにかもっと实在的なものを見出そうとして、「現実的実質」(actual entity)の背後をさがしてもなにもない。こういった「現実的実質」(actual entity)という表現は、これ以上遡及できない究極の志向対象である。ある意味現象学で言うノエマ(意味対象)と同じようなものとも考えられる。

意識は、活動的存在の主体としての働きのもつ多様な形式の一つであるが、ホワイトヘッドでは意識よりも存在が先行するといったリアリティがある。また有機体の哲学においては、物質的なものと精神的なものとの区別がなされる以前の一つの統一性を持った経験の滴りが「現実的実質」である。

第2項 抱握(prehension)

1)定義、表記

次項の「合生」とともに、「抱握」はホワイトヘッドのプロセス（過程）の中でも最も重要な概念である。次に用語の種類・形態から見ると転用語である。表記からみると「抱握」が一般的に使われているが、日本語には無い表現である。ちなみに prehension はホワイトヘッドが comprehension の頭の com を切り取って作ったもので、OED (Oxford English Dictionary) の 13 の意味のうち、7 つはホワイトヘッドに関連しているといわれている。ホワイトヘッドはライプニツの用語法（モノイド）を意識したが止めたといわれている。また「抱」は、一つの活動的存在が、その中に全世界を含むという意味である。

2)用語の背景としてはベクトル、量子力学などが関係し、意味としては、他者からの受容と、自己を他者にあたえるという二面性がある。進化する宇宙を創っていく OR (論理和) の世界にあって、「抱握」は、可能性の世界でもある。積極的な抱握が「感じ」(フィーリング) である。

ホワイトヘッドは、現実的実質のその最も具体的な要素への最初の分析は、それがその生成過程において生起してきた諸「抱握」の「合生」であることをあらわにし、そのすべての分析は諸「抱握」の分析であるという。またホワイトヘッドは、「抱握」(prehension) という語を用いて、直接的自己享受の各々の個的行為を、経験の契機 (occasion of experience) と称している。また存在の統一体、すなわち経験の契機こそが、総体的統一体においてはどこまでも創造的前進に向かって突き進んでいく進化する宇宙を構成する、真に实在的なものなのだという立場をとっているという。

3)注目点

ホワイトヘッドもいうように、「抱握」は原子的ではないということに注意すべきである。それらは他の諸「抱握」に区分することができ、そして結合されて他の「抱握」になったりすることができる。またそれらは相互に独立ではな

い。それらの主体的形式間の関係は、それらの形成を導く一つの主体的指向によって、構成されている。主体的諸形式のこうした相関が、抱握の「交互的感受性」と呼ばれる。つまり「抱握」には物的と心的、「肯定的抱握」と「否定的抱握」、「純粋な抱握」と「混成的な抱握」など多くの種類と変化があり、統合、除去そして主体的諸形式の決定につれて、「抱握」の成長がある。

第3項 合生(concrescence)

1) 定義、表記

「合成」(concrescence)は抱握とともに、実際のプロセスにおける決定過程であり重要である。ここには現実をよく見据えたホワイトヘッドのリアリティが良く現れている。

まず表記からいうと、「合生」のほか、「現成」「具現」「俱現」「具体化」など多くの種類がある。語源的にはラテン語の *concrescere* (相集まって生成する) に由来する転用語であり造語である。

2) 注目点

現実には一つの過去しかないが、ホワイトヘッドはその過程を二つの違った文脈で、二つの違った視点から議論している。一つは個別的な現存の構造に内在する流動性である。この種のことを、「合生」(concrescence)と呼ぶ。別の種類は、個別的な現存が完結して過程が消滅し、その現存を、過程の反復が引き出す別の個別的な実在の構造における初めの要素とする流動性である。この種のことを「推移」(transition)と呼ぶ。合成と推移は類義関係である。

「合成」は目的因へと向かう。そしてその目的因とは主体的志向である。これに対して推移は作用因の媒体である。そしてその作用因は不滅な(すなわち客体的に不滅な)過去である。つまり一つの活動的存在の内的な生成の過程をあらわす、複数の活動的存在の間の「推移」から区別されている。合生は目的因で主体的志向を意味し、推移は作用因の媒体で作用因は過去を示す。

「合生」は AND (論理積) の世界で、「多」から「一」への決定(decision)の経過をふむ。複雑な相原初相、補完相、統合相などからなる。合生の考えは「多」から「一」への決定であり、複雑な政策決定や合意形成に応用できる。

第4節 おわりに

本研究ではとりあえず3つの用語を検討し、その概念と表記を検討した。こうした造語はホワイトヘッドにとって必然であり、日本語には対応することばがない用語である。また先述のように現実的実質や抱握などは、二面性を持つので読みわけの必要がある。また今回はホワイトヘッドの宗教やプロセス神学の面、政治や経済など現実面の関係する用語には触れなかったが、この側面から見るとまた違った見方も出来る。

今後の研究としては、1) ホワイトヘッドと言語の関係がある。ホワイトヘッドは哲学は言語の限界を乗り越えることだといったが、ホワイトヘッドの哲学の深い理解のためには体系性という意味からも、やはり用語の理解は必要である。数学者であり論学に造詣の深いホワイトヘッドがいかなる言語観を持っ

ていたかの考察が必要であろう。またそれによってホワイトヘッドの社会理論への展望も開ける。

【補論 小括】

補論ではターミノロジー学の観点から、主要な用語である現実的実質、抱握、合生につき検討した。この結果、現実的実質は、世界を構成する究極的な要素であり大変重要な概念であり、現実的実質は日本語にはなく、ホワイトヘッドの造語であり、合成語である。表記としてはこのほか現実的存在、活動的存在などいくつかある。経年的にはコト→出来事→活動的生起→現実的実質という変化を経ている。哲学的背景としてデモクリトスの原子、ライプニッツのモノドロロジー、量子力学の影響があり、意味的には客体であると同時に主体でもあり、主客未分の現実的実質（実際は経験の滴り）から世界が創造的に構成されるとホワイトヘッドはいつており、ここに現象学との近さをみることができる。

世界が主客未分の現実的実質から構成されるが、その構成の過程（プロセス）において抱握と合生は大変重要である。抱握も合生も日本語には無くホワイトヘッドの造語であり、抱握は現実的実質同士が互いにモノダの「窓」を通して働きかけ、あるいは受容されるといった様態であり、合生は抱握で可能な選択から一つを選ぶ（決定）するものである。また抱握（現実的実質同士の論理和）も合生（現実的実質同士の論理積）も相互に依存し成長しあう、実際は複雑な過程であり弁証法あるいはコントラストが基底をなしている。

【補論 注】

- 1 オピュヒュルス鹿島ライノルト、社会、エコロジー、共生（1）、環境思想・教育研究,3,,2009,pp109-120
- 2 Takacs,D., 狩野秀之等訳。『生物多様性という名の革命』、日経 BP,2006
- 3 辛島恵美子、『安全学索隠』、八千代出版、1986
- 4 岩佐茂編著、『環境問題と環境思想』、創風社、2008
- 5 岡谷大、環境思想用語の情報文化学的論考、情報文化学会誌、13(1),2006,pp42-46
- 6 岡谷大、オントロジー・ターミノロジーとレーダーチャートによる情報文化空間表現に関する研究、情報文化学会誌,2007,pp40-49
- 7 尾関周二・亀山純生・武田一博編、『環境思想キーワード』、青木書店、2005
- 8 岡谷大・尾関周二、『ターミノロジー学の理論と応用』、東大出版会、2003
- 9 Ahmad,K.,Neologism to Describe the Neologisms:Philosophers of science and Technological Innovation,Proceedings of TKE,TermNet,1999,pp54-74,1999

【2編のまとめ】

第2編では、脱近代の視点からホワイトヘッドの思想の形成過程を追い、主要な概念をあきらかにし、それをもって共生型持続社会への応用を考察した。また補論において、ターミノロジー（概念・用語学）の視点から、主要なホワイトヘッドの用語を考察し全体的に理解を深めた。

3章では、ホワイトヘッドおよびホワイトヘッド研究者の思想的な独自性を検討した。まずこれまでの様々な世界観（コスモロジー）を説明し、その中の有機体の思想を位置づけた。ホワイトヘッドの著書の紹介や、特に主著『過程と実在』の構造や関連する諸哲学を図解した。次にホワイトヘッドの脱近代の思想の形成過程をのべた。また「現実的実質」、「抱握」、「合生」などのホワイトヘッドに特有な概念の変化や用語の変化を指摘した。次に、思想の根底にある「モノからコト（出来事）へ」という考えがホワイトヘッドの哲学に大きな影響を及ぼしていることを指摘した。また量子力学や進化論との関連を明らかにした。問題点として擬人化、実体と概念、言語などをとりあげた。そしてホワイトヘッドの思想には、体系性、総合性、リアリティがあることを確認した。

特に方法論としてホワイトヘッドにみられる弁証法に注目した。また現実的実質と現象学（メルロ＝ポンテイ）、プロセスの哲学とヘーゲルとの関係、およびそれらの関係、さらにホワイトヘッドの労働観を紹介した。

4章では、ホワイトヘッドの哲学と環境問題への主要な関わりを説明した。まず、ホワイトヘッドのコスモロジー（世界観）が必然であることを指摘した。それは人間も自然も全てが全てと関係しあう、全てが生きているという希望の世界観である。次に、世界の構成実体である「現実的実質」の存在が抽象的ではあるが、必然であることを指摘した。またこの現実的実質のなりたちやモノドロロジー、生命、経験、時空論などとの関係を明らかにした。さらにホワイトヘッドのいう現実的実質同士の関連の流れ（プロセス）が必然であることを指摘した。プロセスを形成している「抱握」（現実的実質同士の主体化、客体化の関連態様）や、その現実的実質の関連態様の「多」から「一」への収束の過程である「合生」などの概念をあきらかにした。そのプロセスがコミュニケーション過程の具体相（原初相、補完相、統合相）を示していると指摘した。そして秩序と社会の連関を指摘した。さらにホワイトヘッドにおける目的と文明、ホワイトヘッドの評価とカブなどの後継者の思想を紹介した。以上を通して、ホワイトヘッドにおける目的論的性格を指摘した。

5章では、1章の環境問題の諸相での問題点、第3章で抽出した環境倫理の主要論点やこれに対するホワイトヘッドの諸概念や、現代のホワイトヘッド研究者の思想などを元に、現実の主要な環境問題への応用を考えてみた。この結果、ホワイトヘッドの持続、システムの概念が有効なこと、共生ではホワイトヘッド、カブの考えと、尾関の共生型持続社会とは矛盾するものではなく、コミュニケーションにおける共生との関連も示された。共同体における実践では、カブのコミュニティに関する思想の紹介と、Okamotoによるコミュニティでの農業実践を紹介し、いかにコミュニティにおいてホワイトヘッドの哲学が応用されているかを紹介した。さらにホワイトヘッドの思想や概念をもとに、未来

の環境に配慮した社会への展望を示した。そこでは全てが全てと主体—主体の関係で連帯し、互いの価値を認め、新たに価値を創造していく社会である。

また補論としてホワイトヘッドの主要なターミノロジー（現実的実質、抱握、合成）について概念、表記、解釈などの点から検討し、さらにホワイトヘッドの言語論を展望した。

総括と展望

ここでは全体を俯瞰しつつ論点を確認し、本文で言い尽くせなかったことをのべ議論を深める。

(1) 問題意識と論文構成

本研究の背景となっている問題意識は、まず①ホワイトヘッドの視点、方法である。ホワイトヘッドは近代以降の自然の機械論的理解に対し、脱近代の思想や、相対性理論や量子力学等の理解を通じて、抜本的に新しい自然観や、それに基づく環境理論を提出した哲学者であり、その点を深く理解したいと思った。そして②今日の環境問題を考えるうえでいろいろな示唆を与えており、ホワイトヘッドの哲学を研究する価値があると思ったことなどである。

研究課題として、①ホワイトヘッドの新しい自然観や、それに基づく環境理論を明らかにしそれを環境思想の流れのなかに位置づける。そして②ホワイトヘッドの哲学の環境問題への意義や示唆を明らかにすることである。

論文の構成は2部構成であり、はじめには本論全体の見取り図である。第1部は1章と2章とからなり、環境問題の概要、つまり環境の技術・行政と環境倫理からとらえる。第1章は、環境破壊から心の問題までの環境問題の変化と、現実の環境の技術や行政の限界を、第2章では環境倫理における論点とホワイトヘッドのかかわりを議論する。第2部は3章、4章、5章、補論からなり、有機体とプロセスの哲学による人間と自然の解明、ホワイトヘッドの主要な概念、方法とそれらをもとにした共生型持続社会への応用、具体的な農業コミュニティにおける実践や、政府の環境政策とのかかわりなどをのべる。まず第3章ホワイトヘッドによる環境思想の形成と特色では、環境に関わる範囲でのホワイトヘッドの思想の形成、第4章ホワイトヘッドの環境思想ではさらに環境に絞って主要な概念、例えば現実的実質(actual entity)や過程(process、プロセス)を論じる。第5章共生型持続社会へむけてではホワイトヘッドやカブの持続やコミュニティ、共生型持続社会、農業実践とのかかわり、未来の環境に配慮した社会との関係、さらには環境にかかわる国際的な諸問題などを論ずる。補論では現実的実質、プロセスなどの主要なホワイトヘッドのターミノロジー(用語)を論じ、言語とのかかわりを展望する。

(2) 第一部(1章、2章)のポイント

以下主要な点をのべる。

第1章では、現実面、つまり国連などの国際レベルや、5章でものべるエコタウンなど各省庁など国内レベルでの環境政策・社会経済的な取り組み、さらには個人レベルでの環境へのかかわりなどの検討を通して、環境問題の原因や技術的、行政的解決の限界を指摘した。

たしかに今日環境の技術的な進歩もみられるものの、情報収集、情報の伝達・理解などが不十分でなかなか改まらないこともあり、さらに環境問題の因果関

係の不確実性や環境保全にたいする意識と行動のギャップなどのおそれがあることは否めない。また環境問題の中心が環境破壊から人間自身への内面化・内省化さらに心の問題へと推移していることを確認した。大事な点は環境問題が初期の環境破壊から QOL や心の世界へ向かい深化、複合化し、そこで哲学が必要とされてくることである。つまり環境の破壊は人間の破壊につながるのである。

ところでホワイトヘッドもテムズ川の景観破壊によせて、環境の固有な価値、内在的価値を無視する悪について語っている。ホワイトヘッドは環境と有機体が共に連帯して、新しい価値を創造するという発想をもっていた。

なお環境問題の見方としてポラニーなどの経済構造的な意味や人間破壊への連なりを確認した。この背後には自然と人間の商品化、社会の合理化、経済システムと生活システムの対立などがある。

第2章ではホワイトヘッドの脱近代の思想とホワイトヘッドと環境倫理とのかかわりを論じた。まず近代の機械論的自然観、孤立的人間観、生存競争的人間観の克服をとおしてホワイトヘッドの脱近代の思想をレビューした。機械的自然観では、デカルトの二元論や機械論が根底にあり、孤立的人間観では、他者もまたその主体的性格が剥奪され、万人の万人に対する戦いとなり、そこで主体—主体のコミュニケーションが重要となってくる。生存競争的人間観では、関連して、生存競争に関してホワイトヘッドのダーウインの評価を示した。ホワイトヘッドによれば生存競争は進化の原因の一つにすぎないという。そこで異種個体間の相互作用を重視する共進化や、ブクチンの小規模な自治体によって自然破壊を食い止めることなどが注目されるのである。

また下記の主要な環境倫理を取り上げ、環境倫理の中心的な論点に踏み込んで、思想間の対立点を検討し、ホワイトヘッドによる対立の乗り越えを考察した。つまりホワイトヘッドは現実の机や人間など(ネクサスという)の根底に、物質的なアトムでもあり精神的なモナドでもあるメタの現実的実質をおくことによって、人間中心主義と自然中心主義との関係をのりこえたのである。またレオポルドのコミュニテイはホワイトヘッドの有機体の理論に由来するといひ、McDaniel はレオポルドとホワイトヘッドの強い平行関係を論じているし、またレオポルドは生命共同体の全体の利益をいいホワイトヘッドと似ている。またナッシュの「岩は権利をもつか」はレオポルドの土地倫理を精緻化したものである。キャリコットの自然の権利は、権利というヨーロッパの伝統的な理念と、動物という生物学的存在あるいは生態系という自然科学的概念を結びつけたものである。またネスとホワイトヘッドにも親近関係がある。McDaniel は土地倫理とシンガーやレーガンの動物解放は一つの環境倫理に統合されるべきという。というのも人間を含めて個々の生き物は内在的価値があり、孤立しては存在できないからだとする。また世代間倫理に関しては、ヨナスはホワイトヘッドの影響を受けていることに注意したい。世代間倫理は、4章でのべるように、現実的実質の連帯性から当然のことといえる。一方環境社会派のブクチンはプロセスの哲学をよく理解していたことがわかる。

(3) 第2部(3章、4章、5章、補論)のポイント

第3章では、ホワイトヘッド及びホワイトヘッドの研究者の思想の流れと独自性を検討し、それを現実的な意味へつなげたい。

まずホワイトヘッドの思想の形成過程を、主著『過程と実在』や他の著作との関係を明らかにし、『過程と実在』の構造を明らかにした。第1部は、宇宙論を組み立てる諸観念の構図である思弁的構図、第2部はデカルト、ニュートン、ロック、ヒューム、カントなどの検討による議論と応用、3部は宇宙の発生理論である抱握論、4部は宇宙の形態理論である延長の理論、第5部は宇宙論の究極的方法である最終的解釈となっている。また4章でのべる例えば「現実的実質(actual entity)」など、環境思想を論ずるうえでのホワイトヘッドに特有な概念・用語(ターミノロジー)の背景や変化を指摘するとともに、内容をわかりやすく示した。つまり関連する哲学について、デモクリトスの原子、ライプニッツのモナドロジー、ロックの力、デカルトの二元論、機械論などを基に説明した。さらに世界のプロセスの構造、すなわち現実的実質の与件→抱握→合生→満足→消滅→与件・・・の流れは世界の実体を表したモデルとなっている。このモデルのうち「抱握」と「合生」は4章でのべるが、「満足」は専門的な概念であり生態系における調和の状態とも考へうる。

次にホワイトヘッドの思想の根底にある「モノからコト(出来事)へ」という考えが、4章での「現実的実質」の発想へとつながっていくものであり、ホワイトヘッドの思想形成に大きな影響を及ぼしていることを指摘した。現実的実質は、中期では出来事とよばれ、『過程と実在』で現実的実質となった。なおモノからコトへは工学の発想にも通じるもので、結果や生産重視ではなく、関係性を重んじる発想である。

量子論のホワイトヘッドに対する影響はいわゆる「量子化」という概念である。ホワイトヘッドは、電子などにみられる非連続な性質、すなわち同一の電子なのにとびとびにしか確認できない、つまりわれわれの世界を構成する物質の最小単位は、非連続に連続しているとみた。ここにホワイトヘッドへの量子力学やベルクソンの影響がみてとれる。

しかしホワイトヘッドの理論にも問題点がある。例えば擬人化で、感情、目的、理想、意識といった言葉をあらゆる存在に適用することや、功利主義など社会哲学の記述が少ないこと、ホワイトヘッドのもっていた言語への不信などがあげられる。

さらに方法論として弁証法的手法等に注目し、プロセスと弁証法やコントラスト(対照化)との関係を考察した。例えば Nussbaum はホワイトヘッドの弁証法的性格を論じている。

第4章では、ホワイトヘッドの哲学と環境問題との主要なかかわりを検討した。

まずこれまでの様々なコスモロジー（世界観）を検討し、その中での有機体の思想である生命体の特徴と組織化の程度との関係を取り上げつつ、それとの対比において、ホワイトヘッドの独自の有機体の思想や環境に対する見方を位置づけた。

具体的にはまず目的論、全体論、有機体論、システム論などとの対比においてホワイトヘッドの独自のコスモロジーについて考察を深めた。それは人間も環境も、全てが全てと関係しあい、目的、価値の実現のために、共に連帯して生きるという発想である。ホワイトヘッドの世界観は基本的に有機体論であるが、目的論、システム論などが複合しているといえる。

ホワイトヘッドによれば、有機体という観念は静的な有機体ではない。それは産出の過程にある未完性なものであり、宇宙が膨張することが過程の第一義的意味であるという。またデカルトにとって、物体の原初的属性は延長であるが、有機体の哲学にとって、物的契機（カタル）の原初的關係性は、延長的結合であるという。ここで延長的結合とは、有機体の哲学にとって形而上学的な場でもあり、非連続に生成消滅するのである。そして有機体の哲学はカント哲学の逆転であるという。つまりカントにとって、世界は主観から出発するが、有機体の哲学にとって主体というよりも（後続する世代の諸々の現実的実質の合生のための一定の客体として機能する）自己超越体は、世界から創発する。そして身体は外界の一部、自然の一部である。

次に世界の構成要素である有機体（現実的実質）について、デモクリトスの原子論、ライプニッツのモナドロジー、さらには相対性理論、量子力学などのかかわりや、現実的実質の成り立ち、現実的実質と（モノを含めた広い意味での）、創造的で、活動的、目的を持った生命、経験（経験の滴りとしての現実的実質）などとの関係を明らかにした。

つまり現実的実質は、生きているデモクリトスの原子（アトム）、窓を持つライプニッツのモナド、量子力学でいうなら生きている量子といえる。しかしホワイトヘッドは、むしろスピノザの様態と近いともいっている。

ホワイトヘッドは現実的実質についてこういっている。生き残るという価値に関するかぎり、ほぼ 8 億年という過去の歴史をつ一塊の岩石は、どのような国民が達成している寿命をも、はるかに超えているのである。また現実的実質は複合的で相互依存している経験のしずくであると。このようにホワイトヘッドは、世界が大宇宙と小宇宙がくりかえし潜勢を現実にかえていく自己創造的なものとみた。間瀬は、経験は何よりもまず客観が主観を限定することから始まり、人間を含むすべての経験構造は、原初的には情緒的なものであり、さらに **Nobo** は、創造的な連帯性の形而上学へ向けて、経験と世界における創造的連帯を論じている。

さらに世界の構成（創造）に関して、ホワイトヘッドのいう現実的実質同士の関連の流れ（プロセス）について検討した。ホワイトヘッドはプロセスの思想の先駆者といわれる。プロセスを形成している「抱握（Prehension）」（現実的実質同士のベクトル的な主体化、客体化の関連様態）や、それらの現実的実質の関連のあり方を決定し、「多」くの現実的実質から「一」の現実的実質への収束の

過程である「合生(Concrescence)」の概念を明らかにし、そのプロセスが具体的な世界を創造していると指摘した。新しさに基づいて、一つの現実的実質は宇宙における新たな一つの形相となるのである。

抱握には物的抱握／観念的抱握、積極的抱握／消極的抱握などの種類がある。抱握には例えば読書によって過去の思想をよみがえらせるといった、死んだものを生き返らすという意味があり、また積極的抱握は出会い若しくはフィーリングとよばれる。合生は相から相への動きであり、物的相→比較の相→補完相→統合相へと展開する。

さらにホワイトヘッドの知覚論として、環境からの促しである因果的効果、目の前に展開する現示的直接性、それら2つを統合する象徴的関連付けからなる環境の知覚と、五感を通しての環境の把握との関係を考察した。この知覚論は具体性があり、人間を含めた現実的実質の環境との一体化をいっており、これはいわゆる自然や環境とのふれあいと関係する。たとえば公園での自然との出会いや身体を通して他の世界とつながっていることによる、人間と環境との持続的な相互作用をいっている。

さらにホワイトヘッドにおける「秩序」と社会の構造化との関連を明らかにした。ホワイトヘッドは、社会の見方に関して細胞社会、粒子社会、細胞社会などを区別するが、「秩序」というキーワードに関して、Kunz はリズム、経験の秩序(死せる自然から生きた自然へ)、文明の調和、体系の秩序など総合的に論じている。

なおホワイトヘッドは社会問題への関心として、例えば女性の参政権と政治、産業、労働・労働政策、政治に関して発言している。続けてホワイトヘッドの哲学における目的と文明論をのべた。文明論としてホワイトヘッドは真理、冒険、美、芸術、平安(諸調和の調和)などをあげている。

ところでホワイトヘッドのいう永遠的客体は、可能界の対象であり、直接的経験に訴えることなしに理解しえて時空をこえたものであり、例えば数学的なプラトンの形相、情動、好み、忌避などがある。

さらにホワイトヘッドの今日にも通じる環境思想の評価をのべた。ナッシュはホワイトヘッドが内在的価値の哲学的な基礎作業を据えたという。マーチャントはアクチュアルであることがプロセス(過程)であり、原子と分子はそれぞれの物質ではなく、エコシステムとして観察されねばならず、それぞれの個物は内在的な価値をもつという。Garr は宇宙を守るための自由、環境的に持続的な文明の創造をいう。

さらにカブなどのホワイトヘッドの後継者の思想をのべた。カブはディーブエコロジーとプロセスの哲学、公益、共同体、プロセスと組織、共通善、持続的な農業、ホワイトヘッドと人間学、偶像としての経済主義、世界の貧困や環境問題の構造を分析し、それを克服する道を探求しており、また地域コミュニティ、キューバの小規模有機農業を評価している。Muraca は、連帯と自然の尊敬はわれわれの自由を見直し、創造性を限定するものではないという。

5章では、これまで検討してきたホワイトヘッドの哲学理論の現実への応用

を考察した。

ところでホワイトヘッドはブラジルの森林についてのべ、森林という一つの生態系に関する見解を示し、森林の有機形態についてのべており、これは今日の生物多様性の議論と関連するものがある。

まずホワイトヘッドのシステム論(プロセス)と持続、現実的実質、持続可能性(Sustainability)、連帯と共生の関係をのべた。ホワイトヘッドは生きている社会の場合、環境との相互作用は食物の強奪という形をとるといい、この点で道徳が生命にとって焦眉のものとなるという。ここにはホワイトヘッドの社会観、倫理観がよく現れている。

伊藤はシステム論とプロセスとの対応を以下の4つにまとめている。1) 現実の相は、抱握的統一体である、2) 始原的有機体、基礎的有機体、上位の有機体といった有機体の存続パターンがあり、下位のパターンから進化し、多様な有機体が創造してくる、3) 有機体と環境との機能的適応(ファースト・サイバネティクス)、4) 有機体はみずからの環境を創造できる(セカンド・サイバネティクス)。

共生に関して間瀬のスチュワードシップでは、人は大地との運命的な連続性のゆえに大地にやさしく配慮する「スチュワード」であり、ここに「共生」の積極的な意味があるという。共生はエコロジカルな生き方の基本、モラルの基本であり、未来世代に対する配慮が欠かせないという。田中は共在と連帯に関して、諸々の個物の特殊性と価値の多様性が、事物の連帯性にとって必要不可欠である。ホワイトヘッドの哲学は、生活世界における直接経験の構造から出発しており、連帯性と共在性を自覚する個々の現実的実質は、他の全ての存在を含んで現成することによって独自の価値を実現する。そして人間中心主義からの展開などをいう。

さらにホワイトヘッドの哲学と、コミュニケーションの視点から、共生型持続社会との関連を論じた。抱握は究極のコミュニケーションであり、異質な現実的実質のコミュニケーションと創造に関係する。ホワイトヘッドによれば単位としての小宇宙が合生して大きな宇宙、すなわち共同体(community)を形成しているという。ホワイトヘッドやカブラによるコミュニテイの意味(コミュニテイのコミュニテイ)を明らかにし、Okamotoのコミュニテイにおける実践を通して、持続可能な農業の実際とホワイトヘッドの哲学との関連を明らかにした。Okamotoの論文は、農業の現場からの報告でリアリティがあり、貴重な論文である。

さらに環境に配慮した未来社会に関して、無公害社会、環境破壊、リサイクル、生物多様性、里山と癒しの空間、自然への畏敬、現実的実質の連帯性などとの関連を、ホワイトヘッドの思想を用いて考察した。

補論では、ホワイトヘッド独自の造語である、現実的実質、プロセス、抱握、合成の主要な用語について、ターミノロジー学の視点から二重の意味や表記や概念を検討し、全体的に研究を深めその重要性を強調した。

(4) 本論の研究目的への到達点を考察する。ここでは多面的な視点の絡まり

の中で考える。

第一の課題は、環境の側面からみたホワイトヘッ드의哲学の独自性の解明、環境思想における位置づけである。後述するようにホワイトヘッドには理論の独自性や、環境思想やプロセスの思想の先駆者としての面もある。ここではホワイトヘッドの思想の全てではなく環境問題とのかかわりを考えるうえでの必要な範囲に止め考察する。

本論ではまず理論的に環境問題を考える上で必要なホワイトヘッドの根本の思想を、デモクリトス(原子)、デカルト、ロック、ヒューム、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、ベルクソンなどの哲学思想、さらには相対性理論、量子力学との関係を通して、ホワイトヘッドの独自性を明らかにした。それは反デカルト主義つまり反機械論、身心などの二元論への批判が基調となっており、独自の有機体の理論に基づいた、端的には世界の構成要素としての、主客未分の「現実的実質(actual entity)」に現れている。ここで現実的実質とは、アトム的な物質の面とモナド的な精神の面を併せ持った究極のもので(一元論)、有機体はこうした現実的実質の性格に依拠する。世界を形成する(発生してくる)現実的実質は、ロックやデカルト批判の上に立ったホワイトヘッドに特殊な経験論が基本にあり、存在するものにとって経験を豊かに積み上げること(経験の滴り)が目的となる。しかしこの経験は決して意識的な経験(人間中心主義的な)ではなく、むしろ意識が経験を前提にしており、4章のホワイトヘッドの知覚論でのべたとおり物とのふれあいや体験について注目したい。このようにホワイトヘッドの経験概念は人間中心ではなく、一つの現実的実質(後述)における心的局と物的極の共在の発想が注目される(鉱物であっても極わずかの心をもつ)。しかし他方でホワイトヘッドは人間経験の底には植物や動物にはみられない情動、美や知的な優雅さがあるともいっている。ここにホワイトヘッドの人間学の可能性を見ることができないのではないか。

こうしたホワイトヘッドの環境論は、これまでの環境思想と密接に関連する。例えば2章でみたように環境倫理との関係では、レオポルド、ネスとの関連や、ヨナスやブクチンへの影響などがある。また実際にもホワイトヘッドの環境理論の評価として、ナッシュはホワイトヘッドは根本的な意味での生態学的世界観をもっていたといい、マーチャントは、ホワイトヘッドのエコシステム、自然の内在的な価値に注目している。また環境倫理に対しては、ホワイトヘッドのいう物としてのアトム的な面とモナド的な精神的な面等の統一としての現実的実質の概念で、環境倫理の対立をのりこえていることに注目したい。なおさらにホワイトヘッドは、存在論的原理などもふまえており環境倫理から環境哲学へ踏み出しているのではないかと考えられる。

一方世界創造の面、つまりプロセス(過程)の面では、ホワイトヘッドはシステム理論の先達という評価があり弁証法とも関係するが、このプロセスにおける独自の具体的な概念として、現実的実質同士のフィーリング(感受)に始まる「抱握(prehension)」と「合生(concrescence)」が注目される。抱握と合生は、論理的にいえばANDとORの関係にある。そして抱握と合生によって現実的実質はお互いに成長するのである。

「抱握」は物的抱握／観念的抱握、肯定的抱握／否定的抱握などいろいろな種類があり、「抱握」は具体的には、死んだ自然を生きた自然にもたらずという意味がある(例えば読書によって過去の思想がよみがえるなど)。つまりホワイトヘッドにおいては全てが全てと主体—主体で関係するのである。

なおフィーリング(感じ)は積極的抱握であるが、感じに基づいて諸抱握が形成され、その現実的契機の生成が方向づけられるのであるが、性質的には受動的なことに注意したい。

一方合生は、「多」くの現実的実質から「一」つの現実的実質への決定と収束であり、つまり抱握における可能性から現実への展開ということである。最初の物的相→比較の相→補完相→統合相への相から相への展開などがあり具体的に世界が形成されていく。もちろんこれら現実的実質相互の葛藤や反対もあり、実際は複雑なプロセスをたどる。こうした合生の考えは、物事の決定や合意形成の理論として役立つのではないかと思われる。

現実的実質とも関連して、こうした独自の発想の理論的背景としては、既に述べたように方法論としての存在論や存在論的原理、広範な総合性、現実から出発するリアリティ、微小なものから世界、宇宙までを統一的に説明している、一貫した体系性(カテゴリー)、弁証法とも類似したコントラスト(対照化)などが関係する。

またこれはあくまでも方法上の類似点であるが現象学の射影とホワイトヘッドの遠近法の類似、志向性と抱握との類似性に注目する研究者もいる。なお身体に関してはメルロ＝ポンティの哲学との親近性がある。さらにこれまで出てきた「現実的実質」、「抱握、合生」などは、概念・用語学(ターミノロジー学)の視点からもとらえられ、5章でホワイトヘッドの言語観とも関係し重要である。用語における複合的な概念内容、表記について注意し言語へつなげたい。

第二の課題は、ホワイトヘッドの哲学の環境問題としての独自性にたった現実への応用であり、これが出来ることでホワイトヘッドの哲学と現実とのかわりが明確になる。

環境問題への理論的応用では、これまでのべてきたホワイトヘッドの基本思想、視点、概念などが重要となる。まずホワイトヘッドの見る環境の視点は、存在論的、有機体の環境との一体化、人間と環境との相互作用による価値の創造であり、こうした発想は今日の環境思想へ影響を与え、またある意味環境哲学の先駆者ともみられよう。ここで価値の創造とは例えばよりよく生きるなどであるが、ここには価値と自由の問題がある。

まず環境問題における現実への応用の視点はプロセスにおける連帯と関係であり、これはモノの尊重、環境破壊の防止、リサイクル、生物多様性の理論や実践などと結びつく。

例えば田中は著書『ホワイトヘッド』のなかで仏教学者のクックのエピソードに基づいて有機体の哲学を深い意味でのエコロジーとみている。つまり「箸を捨てる」ことが、箸に「殺される」ということで、我々は自分ひとりだけでいるのではなく、他者(この場合箸によっていかされているとのべている。

具体的には共生型持続社会に関してはホワイトヘッドの思想は、コミュニケーションにおける共生との関連があり、相手の価値を認め、人間も自然も共に目的をもって、価値を実現していくという意味では共生型持続社会と矛盾するものではない。

ところでホワイトヘッドは彼なりの農業観をのべている。文明への決定的な一歩として。農業の導入に高い地位を認めている。具体的なコミュニティにおける農業においては、カブの共同体では個別的に自立したコミュニティやコミュニティのコミュニティを重視している。これはホワイトヘッドのいう大宇宙と小宇宙の調和の思想と符号するのではないか。

一方 *okamoto* は自然との調和や日本的な家族農業などのコミュニティを重視し、素質、知識、知恵による農業のプロセスをみており、不足の事態への予見やそのための知恵が重要であるという。農業コミュニティの持続のためには単に自分だけの安寧にのみ関心を持つてはいけなくて、より広いコミュニティの暮らしにコミットしている。しかし *okamoto* は一方で日米の農業のスケールの差や、アメリカにおける大規模農業としてのマーケティング、機械やコンピュータ使用の現状も受け止めている。特に将来のリスクへの対処や、ホワイトヘッドのいうビジネスマインドは、農業にとっても必要であるともいっている。いわゆるホワイトヘッドのコントラスト的な見方で、ここには小規模な有機農業と大規模農業との両面を見ており、やはりホワイトヘッド的な方法(コントラスト)が必要である。

さらに未来の環境社会は、ホワイトヘッドによれば全てが全てと、主体—主体の関係で連帯し、互いの価値を認め、新たに価値を創造していく社会である。具体的にはホワイトヘッドの言う現実的実質の「満足」(目的を達することや生態学的調和)の概念や、生物多様性に関して安定した気候、清らかな水や大気、多様な生物形や自然環境、また里山に関して癒しの空間として鉱物、植物、動物、人間の共存する場であること、自然共生の知恵と心が重要であることなどにホワイトヘッドの思想は示唆するものが多い。また先進的な環境調和型の街づくりの推進としては、例えば1章でもふれたが、ゼロエミッションとリサイクルで廃棄物をゼロにするという経産省のエコタウン、(バイオマスにはいろいろな考え方があがるが)、バイオマス・ニッポンという理念の下、バイオマスを最大限に活用すし、アジア諸国との連携の下、バイオマスの発生から利用までが効率的なプロセスで結ばれるという農水省のバイオマスタウン、文化庁の景観保全などに関係してくるのではないか。

さらに国際的にみるとホワイトヘッドの現代の後継者としてカブは多方面に *earthism* (コミュニティにおいて人々が互いに持続のために必要なものを適正に供給しあう)、コミュニティのコミュニティ、小規模な有機農業の評価、魚の乱獲に対する生態学的アプローチの必要性、また生物多様性、森林、水を論じている。*Muraca* は文化・自然・社会の相互連携にたち、ホワイトヘッドのプロセス哲学は持続のバックボーンをなすという。

(5) 展望として、本研究では、有機体とプロセスの哲学によって、ホワイトヘッドの独自の環境思想を位置づけ、今日の環境問題へ与える影響や、未来の環境に配慮した社会に示唆するものはなにかを明らかにした。今後の課題としては、

① ホワイトヘッドと社会哲学の展開

一般にホワイトヘッドには功利主義や社会哲学の論述が少ない。またこれはホワイトヘッドの言語の問題、つまり言語への不信とも関わると思うが、そうした言語との絡みで合意形成の問題などが展開できないか。とくにホワイトヘッドの言語についてはターミノロジー(用語)が重要であり、言語への突破口としたい。

② 環境問題への実際のかかわりの研究などがある。

ホワイトヘッドの社会的な政策面に関しては、必ずしも研究書のレベルとはいえないが『観念の冒険』など丹念に追っていけばいろいろ見えてきて、研究の可能性もでてくるのではないか。例えば文明論の視点からホワイトヘッドと多国籍企業、国連との関連などが考えられる。

ところでホワイトヘッドは生涯様々な研究者、思想から影響を受けており、総合的で発想が豊かであった。一方で、科学や言語の不完全性を知っており、距離をとっているようにも思える。ホワイトヘッドの方法は独自のものであるが、とくに特定の拠って立つ方法が無いともいえるのではないか。だからこそ総合的で、体系的でリアリティをもっていたのであろう。ホワイトヘッドの世界は未開の分野である。本研究では宗教や教育なども論じきれなかったがホワイトヘッドには未知の分野が開けているし、またホワイトヘッドの哲学は、本来的に主体—主体の希望の哲学である。

注・参考文献

邦文献

- 市井三郎、『ホワイトヘッドの哲学』、第三文明社、p.168
伊藤重行、『システム哲学序説』、勁草書房、1996
尾関周二、『環境と人間学の革新』、青木書店、2007
気候変動に関する国際連合枠組条約の京都議定書（京都議定書）、第3回気候変動枠組条約締約国会議（地球温暖化防止京都会議、COP3）、1997
田中裕、『ホワイトヘッドー有機体の哲学』、講談社、1998、
田中裕、『逆説から実在へー科学哲学・宗教哲学論集』、行路社、1993
中村昇『ホワイトヘッドの哲学』、講談社、2007
間瀬啓允、『エコフィロソフィ提唱』、法蔵館、1991
間瀬啓允、生命中心の自然理解と倫理、IN:（環境倫理の課題）、行路社、1993
山本誠作、『ホワイトヘッドと現代』、法蔵館、1991

邦訳文献

- 環境と開発に関する世界委員会編、『地球の未来を守るために』、大来佐武郎監修、環境庁国際環境問題研究会訳、福武書店、1987
カント、I.,『判断力批判』篠田英雄訳、岩波文庫、1964
クント、P.G.,『ホワイトヘッドー秩序への冒険』、一ノ瀬正樹訳、紀伊国屋書店、1991
シャバーン、D.,『過程と実在への鍵』、松延慶二・平田一郎訳、晃洋書房、1994
シンガー、P.,『実践の倫理』、山内友三郎、塚崎智訳、昭和堂、1979
シンガー、P.,『動物解放論』、戸田清訳、技術と人間社、ローマクラブ、大来佐武郎訳、『成長の限界』、ダイヤモンド社、1972
ナッシュ、R.,『自然の権利ー環境倫理の文明史』、松野弘訳、ちくま学芸文庫、1999
デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波文庫、1997
ネス、A.,『ディープエコロジーとは何かーエコロジー、共同体、ライフスタイル』、斎藤・開訳、文化書房博文社、1997
ブクチン、M.,『エコロジーと社会』、萩原なつ子ほか訳、白水社、1996年
プライス、R.『ホワイトヘッドとの対話 1934-1947』、岡田雅勝・藤本隆志訳、みすず書房、1980
ヘーゲル、G.W.E.,『精神現象学』樫山欽四郎訳、平凡社ライブラリー、1997
K.ポランニー『大転換ー市場社会の形成と崩壊』吉沢・野口・長尾・杉村訳、東洋経済新報社、1975
ホワイトヘッド、A.N.,ラッセル、B.,『プリンキピア・マテマティカ序論』、岡本賢吾〔ほか〕訳、哲学書房、1988.7
マーチャント、C.,『自然の死ー科学革命と女・エコロジー』、団・垂水・樋口

訳、工作社、1985
 マーチャント、C.,『ラディカル・エコロジーー住みよい世界を求めて』、川本・須藤・水谷訳、産業図書、1994年
 マルクス、K.,『経済学・哲学草稿』城塚・田中訳、岩波文庫,1964
 ラブロック、E.,『地球生命圏ーガイアの科学』、星川淳訳、工作舎、1984
 レオポルド、A.,『野生の歌がきこえる』、新島義昭訳、講談社学術文庫、1997
 ロック、J.,『人間知性論』大槻春彦訳、岩波文庫,1972
 ローマクラブ、大来佐武郎訳、『成長の限界』、ダイヤモンド社、1972
 ヨナス、E.,『責任という原理』、加藤尚武監訳、東信堂,2000

洋文献

Cobb,JCobb,J.B.Jr., "Sustaining theCommon Good",Clevelandnd,Ohio,Pilgrim Press,1994
 Merchant,C., Radical ecology:the Search for a Livable World,Taylor and Fransis,2005,133-134
 Naess,A . , The pluralist and Possibilist Aspect of the Scientific Enterprise,p.103,Allenn & Unwin
 Nash,R., The Right of Nature,Univ. Wisconsin Press,1989,62
 Whitehead,AN. , An Inquiry Concerning the Principles of Natural Knowledge,1919 (ホワイトヘッド『自然認識の諸原理』、藤川吉美訳、松籟社,1991)
 Whitehead,AN., The concept of Nature,1919 (ホワイトヘッド『自然という概念』、藤川吉美訳、松籟社,1992)
 Whitehead,AN, .The Principle of Relativity,1922 (ホワイトヘッド『相対性原理』、藤川吉美訳、松籟社,1991)
 Whitehead,A.N.,science and the Modern World,Macmillan,1925 (ホワイトヘッド、『科学と近代世界』、上田泰治・村上至孝訳、松籟社,1991)
 Whitehead,AN., Religion in the Making,1926 (ホワイトヘッド『宗教の諸段階』、斎藤繁雄訳、松籟社,1995)
 Whitehead,AN., The aims of Education and Other Essays,1949 (ホワイトヘッド『教育の目的』、森口兼二・橋口正夫訳、松籟社,1986)
 Whitehead,A.N., Process and Reality,Free Press,1978, (ホワイトヘッド『過程と実在』、山本誠作訳、松籟社,1992)
 Whitehead,A.N., Adventures of Ideas,Cambridge University Press,1961, (ホワイトヘッド、『観念の冒険』、山本誠作・菱木政晴訳、松籟社,1988)
 Whitehead,A.N., Modes of Thought,Macmillan,1938 (ホワイトヘッド『思考の諸形態』、藤川吉美・伊藤重行訳、松籟社,1990)
 Whitehead,AN., Essays in Science and Philosophy,1947 (ホワイトヘッド、『自然科学論集』上、村形明子・蜂谷昭雄・井上健訳、松籟社,1989)

雑誌

「プロセス思想」、日本ホワイトヘッド・プロセス学会発行
Process Studies、Published by The Center for Process Studies, Claremont
Schol of Theology

謝 辞

本稿を執筆できましたのは、在籍する環境共生哲学研究室の指導教官である尾関周二先生、副指導教官の淵野雄二郎先生・津谷好人先生、環境倫理学研究室の亀山純生先生、副査をしていただいた中川光弘先生のご指導の賜物です。

さらに環境共生哲学研究室のみなさん、及び自主ゼミ等の仲間から与えていただいた様々な示唆や刺激に感謝いたします。

また共生社会システム学会の論文の査読でのご配慮や、総合人間学会、唯物論研究会、情報文化学会でのみなさまからのご厚誼にも感謝申し上げます。